平成20(2008)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

大坪大縄手遺跡
殿所在遺跡
勝見谷奥所在遺跡
松原古墳群・松原所在遺跡
本高弓ノ木遺跡
宮谷古墳群
徳尾古墳群
里仁36号墳
天神山遺跡
城山城跡
卯垣古墳群
蔵見古墳群
最勝寺山城跡
津ノ井49号墳
海士所在遺跡
鳥取城三ノ丸跡

2009

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成19年度及び平成20年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査の記録です。

鳥取市は平成16年11月に周辺８町村と合併し、人口約20万人を擁する山陰地方最大の都市になりました。鳥取市内の平野部をはじめ、丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

なお、この報告書は不十分なところも多くありますが、私たちの郷土の理解に役立てていただくと共に、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成21年３月

鳥取市教育委員会
教育長　中川俊隆

例　　言

1．本書は平成19年度及び平成20年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
2．調査を実施した遺跡は大坪大縄手遺跡、殿所在遺跡、勝見谷奥所在遺跡、松原古墳群・松原所在遺跡、本高弓ノ木遺跡、宮谷古墳群、徳尾古墳群、里仁36号墳、天神山遺跡、城山城跡、卯垣古墳群、蔵見古墳群、最勝寺山城跡、津ノ井49号墳、海士所在遺跡、鳥取城三ノ丸跡である。
3．大坪大縄手遺跡のトレンチ番号は、平成16年度に実施した大坪岸ノ上遺跡からの通し番号である。
4．本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海抜標高である。
5．第３章は西尾孝昌氏（域郭談話会）に寄稿していただいた。
6．平成19年度に実施した東の城域航空測量業務は（株）ワールドへ委託した。
7．平成20年度に実施したボーリング調査業務は曙工舎（有）へ委託した。
8．発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
9．発掘調査の体制は以下のとおりである。

発掘調査主体　鳥取市教育委員会
事　務　局　鳥取市教育委員会事務局文化財課
調 査 担 当　加川　崇、坂田邦彦、細田隆博、前田　均、谷口恭子、山田真宏、神谷伊鈴、田鍬美紀

10．発掘調査から本書の作成に当たっては、多くの方々からの御指導・ご助言並びに御協力をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

赤木三郎　浅川滋男　北垣聰一郎　久保穣二朗　田中哲雄　谷本　進　錦織　勤
西尾孝昌　麓　和善　山名　巌　吉村元男　鳥取県教育委員会事務局文化財課
鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取県立博物館　鳥取市歴史博物館

凡　　例

1．報告書に記載されている●印は土器、▲印は石の出土位置を表す。
2．報告書に記載されている略号は以下のとおりである。

ピット：P　土坑：SK

本　文　目　次

序・例言
第１章　発掘調査の経緯 …… 1
　　１．発掘調査の契機 …… 1
　　２．発掘調査の経過 …… 1
第２章　調査の結果 …… 3
　第１節　大坪大縄手遺跡 …… 3
　第２節　殿所在遺跡 …… 10
　第３節　勝見谷奥所在遺跡 …… 12
　第４節　松原古墳群・松原所在遺跡 …… 13
　第５節　本高弓ノ木遺跡 …… 24
　第６節　宮谷古墳群 …… 34
　第７節　徳尾古墳群 …… 36
　第８節　里仁36号墳 …… 37
　第９節　天神山遺跡 …… 41
　第10節　城山城跡 …… 44
　第11節　卯垣古墳群 …… 47
　第12節　蔵見古墳群 …… 48
　第13節　最勝寺山城跡 …… 51
　第14節　津ノ井49号墳 …… 52
　第15節　海士所在遺跡 …… 53
　第16節　鳥取城三ノ丸跡 …… 56
第３章　史跡鳥取城跡中世城館等分布調査 …… 60
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査遺跡位置図 …… 2
第２図　大坪大縄手遺跡調査トレンチ位置図 …… 3
第３図　大坪大縄手遺跡第39・第40・第44トレンチ実測図 …… 5
第４図　大坪大縄手遺跡第41・第42トレンチ実測図 …… 6
第５図　大坪大縄手遺跡第43・第45トレンチ実測図 …… 7
第６図　大坪大縄手遺跡第46・第47トレンチ実測図 …… 8
第７図　大坪大縄手遺跡第46・第47トレンチ出土遺物実測図 …… 9
第８図　殿所在遺跡調査トレンチ位置図 …… 11
第９図　殿所在遺跡第１トレンチ実測図 …… 11
第10図　殿所在遺跡第１トレンチ出土遺物実測図 …… 11
第11図　勝見谷奥所在遺跡調査トレンチ位置図 …… 12
第12図　勝見谷奥所在遺跡第１トレンチ実測図 …… 13
第13図　松原古墳群・松原所在遺跡調査トレンチ位置図 …… 14
第14図　松原古墳群第１・第２・第３トレンチ実測図 …… 15
第15図　松原古墳群第４・第５・第６・第７・第８・第９トレンチ実測図 …… 16
第16図　松原古墳群第10・第11・第12・松原所在遺跡第13トレンチ実測図 …… 18
第17図　松原所在遺跡第14・第15トレンチ実測図 …… 20
第18図　松原所在遺跡第16・第17トレンチ実測図 …… 21

第19図　松原古墳群・松原所在遺跡第10・第13・第17トレンチ出土遺物実測図 …… 22
第20図　松原所在遺跡第18・第19トレンチ実測図 …… 23
第21図　本高弓ノ木遺跡調査トレンチ位置図 …… 24
第22図　本高弓ノ木遺跡第１・第２・第３トレンチ実測図 …… 26
第23図　本高弓ノ木遺跡第４・第５・第６トレンチ実測図 …… 27
第24図　本高弓ノ木遺跡第７・第８・第９トレンチ実測図 …… 29
第25図　本高弓ノ木遺跡第10・第11・第12トレンチ実測図 …… 30
第26図　本高弓ノ木遺跡第13・第14・第15トレンチ実測図 …… 31
第27図　本高弓ノ木遺跡第１・第２・第５・第６トレンチ出土遺物実測図 …… 32
第28図　本高弓ノ木遺跡第８・第９・第12トレンチ出土遺物実測図 …… 33
第29図　宮谷古墳群調査トレンチ位置図 …… 34
第30図　宮谷古墳群第１・第２・第３・第４・第５トレンチ実測図 …… 35
第31図　徳尾古墳群調査トレンチ位置図 …… 36
第32図　徳尾古墳群第１・第２・第３トレンチ実測図 …… 37
第33図　里仁36号墳調査位置図 …… 37
第34図　里仁36号墳第１・第２・第３・第４トレンチ実測図 …… 38
第35図　里仁36号墳出土遺物実測図(1) …… 39
第36図　里仁36号墳出土遺物実測図(2) …… 40
第37図　天神山遺跡調査トレンチ位置図 …… 41
第38図　天神山遺跡第１・第２トレンチ実測図 …… 42
第39図　天神山遺跡第１・第２トレンチ出土遺物実測図 …… 43
第40図　城山城跡調査トレンチ位置図 …… 45
第41図　城山城跡第１・第２・第３トレンチ実測図 …… 46
第42図　卯垣古墳群調査トレンチ位置図 …… 47
第43図　卯垣古墳群第１トレンチ実測図 …… 47
第44図　蔵見古墳群調査トレンチ位置図 …… 48
第45図　蔵見古墳群第１・第２・第３トレンチ実測図 …… 49
第46図　蔵見古墳群第４・第５トレンチ実測図 …… 50
第47図　蔵見古墳群第１トレンチ出土遺物実測図 …… 50
第48図　最勝寺山城跡トレンチ位置図 …… 51
第49図　最勝寺山城跡第１トレンチ実測図 …… 52
第50図　津ノ井49号墳トレンチ位置図及び第１トレンチ実測図 …… 53
第51図　海士所在遺跡トレンチ及びボーリング調査位置図 …… 54
第52図　海士所在遺跡第１・第２トレンチ実測図 …… 55
第53図　鳥取城三ノ丸跡トレンチ位置図 …… 56
第54図　鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ実測図 …… 57
第55図　鳥取城三ノ丸跡第２トレンチ実測図 …… 57
第56図　鳥取城三ノ丸跡第１・第２トレンチ出土遺物実測図 …… 59
第57図　調査位置図 …… 67
第58図　鳥取城山上ノ丸 …… 68
第59図　久松山南斜面 …… 69・70
第60図　寺屋敷周辺 …… 71・72
第61図　道祖神の上城跡 …… 73
第62図　雁金山城跡 …… 73
第63図　丸山城跡 …… 74
第64図　（伝）羽柴秀次の陣跡 …… 74

図　版　目　次

図版１
大坪大縄手遺跡調査地遠景（北から）
大坪大縄手遺跡第39トレンチ掘下げ状況（南から）
大坪大縄手遺跡第40トレンチ掘下げ状況（北から）
大坪大縄手遺跡第41トレンチ掘下げ状況（西から）
大坪大縄手遺跡第41トレンチ南壁断面（北西から）
大坪大縄手遺跡第42トレンチ掘下げ状況（東から）
大坪大縄手遺跡第42トレンチ西壁断面（東から）
大坪大縄手遺跡第43トレンチ掘下げ状況（南から）
図版２
大坪大縄手遺跡第43トレンチ西壁断面（南東から）
大坪大縄手遺跡第44トレンチ掘下げ状況（東から）
大坪大縄手遺跡第44トレンチ南壁断面（北東から）
大坪大縄手遺跡第45トレンチ掘下げ状況（南から）
大坪大縄手遺跡第45トレンチ西壁断面（南東から）
大坪大縄手遺跡第46トレンチ掘下げ状況（東から）
大坪大縄手遺跡第46トレンチ南壁断面（北西から）
大坪大縄手遺跡第46トレンチ遺物出土状況（南から）
図版３
大坪大縄手遺跡第47トレンチ掘下げ状況（北から）
大坪大縄手遺跡第47トレンチ北壁断面（南から）
大坪大縄手遺跡第47トレンチSK１・２検出状況（南西から）
大坪大縄手遺跡第47トレンチ遺物出土状況（南西から）
殿所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況（北西から）
勝見谷奥所在遺跡 第１トレンチ掘下げ状況（南から）
松原古墳群・松原所在遺跡調査地遠景（北西から）
松原古墳群 第１トレンチ掘下げ状況（南東から）
図版４
松原古墳群第２トレンチ掘下げ状況（北から）
松原古墳群第２トレンチ周溝部断面（南東から）
松原古墳群第３トレンチ掘下げ状況（北西から）
松原古墳群第３トレンチ南西壁断面（南東から）
松原古墳群第４トレンチ掘下げ状況（北西から）
松原古墳群第５トレンチ掘下げ状況（北西から）
松原古墳群第６トレンチ掘下げ状況（西から）
松原古墳群第７トレンチ掘下げ状況（西から）
図版５
松原古墳群第８トレンチ掘下げ状況（西から）
松原古墳群第９トレンチ掘下げ状況（北西から）
松原古墳群第10トレンチ掘下げ状況（北から）
松原古墳群第10トレンチ西壁断面（北東から）
松原古墳群第11トレンチ掘下げ状況（北東から）
松原古墳群第12トレンチ掘下げ状況（西から）
松原所在遺跡第13トレンチ掘下げ状況（南東から）
松原所在遺跡第14トレンチ掘下げ状況（南東から）
図版６
松原所在遺跡第15トレンチ掘下げ状況（南東から）
松原所在遺跡第16トレンチ掘下げ状況（南西から）
松原所在遺跡第17トレンチ掘下げ状況（南西から）
松原所在遺跡第17トレンチ北東壁断面（南西から）
松原所在遺跡第18トレンチ掘下げ状況（南東から）
松原所在遺跡第19トレンチ掘下げ状況（北西から）
本高弓ノ木遺跡 調査地遠景（北から）
本高弓ノ木遺跡第１トレンチ掘下げ状況（南西から）
図版７
本高弓ノ木遺跡第１トレンチ南壁断面（北から）
本高弓ノ木遺跡第２トレンチ掘下げ状況（南から）
本高弓ノ木遺跡第２トレンチ東壁断面（西から）
本高弓ノ木遺跡第３トレンチ掘下げ状況（西から）
本高弓ノ木遺跡第３トレンチSD-01検出状況（北東から）
本高弓ノ木遺跡第４トレンチ掘下げ状況（西から）
本高弓ノ木遺跡第４トレンチ北壁断面（南西から）
本高弓ノ木遺跡第５トレンチ掘下げ状況（東から）
図版８
本高弓ノ木遺跡第５トレンチ北壁断面（南東から）
本高弓ノ木遺跡第６トレンチ掘下げ状況（西から）
本高弓ノ木遺跡第６トレンチ北壁断面（南西から）
本高弓ノ木遺跡第７トレンチ掘下げ状況（西から）
本高弓ノ木遺跡第７トレンチ北壁断面（南西から）
本高弓ノ木遺跡第８トレンチ掘下げ状況（東から）
本高弓ノ木遺跡第８トレンチ西壁断面（東から）
本高弓ノ木遺跡第９トレンチ掘下げ状況（南から）
図版９
本高弓ノ木遺跡第９トレンチ遺物出土状況（南から）
本高弓ノ木遺跡第10トレンチ掘下げ状況（南西から）
本高弓ノ木遺跡第10トレンチ西壁断面（北東から）
本高弓ノ木遺跡第11トレンチ掘下げ状況（北から）
本高弓ノ木遺跡第12トレンチ掘下げ状況（南西から）
本高弓ノ木遺跡第13トレンチ掘下げ状況（北から）
本高弓ノ木遺跡第14トレンチ掘下げ状況（南東から）
本高弓ノ木遺跡第15トレンチ掘下げ状況（東から）
図版10
宮谷古墳群調査地遠景（北西から）
宮谷古墳群第１トレンチ掘下げ状況（東から）
宮谷古墳群第２トレンチ掘下げ状況（北西から）
宮谷古墳群第２トレンチ遺物出土状況（南西から）
宮谷古墳群第３トレンチ掘下げ状況（北から）
宮谷古墳群第５トレンチ掘下げ状況（北から）
徳尾古墳群第１トレンチ掘下げ状況（南西から）
徳尾古墳群第１トレンチ周溝部断面（西から）

図版11
徳尾古墳群第２トレンチ掘下げ状況（北西から）
徳尾古墳群第３トレンチ掘下げ状況（西から）
天神山遺跡第１トレンチ掘下げ状況（北東から）
天神山遺跡第２トレンチ掘下げ状況（西から）
天神山遺跡第２トレンチ東壁断面（西から）
天神山遺跡第２トレンチ遺物出土状況（北から）
里仁36号墳調査地遠景（南東から）
里仁36号墳第１トレンチ掘下げ状況（北西から）
図版12
里仁36号墳第１トレンチ西壁断面（北から）
里仁36号墳第１トレンチSK-01検出状況（北西から）
里仁36号墳第２トレンチ埋葬施設検出状況（東から）
里仁36号墳埋葬施設内遺物出土状況（東から）
城山城跡第１トレンチ掘下げ状況（北東から）
城山城跡第２トレンチ掘下げ状況（南西から）
城山城跡第３トレンチ掘下げ状況（南東から）
卯垣古墳群第１トレンチ掘下げ状況（南東から）
図版13
蔵見古墳群第１トレンチ掘下げ状況（北東から）
蔵見古墳群第２トレンチ掘下げ状況（東から）
蔵見古墳群第３トレンチ掘下げ状況（南西から）
蔵見古墳群第４トレンチ掘下げ状況（北東から）
蔵見古墳群第５トレンチ掘下げ状況（北東から）
最勝寺山城跡第１トレンチ遺構検出状況（南東から）
最勝寺山城跡第１トレンチ遺構完掘状況（北東から）
最勝寺山城跡第１トレンチSK-02検出状況（北東から）
図版14
最勝寺山城跡第１トレンチ拡張掘下げ状況（北から）
最勝寺山城跡第１トレンチSK-03完掘状況（北から）
津ノ井49号墳調査地遠景（北から）
津ノ井49号墳第１トレンチ掘下げ状況（北から）
海士所在遺跡調査地第１トレンチ遠景（北東から）
海士所在遺跡第１トレンチ掘下げ状況（東から）
海士所在遺跡第２トレンチ遠景（南から）
海士所在遺跡第２トレンチ掘下げ状況（東から）
図版15
分布調査陣城（付城）遺構北側の横堀
鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ全景（西から）
分布調査久松山南斜面矢穴の残る石
分布調査久松山南斜面矢穴の残る岩盤
鳥取城三ノ丸跡第２トレンチ全景（西から）
鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ溝状遺構（北から）
図版16
大坪大縄手遺跡第46・第47トレンチ出土遺物
殿所在遺跡第１トレンチ出土遺物
松原古墳群第10トレンチ出土遺物
本高弓ノ木遺跡第２・第６トレンチ出土遺物
図版17
本高弓ノ木遺跡第６・第９トレンチ出土遺物
里仁36号墳出土遺物
天神山遺跡第２トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ出土遺物
鳥取城三ノ丸跡第２トレンチ出土遺物

第１章　発掘調査の経緯

鳥取市は鳥取県東部に位置する山陰の中核都市で、県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担ってきた。平成16（2004）年11月には周辺８町村（国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町）との市町村合併が成立し、面積765.66㎢、人口20万人余りを擁する都市へと拡大することとなった。その結果、それまで市内に2300ヶ所余りとしてきた遺跡の数も倍増の4600ヶ所以上となりさらに増加の一途をたどっている。

このような中、近年は公共事業等の減少もあり各種開発事業は落ち着き傾向にあるが、開発計画との調整が必要となる遺跡も数多くあり、試掘調査の件数も増してきている。

１．発掘調査の契機

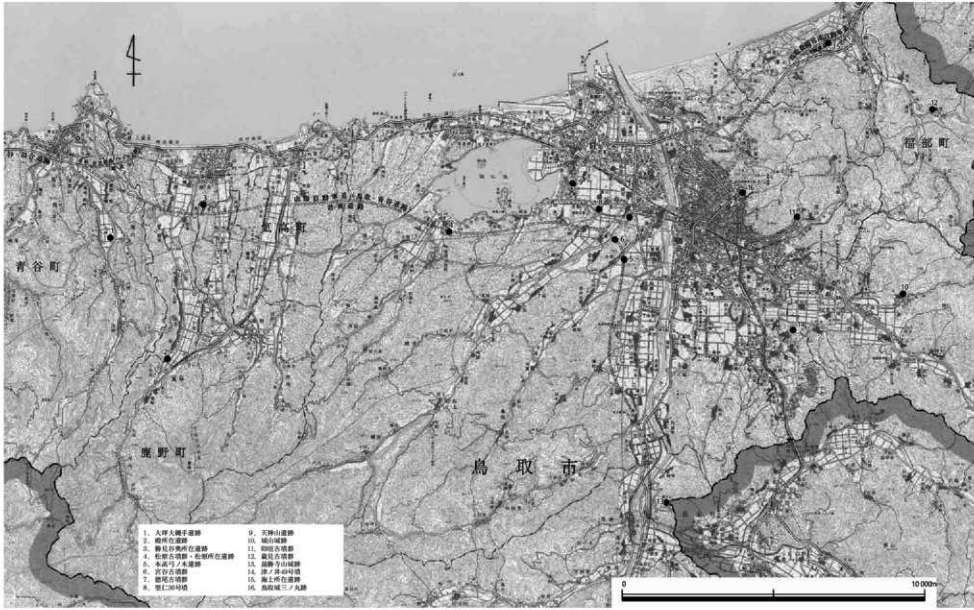
今回報告する発掘調査の契機はそれぞれ以下のとおりである。

大坪大縄手遺跡はほ場整備事業計画、殿所在遺跡・勝見谷奥所在遺跡・卯垣古墳群・最勝寺山城跡は携帯電話基地局新設計画、松原古墳群・松原所在遺跡・本高弓ノ木遺跡・宮谷古墳群・海士所在遺跡は道路整備計画、徳尾古墳群・城山城跡・蔵見古墳群は防災施設整備、里仁36号墳・津ノ井49号墳は土地造成計画、天神山遺跡は公共下水新設工事及び民間宅地開発、鳥取城跡は学校改築に伴い実施したものである。また、鳥取城跡の分布調査は、中世城郭部分の詳細な曲輪図の作成及び測量調査を実施した。

２．発掘調査の経過

発掘調査は各調査地ともトレンチ掘削による遺構・遺物の包含状況の確認に主眼をおいて実施した。調査に伴う掘削は層単位ごとに人力で行い、調査後は基本的に埋め戻しを行っているが、大坪大縄手遺跡については過去の調査結果をもとに重機を用いて表土掘削を実施した。整理作業は、各現地調査が終了した後に行い、本格的な報告書作成は平成20年12月に着手し、２月に終了した。本報告の調査総面積は960.1㎡である。なお、本報告書には、平成19年度に調査した大坪大縄手遺跡、松原古墳群・松原所在遺跡、本高弓ノ木遺跡、里仁36号墳、最勝寺山城の調査結果を報告している。各調査遺跡のトレンチ（Tr）数、調査面積、現地調査期間は次のとおりである。

遺　跡　名	Tr 数	調査面積	現 地 調 査 期 間
1　大坪大縄手遺跡	9	203.7	20071107～20080109
2　殿所在遺跡	1	16.0	20081007～20081008
3　勝見谷奥所在遺跡	1	16.0	20080507～20080508
4　松原古墳群・所在遺跡	19	213.2	20071107～20071210、20081020～20081106
5　本高弓ノ木遺跡	15	255.0	20080304～20080318、20080409～20080515
6　宮谷古墳群	5	27.7	20080924～20081001
7　徳尾古墳群	3	8.8	20080808～20080811
8　里仁36号墳	5	24.6	20071113～20071127
9　天神山遺跡	2	22.2	20080618～20080627
10　城山城跡	3	41.2	20081010～20081017
11　卯垣古墳群	1	9.0	20081104
12　蔵見古墳群	5	39.1	20080507～20080512
13　最勝寺山城跡	1	19.5	20080304～20080306、20080618～20080619
14　津ノ井49号墳	1	5.3	20081010
15　海士所在遺跡	2	37.4	20081128～20081130
16　鳥取城三ノ丸跡	2	21.4	20080507～20080527


4
福部町
鳥取市
鹿野町
青谷町
1. 大坪大鐘手遺跡
2. 樗谷遺跡
3. 勝見谷墳所遺跡
4. 松姫古墳群・松姫所在遺跡
5. 本高弓ノ木遺跡
6. 宮谷古墳群
7. 徳尾古墳群
8. 聖仁塚古墳
9. 天神山遺跡
10. 城山城跡
11. 田垣古墳群
12. 義見古墳群
13. 湯梨寺山城跡
14. 諸ノ井山古墳
15. 海上所在遺跡
16. 鳥取城三ノ丸跡
0
10,000m

第１図　調査遺跡位置図

第２章　調査の結果

第１節　大坪大縄手遺跡

大坪大縄手遺跡はJR青谷駅より南東約2.7km、日置川左岸に位置し、大坪集落東側水田地帯に所在する。周辺では南西よりの丘陵上で古墳時代前期から中期に造営された大口古墳群、大坪集落西丘陵部に大坪古墳群が確認されている。山裾部には大口第１・第２・第３遺跡があり弥生時代後期から古墳時代にかけての集落址、墳墓、土壙墓等が確認されている。同じ丘陵のやや南裾部では弥生時代後期から奈良時代にかけての集落址、カヤマ遺跡がある。本遺跡のすぐ北側には、古代から中世にかけての人形、馬形、斎串など多量の木製祭祀遺物が出土した大坪イカウ松遺跡が位置している。現在の平野部は微高地で複数の旧河道があったことが想定され、多くの遺跡が分布する地域となっている。

今回の調査は平成16年度より引き続き、日置谷地区ほ場整備事業に伴い実施した。大坪集落と日置川との間に拓けた平野部水田域の東西300m南北220mの範囲を対象とし、９箇所に第39～第47のトレンチを設定した。地表面標高は9.7mから13mの地帯となる。調査対象域は日置川左岸域平野部で中央部から南東域にかけて微高地形をなす。前年度の調査をふまえ、旧河道ならびに自然堤防状の高まりが想定される平野中央部分から東部分にトレンチを設定した。

尚、対象地域はこの度の整備事業以前にも昭和20年代後半以降、数次にわたり整備が行われた地区である。

第２図　大坪大縄手遺跡調査トレンチ位置図

第39トレンチ（Tr-39）〔第２・３図　図版１〕

調査対象地北西端に設定した5.1×２m、地表面標高9.7mのトレンチである。第２層で現代の暗渠設備を確認、旧水田耕作の床土となる。第４層は黒褐色粘土層で、表土下0.5mの第５層の褐灰色粗砂層に河原石を多く含み、旧河道に伴う堆積とみられる。

排土中より摩滅した土師器細片を検出したほかは明確な遺構、遺物は検出されなかった。

第40トレンチ（Tr-40）〔第２・３図　図版１〕

第39トレンチより南に設定した、約5.2×2.2m、地表面標高11.4mのトレンチである。

現地表面下0.2～0.4m第２層、暗灰黄色粘質土は以前のほ場整備客土とみられる。第３層灰黄褐色粘質土から下層に河原石を含み、地表面下0.7m第６層は灰色粗砂となることから旧河道に伴う堆積と見られる。第７層はトレンチ東端の現代暗渠に伴う埋土である。

第２層から土器片、第３層からは唐津焼の高台片、木器片、第６層からは木器を検出した。これら遺物は、上述の通り耕作土または以前のほ場整備に伴う客土中の遺物、あるいは自然流路の複次堆積遺物と考えられる。遺構は検出されなかった。

第41トレンチ（Tr-41）〔第２・４図　図版１〕

第40トレンチより東、調査対象地中央部に設定した11.3×2.5m、地表面標高13.6mのトレンチである。黄褐色粘質土の第３層が旧水田耕作土床土となる。第６層は褐灰色砂利層で河原石を多く含む。第９層も同じく褐灰色砂利層である。第６層上面、現地表面下0.5mより土坑状遺構を検出する。上面より瓦質の土器片が出土しているが、遺構の性格は不明である。

遺物は地表面下0.4mの第５層、第５、６層境界付近、地表面より約1.1m下の第９層よりそれぞれ磨耗した土器細片が出土する。いずれも以前のほ場整備の客土中、あるいは自然流路の複次堆積遺物と考えられる。

第42トレンチ（Tr-42）〔第２・４図　図版１〕

調査対象地中央南端に設定した10.6×2.5m、地表標高13mを測るトレンチである。
黄褐色粗砂の第３層より以下粗砂層となる。遺構、遺物は検出されなかった。

第43トレンチ（Tr-43）〔第２・５図　図版１・２〕

第41トレンチより東、調査対象地中央に設定した11×2.6m、地表面標高12.3mを測るトレンチである。黄褐色粘質土第３層が旧耕作土床土で、第５層灰褐色粘質土以下は、安定した堆積を示す。遺構は検出されていない。

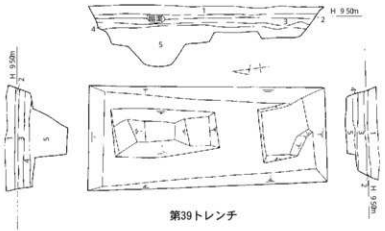
遺物は第５層より土師器細片、第７層、第８層より摩滅した土器片が出土するが、客土中あるいは自然流路の複次堆積遺物とみられる。

第44トレンチ（Tr-44）〔第２・４図　図版２〕

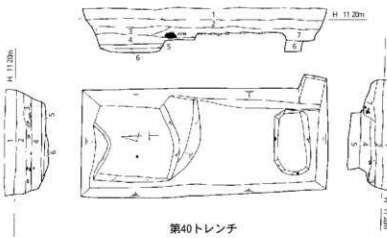
調査対象地南東部に位置し5.5×2.7m、地表面標高13.1mを測るトレンチである。
第４層にぶい黄褐色粘質土、第５層灰褐色粘質土に河原石を含み、第６層は灰褐色砂利層となる。遺構は検出されず、第６層の砂利層から土器片が検出される。自然流路の堆積物と考えられる。

第45トレンチ（Tr-45）〔第２・５図　図版２〕

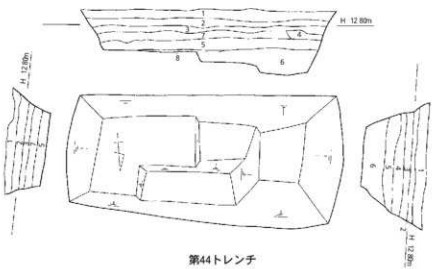
調査対象地東側日置川左岸域に設定した10.4×2.5m、地表面標高11.5mを測るトレンチである。第５・第６層境界から杭木上端部を検出、また２条の現代暗渠施設を検出した。遺物のうち杭木は、その鋸痕跡から現代の杭と考えられる。トレンチ南端部で河原石が顕著である。遺物は現地表面下0.7～0.9mの第20・第８・第15層から土師器片・須恵器片が出土し、遺物包含層が認められるが、密度は薄い。同１m以下、第11層褐灰色砂利層からは土器片が出土するが、自然流路の複次堆積遺物とみられる。



第39トレンチ



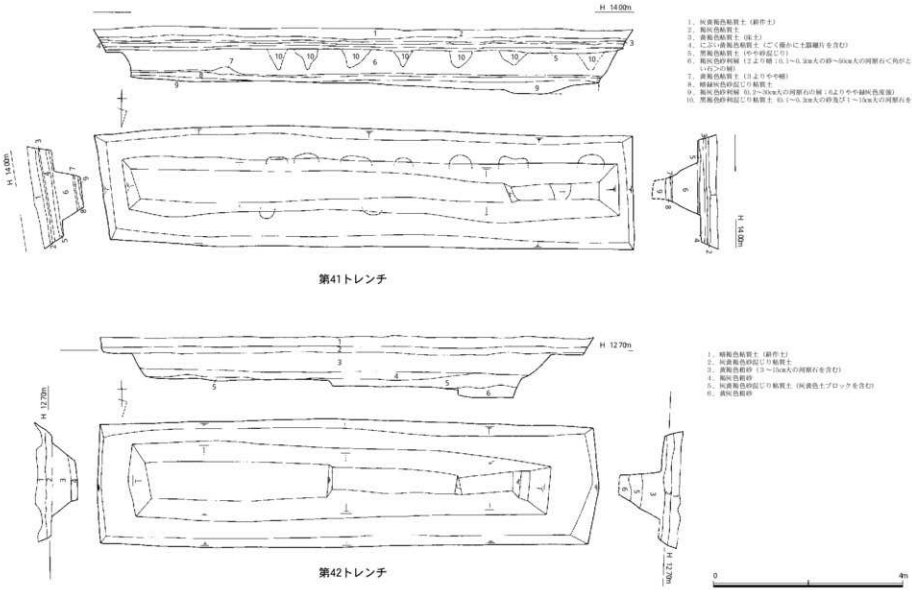
第40トレンチ



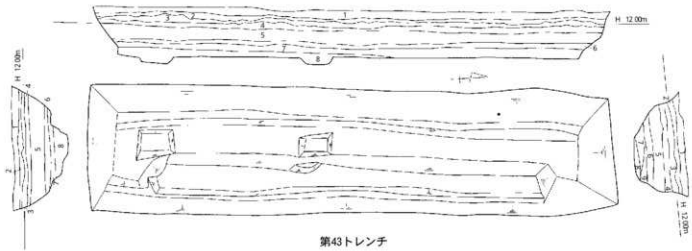
第44トレンチ

0　　4m

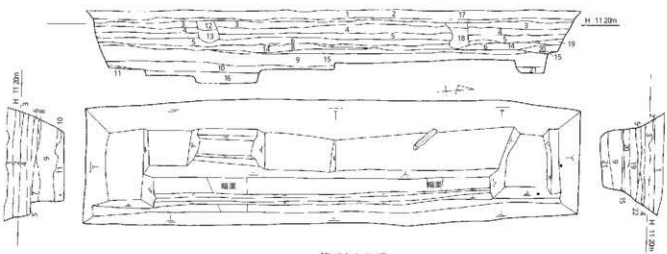
第３図　大坪大縄手遺跡第39・第40・第44トレンチ実測図



第４図　大坪大縄手遺跡第41・第42トレンチ実測図



第43トレンチ



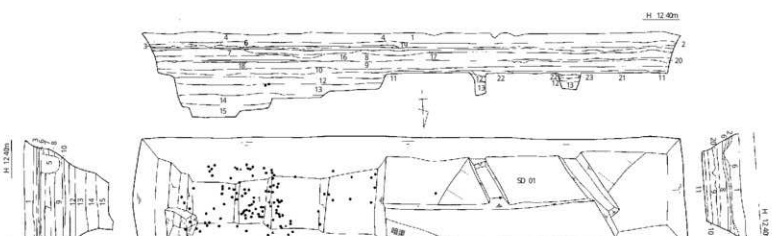
第45トレンチ

1. 暗褐色粘質土（耕作土）
2. 灰黄褐色粘質土
3. 黄褐色粘質土（床土）
4. 灰褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土（4より明）
6. 褐灰色粘質土（炭化物及び1～5cm大の河原石を含む）
7. 褐灰色砂（6よりやや明；褐灰色粘質土及び炭化物及び小木片を含む）
8. 灰黄褐色礫砂（1～20cm大の河原石を多く含む）
9. 褐灰色砂混じり粘質土（7よりやや暗；炭化物を含む）

1. 灰黄褐色粘質土（耕作土）
2. 褐灰色粘質土（ややシルトかから，7より褐色度強）
3. にぶい黄褐色粘質土（炭化物を微小に含む）
4. 灰色粘土（炭化物を含む）
5. 灰色粘土（4よりオリーブ色かから）
6. 褐灰色粘土～暗オリーブ灰色粘土
7. 褐灰色粘質土（2より灰色度強；ややシルトかから；炭化物を含む）
8. 褐灰色粘土（7よりやや明；炭化物を含む）
9. 褐灰色粘土（7，8よりやや茶褐色かから；炭化物を含む）
10. 褐灰色粘土（9よりやや暗く，7，8よりやや茶褐色かから；炭化物を含む）
11. 褐灰色砂利層（7，8，9，10より明；0.2～15cm大の砂利を微に含む）
12. にぶい黄褐色粘質土（3よりやや明；下位に黄褐色斑模様状度，暗褐埋土）
13. にぶい黄褐色粘質土（3よりやや明；10～20cm大の河原石を含む，暗褐埋土）
14. 灰色粘土（4よりややオリーブかから；灰黄褐色泥炭ブロックを含む；炭化物を含む；1～4cm大の河原石を含む）
15. 褐灰色粘土（8より灰色度やや強く，9よりやや明るい；炭化物を含む）
16. 灰色砂～褐灰色砂
17. 12と同層（暗褐埋土）
18. 13と同層（下位に10～30cm大の河原石を含む，暗褐埋土）
19. 灰色粘土（3よりやや明）
20. オリーブ黒色粘質土（灰黄褐色泥炭ブロック及び炭化物を含む）
21. 褐灰色粘土（9よりやや明；炭化物を含む）
22. 灰黄褐色粘質土

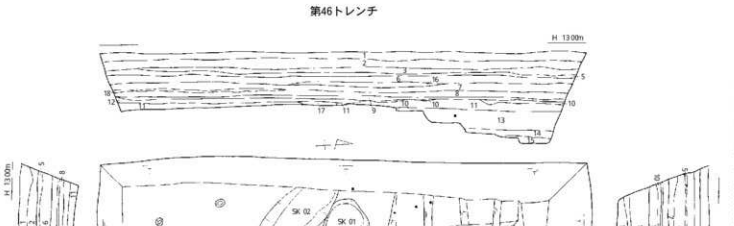
0　　4m

第５図　大坪大縄手遺跡第43・第45トレンチ実測図



1. 暗褐色粘質土（耕作土）
2. にぶい黄褐色粘質土
3. 灰黄褐色粘質土
4. にぶい黄褐色砂（2よりやや明）
5. 灰黄褐色粘質土（2より暗るく，4よりやや暗；黄褐色粘質土ブロック含む；30cm大の河原石を中位～下位に含む；暗渠）
6. 黄褐色粘質土～黄褐色粘質土
7. 褐色粘質土～黄褐色粘質土（6よりやや暗）
8. 褐灰色粘土
9. 褐灰色粘土（8よりやや明）
10. 褐灰色粘土（8，9よりやや明）
11. にぶい黄褐色粘土～暗黄褐色粘土
12. 灰黄褐色粘土（12よりやや暗）
13. 黒褐色粘土（鍛冶土器を多く含む）
14. 黒褐色砂質シルト粘土～褐灰色砂質シルト粘土（13よりやや明）
15. 褐灰色砂
16. 灰黄褐色粘質土
17. 灰黄褐色粘質土（16よりやや暗；褐灰色粘土ブロックを含む）
18. 褐灰色砂質シルト粘質土（炭化物を含む）
19. 褐灰色粘質土
20. 褐灰色粘土・褐灰色砂・にぶい黄褐色砂の混合
21. 灰黄褐色粘土～にぶい黄褐色粘土（黒褐色粘土ブロック及び炭化物を多く含む）
22. 灰黄褐色粘質シルト（炭化物を含む）
23. 灰黄褐色砂（22より明；灰黄褐色粘質シルトを含む）

第46トレンチ

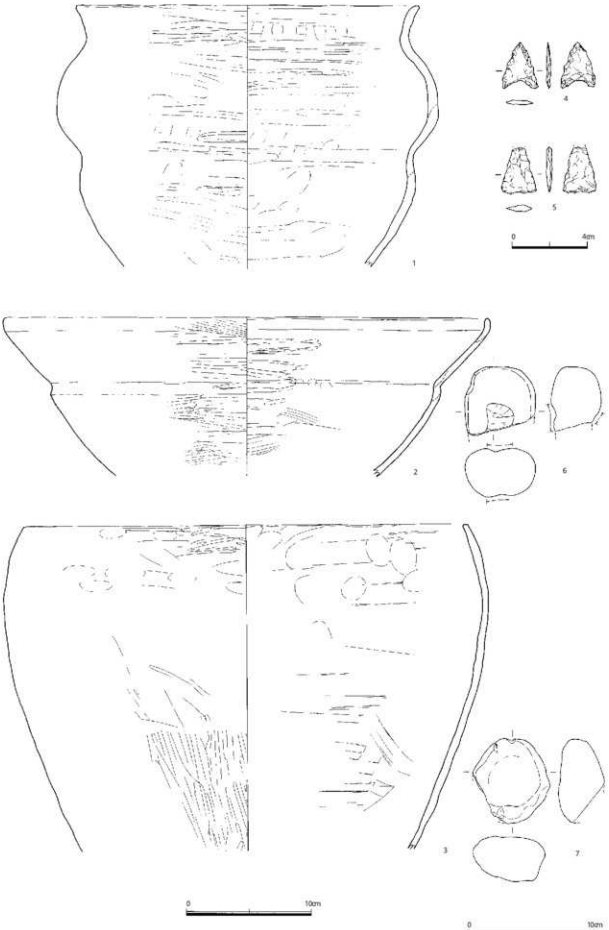


1. 暗褐色粘質土（耕作土）
2. にぶい黄褐色粘質土
3. 灰黄褐色粘質土（黄褐色粘質土を部分的に斑状に含む）
4. 灰黄褐色粘質土（3よりやや明）
5. 灰黄褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合（砂を部分的に含む）
6. 灰黄褐色粘土（4，5よりやや暗）
7. 褐灰色粘土
8. 褐灰色粘土（7より灰色度やや強く，やや明）
9. 黄褐色砂質シルト粘土
10. 灰黄褐色粘土（4，5，6よりやや暗；炭化物を多く含む）
11. 灰黄褐色粘土（4，5，6より暗く，10よりやや明）
12. 灰黄褐色粘土（11よりやや暗く，10よりやや明）
13. 黒褐色粘土（鍛冶土器包蔵）
14. 黒褐色砂質シルト粘土（13よりやや明）
15. 褐灰色砂
16. 灰黄褐色粘土（6よりやや暗）
17. 褐灰色粘土（炭化物を含む）
18. 灰黄褐色粘土（にぶい黄褐色砂を多く含む）

第47トレンチ

0　4m

第６図　大坪大縄手遺跡第46・第47トレンチ実測図



第７図　大坪大縄手遺跡第46・第47トレンチ出土遺物実測図

第46トレンチ（Tr-46）〔第２・６・７図　図版２・16〕

第45トレンチより南に設定した約11.4×2.6mのトレンチで、地表面標高12.1mを測る。トレンチ西側で、幅３m深さ15cmの溝状遺構SD01を検出した。灰黄褐色粘土の第21層から灰黄褐色砂の第23層がその埋土にあたる。遺構に伴う遺物は出土していない。

遺物は、トレンチ東側に集中して、地表面下約0.8mの第10・第11層境界付近で縄文時代晩期以降の土器片、同1.2m付近黒褐色粘土層の第13層、黒褐色～褐灰色砂混じり粘土層の第14層で晩期を中心とした多量の縄文土器が出土した。精製深鉢⑴は２段階に屈曲して外反する口縁をもち、縄文時代後期末葉まで遡るとみられる。精製浅鉢⑵の頸部は長く外傾し、口縁端部で短く立ち上がる。全体に磨きが施され黒色磨研系土器の流れをくむ晩期、篠原式の範疇におさまる時期のものである。他にサヌカイト製石鏃（４・５）、安山岩質の敲石⑹、石錘⑺など、石製品が出土している。

縄文時代晩期以降、及び同晩期の２時期の遺構面・遺物包含層が想定される。

第47トレンチ（Tr-47）〔第２・６・７図　図版３・16〕

調査対象地南東端に設定した10.4×2.6m、地表面標高12.8mを測るトレンチである。地表面下１m第16層上面で土坑２基（SK-01、SK-02）、第７層上面でピット状遺構２基を検出した。SK-02より土器細片が出土したほかは遺物はなく、遺構の性格は不明である。

トレンチ北側、灰黄褐色粘土層の第11層より土器片、地表面下1.2m黒褐色粘土層の第13層より縄文土器片が出土する。⑶はやや内傾する口縁をもつ寸胴型の深鉢である。口縁部、体部ともにナデ調整を施し、縄文時代晩期、篠原式古段階並行期と考えられる。第46トレンチ同様、縄文時代晩期以降ならびに晩期の２時期の遺構面が遺存する。

小　結

以上の結果、今回の調査範囲では、大坪地内の平野部南東、縄文時代晩期の土器が豊富に出土した第46から第47トレンチ付近に当該期及びそれ以降の２時期の遺構面、遺物包含層が存在するものと考えられる。また調査区一帯の日置川左岸平野部では複数の河道があったことが指摘されているが、第39、40トレンチ付近でその痕跡が顕著である。

調査区の平野部では平成16年度からの調査成果と違わず、北西から南東にかけて緩やかに微高地形を呈する結果を得た。こうした旧河道にともなう自然堤防状地帯に遺跡が形成されているものと推察できる。

尚、この度の試掘調査成果を経て2008年度中に改めて発掘調査を行い同年度中に報告書を刊行する。遺跡、遺物の詳細についてはそちらも参照されたい。

第２節　殿所在遺跡

殿所在遺跡は、気高町殿集落の南西約300mに位置し、河内川左岸に形成された平野部の北西隅に立地している。調査地のすぐ北側には丘陵が迫り、この丘陵上に殿古墳群、小別府古墳群、飯里古墳群、上原古墳群、山宮古墳群等多くの古墳が築かれている。古墳の立地は丘陵裾部に多く見られ、これらの中には横穴式石室をもつ古墳が多く見られる。殿古墳群を構成する36基あまりの古墳にも、18基あまりが横穴式石室を持つことが知られている。また、周辺の平野部にも多くの遺跡が知られており、殿集落の東側に拓けた水田部には殿遺跡が立地し、北側に位置する上原集落の東前面には官衙跡で知られる上原遺跡が位置している。

今回の調査は、携帯電話基地局の整備計画に伴うもので、事業計画地内に４m×４mのトレンチを設定し確認調査を行った。

第１トレンチ（Tr-1）〔第８・９・10図　図版３・16〕

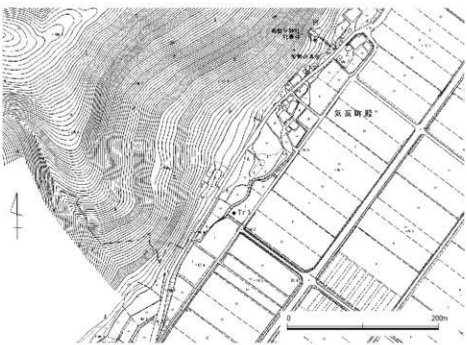
地表面の標高は79.05mを測る。耕作土の下層は床土とみられる暗灰黄色シルト層があり、下位に厚さ５～20cmにわたって黒色粘質土（第３層）が堆積する。第３層の下層は植物遺体が堆積した褐色の泥

炭層で湿地の堆積状況を示している。泥炭層下位の第５、６層には円礫や粗砂が多く含まれ、流入した土の堆積状況がうかがわれ、最下層に灰黄褐色砂が堆積している。比較的安定した堆積状況を示す第３層上面に遺構の可能性が考えられるが明確な遺構は検出されなかった。

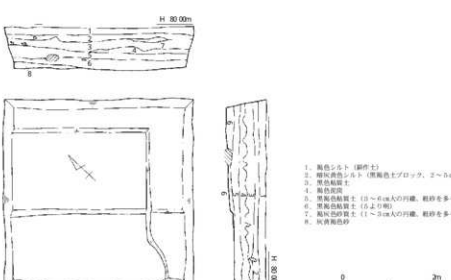
遺物は、第２層からビニール片、須恵器片、陶磁器片が出土した。また、出土層が特定できなかったが、石匙と思われる石器（第10図１）が出土した。長さ9.95cm、幅3.7cm、厚さ0.5cmを測り、両面より丁寧に打ち欠き刃を作り出している。材質は玻璃質安山岩である。

小　結

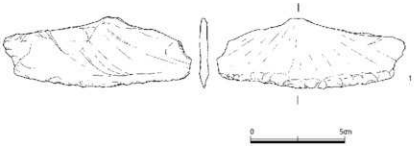
今回の調査対象地は、横穴式石室を持つ古墳が築かれている丘陵裾部から一段下った平野部にあたる。調査の結果、泥炭層や流入したものと思われる堆積層が認められた。明確な遺構は検出されなかったが、平野中央部には殿遺跡が所在しており、周辺地域に遺跡が展開する可能性は考えられる。



第８図　殿所在遺跡調査トレンチ位置図



第９図　殿所在遺跡第１トレンチ実測図



第10図　殿所在遺跡第１トレンチ出土遺物実測図

第３節　勝見谷奥所在遺跡

勝見谷奥所在遺跡は、JR浜村駅から南西0.9kmに位置し、32基からなる谷奥古墳群が展開する丘陵裾部に立地している。浅い谷を挟んだ東丘陵に勝見山城跡や勝見古墳群（19基）が位置し、南側丘陵には34基あまりで構成される重山古墳群が築かれている。

今回の調査は、携帯電話基地局の整備計画に伴って実施したもので、事業計画地内に４ｍ×４ｍの試掘トレンチを設定した。

第１トレンチ（Tr-1）〔第11・12図　図版３〕

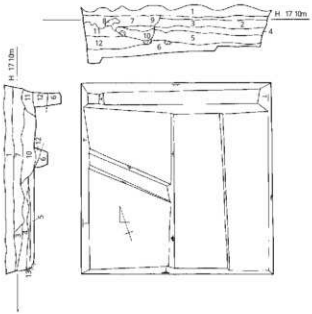
調査地は気高消防署の南に隣接する畑地で、現地表の標高は17.3m前後を測る。地表下65～80cmで検出した第６層が基盤層と考えられ、その上層に堆積する褐灰色土は均一の粘質土である。第４層は二次堆積土とみられ、橙色土のブロックが多く含まれている。

遺構は、第２層上面から幅1.5m以上、深さ70cm前後の溝状の掘削坑（埋土７～12層）が検出された。埋土中に須恵器片、土師器片、瓦質土器片が含まれるものの、第10層から陶磁器片や鉄製座金が出土したことから近現代の掘削坑と考えられた。第３、４、５層上面が遺構面の可能性があるが遺構は検出されなかった。遺物は、溝埋土中から出土した遺物のほかに、第４層から土師器細片が２点出土した。

小　結

調査地は、谷奥古墳群が所在する丘陵の裾部に位置し、その一帯は遺物散布地として捉えられている。今回の調査では遺構は確認されなかったが、須恵器、土師器、瓦質土器等の破片も出土しており、周辺における遺跡の存在の可能性は考えられる。

第11図　勝見谷奥所在遺跡調査トレンチ位置図



第12図　勝見谷奥所在遺跡第１トレンチ実測図

第４節　松原古墳群・松原所在遺跡

松原古墳群は、湖山池を望む低丘陵上と、松原集落の南東丘陵に立地している。古墳群は現在26基あまりが確認されており、群中には直径15mを超える円墳も築かれている。湖山池周辺には古墳をはじめとして多くの遺跡が立地し、本古墳群の東側丘陵には38基あまりからなる良田古墳群が位置している。松原所在遺跡の調査対象地は、松原集落南側の平野部と、古墳群が展開する丘陵裾部の谷部である。調査対象地の南西には弥生時代から中世の集落遺跡である松原谷田遺跡が所在している。

今回の調査は、道路整備に伴い実施したものである。計画路線内には松原11、19、20～26号墳の散在がすでに知られている。調査は、古墳群の立地する丘陵上に12箇所（Tr-１～Tr-12）、平野部および谷筋に7箇所（Tr-13～Tr-19）の計19箇所にトレンチを設定した。なお、第１～10トレンチと第13、14トレンチは平成19年度に、第11、12トレンチおよび第15～19トレンチは平成20年度の調査トレンチである。

第１トレンチ（Tr-１）〔第13・14図　図版３〕

標高約94mの丘陵頂部から北西に下った稜線上の傾斜変換地点に設定した1.0×8.0mのトレンチである。厚さ10cm前後の表土下ににぶい黄褐色粘質土の堆積が見られ、その下層の明黄褐色粘質土が地山である。地山を加工した痕跡や盛土もなく遺構・遺物は検出されなかった。

第２トレンチ（Tr-２）〔第13・14図　図版４〕

南北に延びる主稜線上の平坦部に設定した1.0×7.0mのトレンチである。丘陵の上位側にあたるトレンチ南側から周溝と考えられる地山掘削面が検出された。第７層の暗褐色粘質土が旧表土とみられ、その上層に堆積する地山ブロックを含む第６層（黄褐色粘質土）が墳丘盛土と思われる。周溝の深さ50cm前後、周溝の幅は1.2mあまりを測る。トレンチ北側に古墳が所在しているものと考えられる。遺物は出土しなかった。

第３トレンチ（Tr-３）〔第13・14図　図版４〕

第２トレンチの北側に設定した1.0×14.5mのトレンチである。表土は厚さ10～18cmの堆積が見られ、トレンチ北側の表土下は明黄褐色粘質土（第６層）が地山となる。トレンチ南端で第６層の地山を掘り込んだ幅1.8m、深さ60cmあまりの溝状の遺構を検出した。第５層の地山ブロックを含む黄褐色粘質土

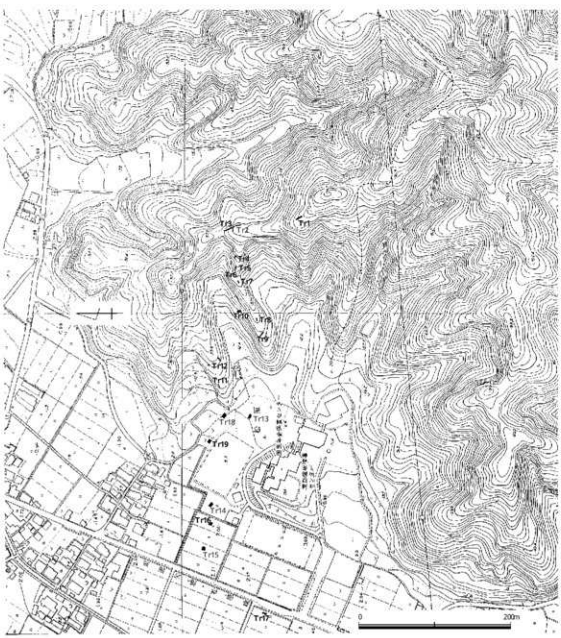
はトレンチ２で検出した盛土と同質であることから、トレンチ2で確認した古墳に伴う周溝の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

第４トレンチ（Tr-４）〔第13・15図　図版４〕

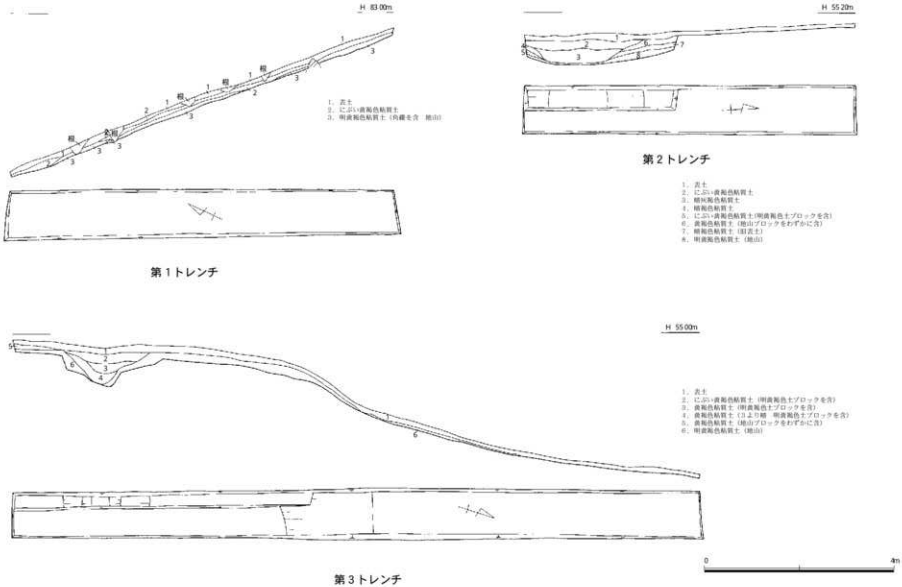
第２、３トレンチを設定した主稜から派生し、南西に延びる支稜線上の傾斜変換地点に設定した0.7×4.5mのトレンチである。高位の丘陵斜面側では表土下は地山となり、斜面の傾斜変換部でこの地山を溝状に削り出した地山加工面が検出された。古墳の周溝と考えられ、斜面上位側に周溝を巡らせる直径８m前後の古墳が所在しているものと考えられる。遺物は出土しなかった。

第５トレンチ（Tr-５）〔第13・15図　図版４〕

第４トレンチの西下方約10mに設定した0.8×5.0mのトレンチである。厚さ８～15cmの表土以下には、にぶい黄褐色粘質土（第３層）、明黄褐色粘質土（第４層）の堆積が見られ、これらが基盤層と思われる。第２層の暗褐色粘質土は上位からの自然流入土と思われる。遺構、遺物は検出されなかった。

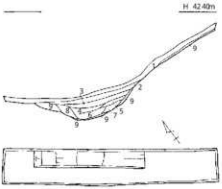


第13図　松原古墳群・松原所在遺跡調査トレンチ位置図



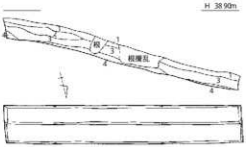
第3トレンチ

第14図　松原古墳群第１・第２・第３トレンチ実測図



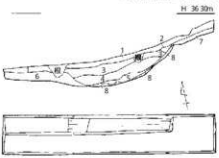
第４トレンチ

1. 表土
2. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含）
3. 暗褐色粘質土
4. 褐色粘質土
5. 褐色粘質土（4より明　赤みをおびる）
6. 暗褐色粘質土
7. 褐色粘質土（5より暗）
8. 褐色粘質土
9. 黄褐色粘質土（地山ブロックをわずかに含）



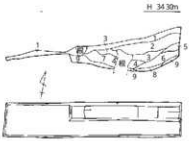
第５トレンチ

1. 表土
2. 暗褐色粘質土
3. にぶい黄褐色粘質土
4. 明黄褐色粘質土（地山）



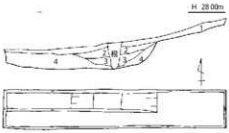
第６トレンチ

1. 表土
2. 褐色粘質土
3. にぶい褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックをわずかに含）
6. 褐色粘質土
7. 褐色粘質土
8. 明赤褐色粘質土（地山）



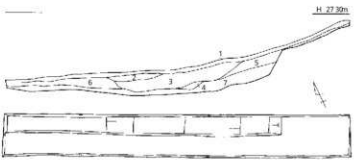
第７トレンチ

1. 表土
2. 褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 褐色粘質土（7より暗　暗褐色土ブロックを含）
5. 褐色粘質土（2より明）
6. 暗褐色粘質土（3より暗　黄褐色土ブロックをわずかに含）
7. 褐色粘質土（しまっている）
8. 褐色粘質土（7より暗）
9. 明赤褐色粘質土（地山）



第８トレンチ

1. 表土
2. にぶい赤褐色粘質土
3. 暗赤褐色粘質土
4. 赤褐色粘質土（地山）



第９トレンチ

1. 表土
2. にぶい赤褐色粘質土
3. 赤褐色粘質土（6より暗　明赤褐色土ブロックをわずかに含）
4. 赤褐色粘質土（5より明）
5. 赤褐色粘質土（3より明　盛土盛土）
6. 赤褐色粘質土（7より暗）
7. 明赤褐色粘質土（地山）

0　4m

第15図　松原古墳群第４・第５・第６・第７・第８・第９トレンチ実測図

第６トレンチ（Tr-６）〔第13・15図　図版４〕

第５トレンチの西下方約6mの傾斜変換地点に設定した0.8×4.5mのトレンチである。表土下には基盤層と思われる褐色粘質土（第６、７層）が堆積し、これらの堆積層を掘削した溝が検出された。第３～５層が溝の埋土とみられ、大きく掘削している様子がうかがわれる。尾根の上位側を巡る周講の存在が考えられ、直径８m前後の古墳が所在しているものと思われる。遺物は検出されなかった。

第７トレンチ（Tr-７）〔第13・15図　図版４〕

第６トレンチの西下方約７mの傾斜変換地点に設定した0.7×3.7mのトレンチである。本トレンチの下位には円墳が築かれており、周溝の痕跡がはっきりと確認される。第９層の明赤褐色粘質土が地山とみられ、この地山を溝状に掘削した地山加工面が検出された。上層には第２～７層の堆積が見られるが、第７層の褐色粘質土は均一でよく締まっていることから基盤層になるものと思われる。溝の埋土は第２層～第６層である。古墳に伴う周溝とみられ、直径7m前後の古墳が所在しているものと考えられる。

第８トレンチ（Tr-８）〔第13・15図　図版５〕

隣接して築造されている古墳の間に残る平坦部に設定した0.8×4.7mのトレンチである。第４層の赤褐色粘質土が地山とみられ、トレンチのほぼ中央で地山を掘削した幅1.8m、深さ40cm前後の溝が検出された。トレンチの東側には直径12mあまりの古墳が位置しており、この古墳に伴う周溝と考えられる。トレンチの西側では表土下が第４層の地山となり、盛土等は検出されないことから、平坦部に古墳が所在する可能性は少ないものと思われる。遺物は、第２層から須恵器体部片が２点検出された。上位に位置する古墳に伴う遺物とみられる。

第９トレンチ（Tr-９）〔第13・15図　図版５〕

現存する古墳裾部に広がる平坦部に設定した0.9×7.3mのトレンチである。第６層の赤褐色粘質土、７層の明赤褐色粘質土が基盤層とみられる。トレンチのほぼ中央で地山を掘削した幅2.9m、深さ30cm前後の溝が検出された。トレンチの東側には直径18mあまりの古墳が位置しており、この古墳に伴う周溝とみられ、第５層が墳丘盛土の可能性が考えられる。裾部の西側に広がる平坦部については、表土下が基盤層になることから古墳が所在する可能性は少ないものと思われる。遺物は、表土から土師器片１、須恵器体部片２が出土した。

第10トレンチ（Tr-10）〔第13・16・19図　図版５・16〕

第８トレンチの北東約20mに位置し、丘陵北斜面中腹の平坦部に設定した2.0×5.3mのトレンチである。厚さ10～20cmあまりの表土下層には、にぶい赤褐色粘質土（第２層）が流入した状態で堆積している。第２層の下層は、赤褐色粘質土（第３層）や暗赤褐色粘質土（第４層）がみられ、第４層には暗赤褐色土、赤褐色土のブロックが含まれている。地山は第５層の褐色粘質土である。遺構は検出されなかったが、表土中から土師皿（第19図１）、第２層から須恵器壺⑵が出土した。⑴は口縁部１/８残存し、推定口径8.8cmを測る。⑵は口径7.4cm、最大同径12.5cm、器高12.35cmを測る。体部外面から口縁部内外面と底部内面に自然釉が認められる。体部外面にヘラ記号が施されている。色調は灰黄色を呈する。

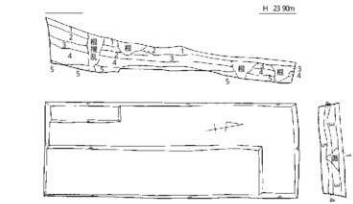
第11トレンチ（Tr-11）〔第13・16図　図版５〕

第10トレンチの西側に位置し、浅い谷を挟んだ丘陵上に設定した0.9×6.4mのトレンチである。

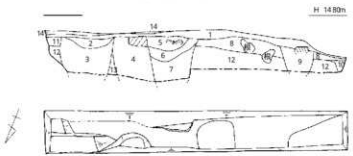
調査地は前年まで墓地として機能しており、その後の墓地移転等によりかなり撹乱されている。表土下層からは墓穴が多数検出された。第２～7層、第９層等が墓穴の埋土である。地山は第12層とみられるが、撹乱が全体におよんでおり、はっきりした遺構は確認されなかった。遺物は出土しなかった。

第12トレンチ（Tr-12）〔第13・16図　図版５〕

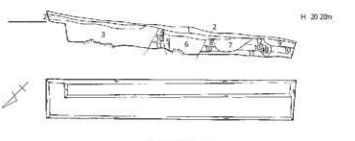
第11トレンチの東側約35mの丘陵上に設定した0.9×5.4mのトレンチである。トレンチの15mあまり上位には直径10m前後の円墳が築かれている。第11トレンチと同様に墓地として使用されており、墓穴による撹乱が進んでいる。第３、５、６、７層が墓穴の埋土である。第10層以下が基盤層と思われる。



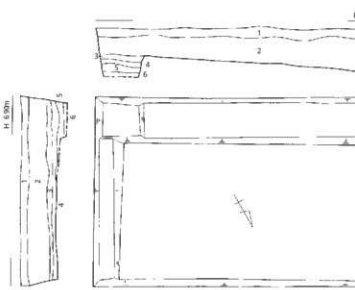
第10トレンチ



第11トレンチ



第12トレンチ



第13トレンチ

第16図　松原古墳群第10・第11・第12・松原所在遺跡第13トレンチ実測図

遺構、遺物は検出されなかった。

第13トレンチ（Tr-13）〔第13・16・19図　図版５〕

浅い谷が下る合流地点に設定した4.0×6.1mのトレンチである。表土下層には、厚さ35～70cmにわたって赤褐色粘質土（第２層）が堆積している。第２層には黄褐色土やにぶい赤褐色土がブロック状に含まれており客土された様子がうかがわれる。第２層以下の第４層にビニール片が含まれることから、４層から上位層は近現代の堆積であることがわかる。４層下は植物遺体を含む黒褐色粘質土で、その下は褐灰色粘土である。湿地の堆積状況がうかがわれる。遺構は検出されなかった。

遺物は、須恵器口縁部（第19図３）のほか、須恵器の口縁部、底部、土師器口縁部、底部などが出土した。いずれも第２層からの出土で、客土中の遺物である。(3)は口縁部１/13が残存し、推定口径8.8cmを測る。

第14トレンチ（Tr-14）〔第13・17図　図版５〕

保養施設の付設グラウンド下方に設定した4.0×6.0mのトレンチである。表土下60～90cmに堆積する第４層には瓦や合板が含まれており、第４層の上層はいずれも客土である。第４層の下層には灰黄褐色の粘質土がみられ、その下層が褐灰色粘土となる。遺構は検出されなかった。

遺物は、第４層以外からは出土しなかった。

第15トレンチ（Tr-15）〔第13・17図　図版６〕

松原集落の南約80mの水田部に設定した4.0×5.0mのトレンチである。表土下層の第２層が床土とみられ、その下層に灰黄褐色細砂が混じる褐灰色シルト（第３層）が堆積している。第３層以下は基本的に砂の堆積層で、第12層には植物遺体が含まれる。砂の堆積は表土下1.6m以上におよぶ。遺構は検出されなかった。

遺物は、第３層から陶器片、須恵器体部片、土師器皿片が出土している。

第16トレンチ（Tr-16）〔第13・18図　図版６〕

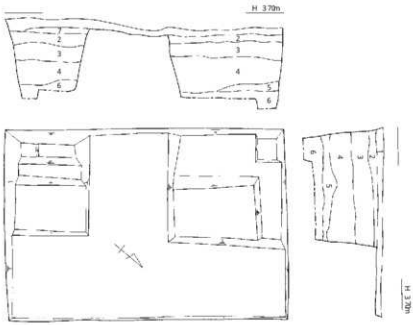
第15トレンチから南東約30mの水田部に設定した4.0×4.0mのトレンチである。地表下85～90cmに灰黄褐色粘土層（第９層）が堆積し、その下層は１～２cm大の円礫を含む灰黄褐色の砂礫層になる。9層以下が基盤層になるものと思われる。第９層の上層には黒褐色泥炭層（第８層）が見られ、自然木や板状の木片が含まれている。第８層上位の第７、11、13、14層は、礫や、砂、植物遺体が含まれる砂層や砂質土層の堆積が観察され、流入による堆積の様子がうかがわれる。中位から上層に堆積する第４～6層は、比較的安定した堆積状況を示している。これらの堆積層上面が遺構面の可能性も考えられたが、遺構は検出されなかった。

遺物は、表土下層から陶磁器、第３層から瓦質土器、土師器、第７、８層から土師器が出土した。いずれも磨耗の著しい細片である。

第17トレンチ(Tr-17)〔第13・18・19図　図版６〕

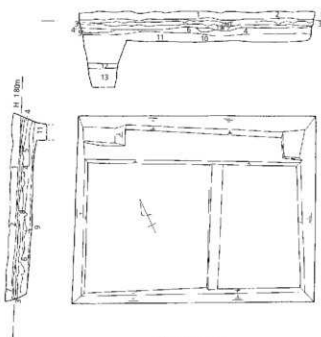
第16トレンチの南西約130mに位置し、県道矢矯・松原線に隣接する水田部に設定した2.5×6.0mのトレンチである。表土下の第２層が床土で、下層の第３層は暗渠埋土（第16層）の上に堆積することから近現代の堆積層とみられる。第２、３層上面から土坑状の遺構（第９～11層、第13～15層）を検出したが、層序からいずれも近現代のものとみられる。基盤層は、地表下1.2～1.25mに堆積する灰オリーブ粘土層（第８層）と思われる。第８層の上位には、第５～７層の粘質土が堆積し、第５、6層は厚さ20～40cmの安定した堆積状況を示している。これらの堆積層上面が遺構面の可能性が考えられたが、遺構は検出されなかった。

遺物は、第３、４層から土師器片、須恵器片が出土し、第５層から土師器、須恵器（第19図４、５）が検出された。４は土師器壺の口縁部で、推定口径は21.5cmである。内外面ヨコナデで、外面にあまい櫛描平行沈線を施す。５は、高台付きの底部である。底面に糸切り痕が観察される。



第14トレンチ

1. 表土
2. 赤褐色粘質土（客土）
3. にぶい赤褐色粘質土（明黄褐色土、赤褐色土ブロック混じり　客土）
4. 暗赤褐色粘質土（明黄褐色土ブロック混じり　客土）
5. 灰黄褐色粘質土（赤褐色土ブロックを含）
6. 褐灰色粘土
7. 暗褐色砂質土（赤褐色土、黄褐色土ブロックを含）

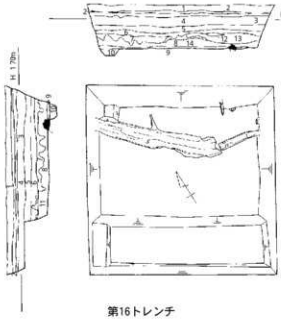


第15トレンチ

1. 暗褐色粘質土（耕作土）
2. 灰黄褐色シルト（床土）
3. 褐灰色シルト（灰黄褐色礫砂混入）
4. 灰黄褐色砂（褐灰色砂混入）
5. 灰黄褐色砂（4より明）
6. 灰黄褐色礫砂
7. 褐灰色シルト
8. 灰黄褐色砂質土（にぶい黄橙色砂混入）
9. 灰黄褐色砂
10. にぶい黄橙色礫砂
11. 褐灰色砂
12. 褐灰色砂（植物遺体を含む）
13. 褐灰色礫砂

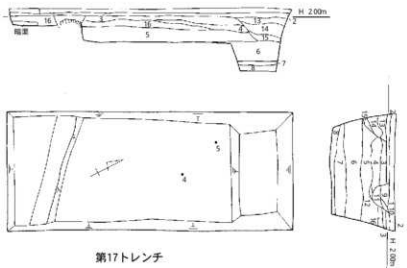
0　　4m

第17図　松原所在遺跡第14・第15トレンチ実測図



1. 灰黄褐色粘質土（耕作土）
2. 暗灰黄色粘質土（床土）
3. 黒褐色粘質土（黄褐色土小ブロック混入）
4. 褐灰色粘質土
5. 灰黄褐色粘質土
6. 灰黄褐色粘質土（5より明、礫砂を微かに含む）
7. 褐灰色砂質土（植物遺体を含む）
8. 黒褐色泥炭（自然木を含む）
9. 灰黄褐色砂土
10. 灰黄褐色砂礫（1～2cm大の円礫を含む）
11. 黒色砂質土
12. 褐灰色砂質土（9灰黄褐色砂を含む）
13. 褐灰色砂（2～5cm大の礫を含む）
14. 灰黄褐色砂質土（植物遺体を含む）

第16トレンチ



第17トレンチ

1. 褐色シルト（耕作土）
2. 灰黄褐色粘質土（床土）
3. 灰黄褐色粘質土（2より暗、黄褐色土ブロックを含む）
4. 暗灰黄褐色粘質土
5. 暗オリーブ褐色粘質土
6. 黒色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 灰オリーブ粘土
9. 灰黄褐色シルト（3より明）
10. 褐灰色シルト
11. 褐灰色砂質土（10より明）
12. 褐灰色砂
13. 暗灰黄色シルト
14. 灰黄褐色粘質土
15. 褐灰色砂質土（植物遺体を含む）
16. 暗褐色粘質土（暗渠）

0 4m

第18図　松原所在遺跡第16・第17トレンチ実測図

第18トレンチ（Tr-18）〔第13・20図　図版６〕

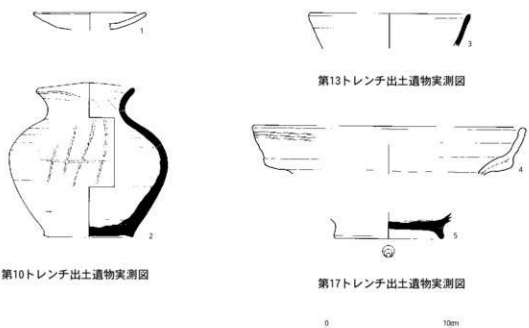
第11、12トレンチを設定した丘陵の西側裾部に広がる畑地に設定した4.0×6.0mのトレンチである。地表下20cm前後で検出した軟岩混じりの赤褐色粘質土（第６層）は瓦、レンガ等の破片が含まれており、客土されたものとみられる。客土は厚さ１m近く行われており、その下層は黒褐色の粘質土が認められる。南側に設定した第13トレンチと類似する堆積状況を示している。遺物は第３～５層から陶磁器片、瓦片、土師器片が出土している。

第19トレンチ（Tr-19）〔第13・20図　図版６〕

第18トレンチから北西側の下方35mに設定した4.0×4.0mのトレンチである。地表下80～90cmで検出された粘度の強い灰黄褐色粘質土（第５層）が基盤層と思われる。第５層の上位には、比較的安定した状態で第２～4層の堆積が認められる。これらの堆積層上面が遺構面の可能性が考えられたが、遺構は検出されなかった。遺物は、第３、4層から検出され、第３層から瓦、須恵器、土錘、第４層から陶磁器、瓦質土器、須恵器、土師器が出土した。いずれも磨耗した細片で、時期差のある遺物が混在している。

小　結

今回の調査は道路整備に伴い実施したもので、松原古墳群の道路計画地内に第１トレンチ～第12トレンチ、また、松原所在遺跡に第13トレンチ～第19トレンチを設定した。遺跡分布地図によると、古墳群の計画地内には９基の古墳の所在が記載されている。調査の結果、丘陵最高位に位置する19号墳の所在は確認されず、前方後円墳として記載されている11号墳については、２基の古墳が隣接して築造されているものと推察された。また、第６、7トレンチによって新たに２基の古墳が確認され、整備計画地内に11基の古墳が立地することが明らかになった。なお、第11、12トレンチを設定した丘陵については、墓地として大きく改変されていることから、古墳の存在をはっきり確認することができなかったが、同一丘陵の上位に古墳２基が位置することや、南に位置する稜線上には古墳が近接して築かれていることなどから、古墳の存在は十分考えられ注意が必要である。　松原所在遺跡の調査は、谷筋にあたる畑地や、水田部に計７箇所のトレンチを設定した。調査の結果、流入した様相を呈する堆積土から土器片が出土したが、明確な遺構は検出されなかった。

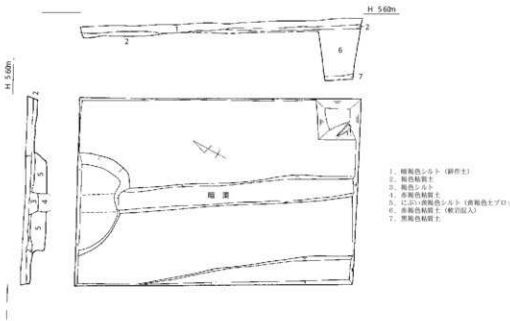


第13トレンチ出土遺物実測図

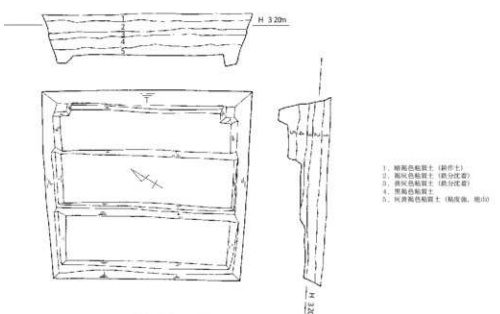
第10トレンチ出土遺物実測図

第17トレンチ出土遺物実測図

第19図　松原古墳群・松原所在遺跡第10・第13・第17トレンチ出土遺物実測図



第18トレンチ



第19トレンチ

第20図　松原所在遺跡第18・第19トレンチ実測図

第５節　本高弓ノ木遺跡

有富川の左岸に位置し、本高集落の東側に拓けた平野部に立地する。周辺には、北東に菖蒲遺跡や山ヶ鼻遺跡、南東側に本高円ノ前遺跡、南西側に北村恵儀谷遺跡が所在し、遺跡の縁辺丘陵上には本高古墳群、古海古墳群、服部古墳群、釣山古墳群など多くの古墳が築造されている。

今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、計画路線内に15箇所の試掘トレンチを設定した。

第21図　本高弓ノ木遺跡調査トレンチ位置図

第１トレンチ（Tr-１）〔第21・22・27図　図版７〕

県道高路・古海線から東へ約160mの水田部に設定した3.0×7.0mのトレンチである。第４層がほ場整備前の床土とみられ、上層の第３層には陶器片が含まれている。地表下70cm前後に堆積する第８層のオリーブ灰色粘土が基盤層で、上層の第６、７層に遺物が含まれる。

遺構は、第８層の上面で検出され、幅40cm、深さ20あまりの溝状遺構が確認された。第９層が溝の埋土である。

遺物は、第５層から瓦質の鍋（第27図１）、第６、7層から須恵器片５、土師器片８、板状木片２、自然木２が出土した。

第２トレンチ（Tr-２）〔第21・22・27図　図版７・16〕

第１トレンチの南側50mの水田内に設定した3.0×7.0mのトレンチである。第２層が床土と見られ、その下層から、第14～18層が埋土となる幅2.1m、深さ80cmの溝（SD-01）を検出した。SD-01は、埋土最下層からガラス片、瓦片が出土したことから近現代の水路と考えられる。基盤層は第11層のオリーブ灰色粘土層とみられ、上層の第10層に遺物が含まれる。

遺構は、第10層上面からピット状遺構が検出された。第12層がピットの埋土である。遺物は第７層から瓦質の鍋（第27図２）、第10層から土師器片４、木片３が出土している。

第３トレンチ（Tr-３）〔第21・22図　図版７〕

第２トレンチの南東35mに位置し、丘陵裾よりの水田部に設定した3.0×10.0mのトレンチである。第５層がほ場整備前の床土とみられ、上位層の第１～４層は近現代の堆積層と思われる。基盤層は第８層のオリーブ灰色粘土層である。

遺構は、基盤層の上位に堆積する黄灰色粘土（第７層）の上面で確認され、基盤層を掘り込んだ幅4.9m、深さ50cmの溝（SD-01）が検出された。第10～12層がSD-01の埋土で、埋土中から弥生土器片、土師器片が出土した。遺物は、他に第４～6層から陶磁器片、須恵器片が出土している。

第４トレンチ（Tr-４）〔第21・23図　図版７〕

第３トレンチの西20m、第２トレンチから南東15mに設定した2.0×5.0mのトレンチである。第６層のオリーブ灰色粘土層の上位には、褐灰色粘質土（第５層）や黄灰色粘質土（第４層）の堆積が見られ、上位の第３層には陶磁器、須恵器の細片が含まれている。遺構は検出されなかった。

第５トレンチ（Tr-５）〔第21・23・27図　図版７・８〕

第４トレンチの西22mに設定した2.0×10.0mのトレンチである。地表下60～80cmに堆積する第15層の緑灰色粘土層が基盤層である。基盤層の上位には灰色粘土の第７、８、12層が見られ、７層の上位に堆積する第３層から上位層は近現代の堆積とみられる。

遺構は、第12、15層の上面から検出され、第９、10、11層が埋土となる幅2.1m、深さ20cm前後の溝状遺構を確認した。溝埋土の10層には、赤彩された土師器高杯（第27図３）、土師器口縁部(4)や板状木片、棒状木片が含まれている。遺物は、溝の出土遺物のほか、第３層から陶磁器片、須恵器片が出土した。

第６トレンチ（Tr-６）〔第21・23・27図　図版８・16・17〕

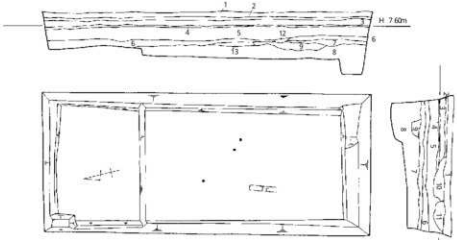
第５トレンチの南約70mに設定した2.0×10.0mのトレンチである。地表下50cm前後で確認された第６層のオリーブ灰色粘土が基盤層とみられ、その下層には緑灰色粘土層（第７層）が堆積する。第６層の上には、0.5～３cm大の角礫や炭片を含む黄灰色粘土層（第５層）が見られ、同層に多くの縄文土器が含まれている。

遺構は検出されなかった。遺物は、第５層から60点以上の縄文土器片が検出された。第27図５～７の突帯文を付した土器がみられ、時期的には縄文時代晩期末の範疇に入るものと思われる。また、突帯文土器とともに(8)が出土しており、共伴関係を示す資料として注目される。第５層以外からの遺物は、第４層から土師器とみられる底部が出土した。

第７トレンチ（Tr-７）〔第21・24図　図版８〕

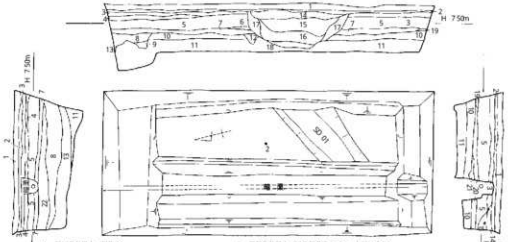
第６トレンチの東40m、第３トレンチから南70mに位置し、丘陵裾部の水田に設定した2.0×10.0mのトレンチである。地表下20～55cm前後に堆積する第４層の緑灰色粘土層が基盤層で、丘陵側から平野部中央に向かって傾斜している。暗渠によってかなり攪乱を受けているが、基盤層上位の第３層は比較的安定した堆積状況を示す。

トレンチのほぼ中央と西端から基盤層を掘り込んだ溝とピット状遺構を検出した。溝は幅95cm、深さ30cmを測り、ピットは径45～85cm、深さ35cmあまりである。遺物は出土しなかった。



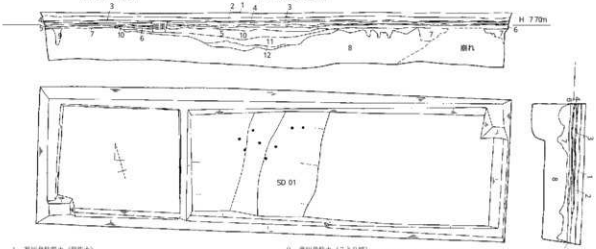
1. 褐灰色粘質土（副作土）
2. 褐灰色粘質土（褐色の混ざあり）
3. 褐色シルト（褐色の混ざあり）
4. 褐灰色粘質土
5. 褐灰色粘質土（褐色の混ざあり）
6. 灰黄褐色シルト
7. 黒褐色粘質土
8. オリーブ灰色粘土
9. 黒褐色粘質土（灰黄褐色砂混入）
10. にぶい黄褐色粘質土
11. 灰黄褐色粘質土
12. 灰黄褐色砂
13. 黒褐色粘質土

第１トレンチ



1. 褐灰色粘質土（副作土）
2. 褐灰色粘質土（褐色の混ざあり）
3. 褐色シルト
4. 褐灰色粘質土（褐色の混ざあり）
5. 褐灰色粘質土（褐色の混ざあり）
6. 灰褐色シルト
7. 黒褐色粘質土（シルト混じり。褐色の混ざあり。炭片を微かに含む）
8. 黒褐色粘質土（灰黄褐色砂をブロック状に含む）
9. 黒褐色粘質土（植物遺体を含む）
10. 黒褐色シルト
11. オリーブ灰色粘土
12. 黒褐色砂質土（灰黄褐色砂混入）
13. 黒褐色砂質土（植物遺体を含む。灰黄褐色砂混入）
14. 灰黄褐色シルト
15. にぶい黄褐色砂礫
16. 褐灰色粘質土
17. 褐灰色シルト
18. 褐灰色砂質土（粗砂混入）
19. 灰黄褐色砂
20. 黒褐色シルト
21. 黒褐色砂質土
22. 黒褐色粘質土（ホより細）

第２トレンチ

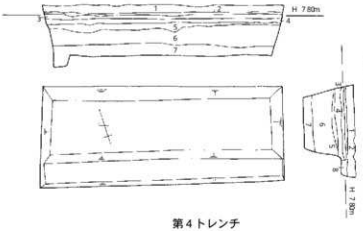


1. 褐灰色粘質土（副作土）
2. 褐灰色粘質土
3. 明黄褐色粘質土（床土）
4. 褐灰色シルト（1よりやや明）
5. 黄褐色シルト（床土。0.5～2cm大の礫を微かに含む）
6. 灰黄褐色シルト（4よりやや明）
7. 黄灰色粘土（シルト混じり。褐色の混ざあり。炭片を微かに含む）
8. オリーブ灰色粘土
9. 黄灰色粘土（7よりやや暗）
10. 黒褐色粘土（褐鉄鉱。炭片を含む。褐色の混ざあり）
11. 褐灰色粘質土（4より褐色かかる。炭片を含む。0.1mm大の礫がブロック状に含む。黄褐色の混ざあり。植物遺体を若干含む）
12. 褐灰色粘土（炭片を微かに含む。オリーブ灰色粘土を含む。植物遺体を若干含む）

第３トレンチ

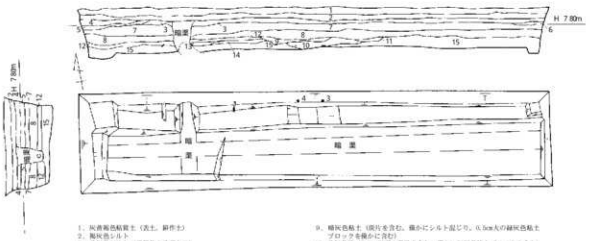
0　4m

第22図　本高弓ノ木遺跡第１・第２・第３トレンチ実測図



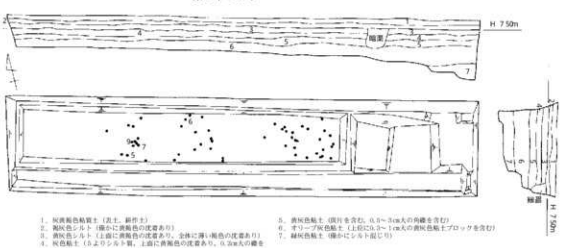
1. 褐灰色粘質土（耕作土）
2. 明黄褐色粘質土（床土）
3. 黄灰色シルト
4. 黄灰色粘質土（炭片を含む。黄褐色の沈着あり。）
5. 褐灰色粘質土（3より暗。炭片を含む。褐色の沈着あり。）
6. オリーブ灰色粘土（黄褐色の沈着あり。）
7. 緑灰色粘土（粘質強）
8. 褐灰色粘質土（暗褐色。炭片を含む。オリーブ灰色粘土ブロックを含む）

第４トレンチ



1. 灰黄褐色粘質土（表土、耕作土）
2. 褐灰色シルト
3. 黄灰色シルト（黄褐色の沈着あり）
4. 黄灰色シルト（3より暗で黄色がかる）
5. 灰色シルト（4より粘質）
6. 灰色シルト（7よりやや暗。3より粘質。黄褐色の沈着あり）
7. 灰色粘土（炭片を含む）
8. 灰色粘土（7より暗で粘質強。微かにシルト混じり。炭片を含む）
9. 暗灰色粘土（炭片を含む。微かにシルト混じり。0.5cm大の緑灰色粘土ブロックを微かに含む）
10. 黄灰色砂（0.3cm以下の微砂を含む。微かに緑灰色粘土ブロックを含む）
11. 黄灰色粘土（0.1cm以下の微砂を含む。緑灰色粘土ブロックを含む）
12. 灰色粘土（12より暗で粘質。2cm以下の緑灰色粘土ブロックを含む）
13. 暗灰色シルト（0.5cm大の緑灰色粘土ブロックを含む）
14. 黄灰色砂（暗灰色粘土を含む）
15. 緑灰色粘土

第５トレンチ



1. 灰黄褐色粘質土（表土、耕作土）
2. 褐灰色シルト（微かに黄褐色の沈着あり）
3. 黄灰色シルト（上面に黄褐色の沈着あり。全体に薄い褐色の沈着あり）
4. 灰色粘土（5よりシルト質。上面に黄褐色の沈着あり。0.5cm大の礫を含む。炭片を含む）
5. 黄灰色粘土（炭片を含む。0.5～3cm大の角礫を含む）
6. オリーブ灰色粘土（上位にO.5～1cm大の黄灰色粘土ブロックを含む）
7. 緑灰色粘土（微かにシルト混じり）

第６トレンチ

0　　4m

第23図　本高弓ノ木遺跡第４・第５・第６トレンチ実測図

第８トレンチ（Tr-８）〔第21・24・28図　図版８〕

第６トレンチから南東70mの丘陵裾部の水田に設定した2.0×10.0mのトレンチである。地表下80～90cmに堆積する第７層の緑灰色粘土層が基盤層で、第７層の上位に木片、炭片が含まれる灰色砂（第11層）がトレンチ東側に堆積する。

遺構は、第７、11層の上面に見られ、第６層が埋土となる溝状遺構と、第８、９、10層が埋土の土坑が検出された。

遺物は、溝状遺構の埋土から赤彩された高杯の脚部（第28図10）、第４層から糸切りの土師器底部が出土した。

第９トレンチ(Tr-９)〔第21・24・28図　図版８・９・17〕

第８トレンチから南西80mの水田に設定した2.0×10.0mのトレンチである。地表下80cm前後で確認したオリーブ灰色粘土層（第８層）が基盤層とみられ、下位には緑灰色粘土層が堆積している。

基盤層の上層は厚さ10cm前後の整然とした堆積層が見られる。

遺構は検出されなかった。遺物は、第４～６層で出土した。土師器の細片が主であるが、第６層には弥生土器片も含まれている。出土量は総数60点以上を数える。第28図11は第６層から出土した古墳時代前期の甕である。

第10トレンチ（Tr-10）〔第21・25図　図版９〕

第９トレンチから南へ約100mに位置し、有富川の左岸の水田に設定した2.0×10.0mのトレンチである。地表下1.0m前後に堆積する灰色粘土層（第７層）以下が基盤層と思われる。第７層の上層は黄灰色、暗灰黄色の粘土層（第５、６層）が整然と堆積している。

遺構は検出されなかった。遺物はいずれも細片で、第３層から磁器2、第４層から土師器の糸切り底部１、第６層から土師器口縁部1が出土した。

第11トレンチ（Tr-11）〔第21・25図　図版９〕

調査地の最も北側に位置し、県道高路・古海線から南東へ約60mの水田部に設定した3.0×4.1mのトレンチである。地表下90cm前後に堆積する灰色粘土層（第８層）が基盤層と思われる。第８層上位には湿地堆積の様相を呈するオリーブ黒色土の泥炭層（第７層）が堆積している。第７層の上層は全体に整った堆積状況が見られる。

遺構は検出されなかった。遺物は、第５層から須恵器片２、土師器片１が出土した。

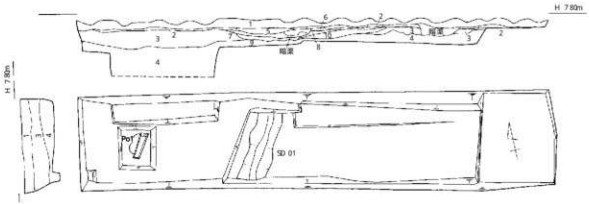
第12トレンチ（Tr-12）〔第21・25・28図　図版９〕

第10トレンチの南東65mに位置し、有富川の左岸堤防と丘陵間の狭い水田部に設定した2.0×4.8mのトレンチである。第９層のオリーブ黒色粘土層が基盤とみられ、その下位には灰色砂層が堆積している。第９層の上位には厚さ30cmあまりの灰色粘土層（第８層）が堆積し、その上層はおおむね整った堆積状況を示している。陶器片が出土した第４層から上位層は近現代の堆積層である。

遺構は検出されなかった。遺物は、第４層から陶器片1須恵器の高台付底部（第28図13）、土師器片１、第７層から土錘（第28図12）、第８層から須恵器片１、土師器片４が出土した。

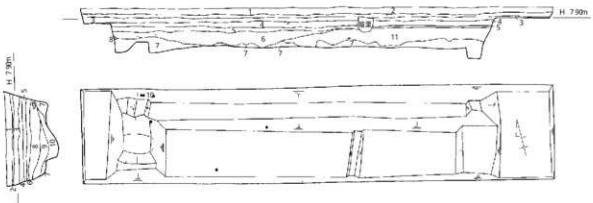
第13トレンチ（Tr-13）〔第21・26図　図版９〕

第12トレンチの南８mに設定した2.0×4.9mのトレンチである。地表下1.2m前後で確認された緑灰色粘土層が（第12層）が基盤層と思われ、河川側に傾斜する様子が見られる。第12層の上位には植物遺体や粘土を層状に含む灰色砂が堆積し、その上層は第７層～10層の灰白色、灰色、暗灰色などの粘土層が70cm近く堆積している。７層から上層はシルト層が10cmあまりの厚さで見られ、整然とした堆積状況がうかがわれる。第４、６、７、９層上面が遺構面の可能性が考えられたが、遺構は検出されなかった。遺物は第11層から板状木片1点が出土した。



1. 灰黄色粘質土（淡土、鉄作土）
2. 褐灰色シルト（微かに黄褐色の沈着あり）
3. 黄灰色粘土（微かにシルト混じり。0.5~1cm大の黄灰色粘土ブロックを微かに含む）
4. 緑灰色粘土（5より粘質。オリーブ色かる）
5. 暗灰色シルト（縄葉埋土。1~3cm大の礫を含む。黄褐色の沈着あり）
6. 黄灰色シルト（縄葉埋土）
7. 黄灰色シルト（縄葉埋土。黄褐色の沈着あり。やや粘質）
8. 灰色シルト（縄葉埋土。炭片を若干含む。1~3cm大の灰色粘土ブロックを含む）
9. 黄灰色粘土（縄葉埋土。シルト混じり。0.5cm大の礫を若干含む）
10. 黄灰色シルト（縄葉埋土。8より粘質。黄褐色の沈着あり。0.5cm大の灰色粘土ブロックを微かに含む）

第7トレンチ



1. 灰黄褐色粘質土（淡土、鉄作土）
2. 灰色シルト（オリーブ色かる、茶土）
3. 褐灰色シルト（褐色の薄い沈着あり）
4. 黄灰色粘土（シルト混じり。0.5cm大の礫を含む。黄褐色の薄い沈着あり）
5. 黄灰色粘土（4より粘質。0.2~0.5cm大の礫を含む）
6. オリーブ黒色粘土（シルト混じり。1~5cm大の緑灰色粘土ブロックを含む。10cm大の礫あり）
7. 緑灰色粘土（上位にオリーブ黒色粘土ブロックを含む）
8. 黄灰色砂（SK埋土。灰色粘土を層状に含む。炭片を含む。0.1cm未満の川砂）
9. オリーブ黒色粘土（木片・炭片を含む。0.1cm未満の川砂を含む）
10. 黒色粘土（シルト混じり。炭片を含む。0.5cm大の灰色粘土ブロックを含む）
11. 灰色砂（黄灰色砂を層状に含む。木片・炭片を含む）

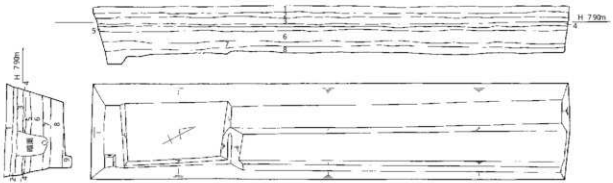
第8トレンチ

1. 灰黄褐色粘質土（淡土、鉄作土）
2. 褐灰色シルト（3より粘質）
3. 黄灰色シルト（上面に褐色の沈着あり）
4. 灰色シルト（上面に黄褐色の薄い沈着あり。0.3~0.5cm大の礫を含む）
5. 灰色シルト（4より明で粘質。0.1cm以下の礫を微かに含む）
6. 灰色粘土（5より緑。シルト混じり。炭片を微かに含む）
7. 灰色シルト（5より緑。6より明でシルト質）
8. オリーブ灰色粘土（6より明。1~2cm大の灰色粘土ブロックを微かに含む）
9. 緑灰色粘土（上面に黄褐色の沈着あり）

第9トレンチ

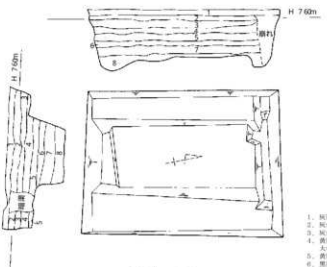
0 4m

第24図　本高弓ノ木遺跡第７・第８・第９トレンチ実測図



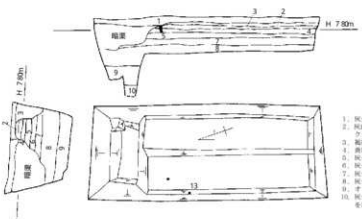
1. 褐灰色粘質土（表土）
2. 褐灰色粘質土（耕作土）
3. 褐灰色シルト（土盛に黄褐色の強い混者あり）
4. 暗灰黄色粘質シルト（黄褐色・褐色の混者あり）
5. 黄灰色粘土（褐色の混者若干あり）
6. 暗灰黄色粘土（全体に薄い褐色の混者あり）
7. 灰色粘土（3より暗，上面に褐色の混者あり）
8. 灰色粘土（7より暗，部分的に0.2~0.5cm大の白色礫を含む）
9. 緑灰色粘土

第10トレンチ



1. 灰褐色粘質土（表土，耕作土）
2. 灰色粘土（3より明，全体に黄褐色の混者あり）
3. 灰色粘土（黄褐色の薄い混者あり）
4. 黄灰色粘土（3・5より明，シルト混じり，炭片を微かに含む，0.5cm大の白色礫を若干含む，全体に褐色の薄い混者あり）
5. 黄灰色粘土（4より黄色かかり粘質，黄褐色の混者あり）
6. 黒褐色粘土（7より暗，炭粒を偏在に含む）
7. オリーブ黒色土（炭混層，6より明で褐色かかる）
8. 灰色粘土（土盛に0.5~0.5cm大の白色礫を若干含む）

第11トレンチ

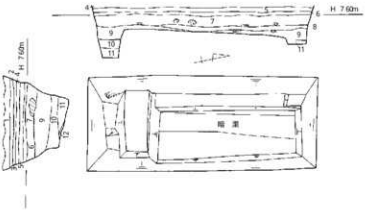


1. 灰黄褐色粘質土（表土，耕作土）
2. 灰黄褐色粘質土（1より明でシルト質，1cm大の褐灰色粘土ブロックを含む）
3. 褐灰色シルト（2よりシルト質，褐色の薄い混者あり）
4. 黄灰色シルト（3より褐色の混者薄い，炭片を含む）
5. 灰色シルト（4・6より明，0.1~0.5cm大の礫を含む）
6. 灰色シルト（5より明で混者薄い）
7. 灰色シルト（5より暗で粘質，0.1~0.5cm大の白色礫を含む）
8. 灰色粘土（0.1cm前後の礫を含む，シルト混じり，土器片を含む）
9. オリーブ黒色粘土（8より暗で粘質強，植物遺体を含む）
10. 灰色砂（0.1cm程度の礫砂・植物遺体を含む，オリーブ黒色粘土を偏在に含む）

第12トレンチ

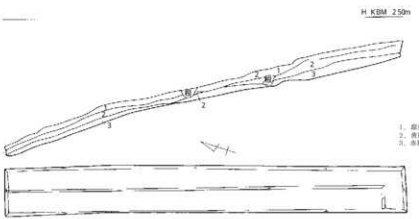
0　4m

第25図　本高弓ノ木遺跡第10・第11・第12トレンチ実測図



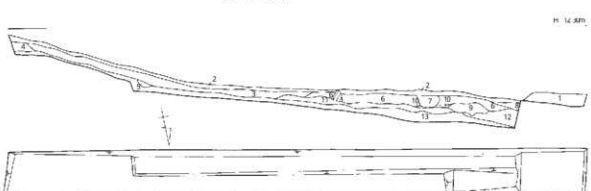
1. 灰黄褐色粘質土（表土、耕作土）
2. 灰黄褐色粘質土（1よりややシルト質、1cm大の褐灰色粘土ブロックを含む）
3. 褐灰色シルト（2よりシルト質、褐色の薄い皮膜あり）
4. 黄灰色シルト（全体に褐色の皮膜あり、炭片を含む）
5. 黄灰色シルト（4より粘質で灰白色かる、炭片を含む）
6. 灰色粘質シルト（5より明で灰白色かる）
7. 灰白色粘土（上面に黄褐色の薄い皮膜あり、シルト質、炭片を含む、0.5～0.5cm大の礫を含む）
8. 灰色粘土（0.1～0.5cm大の礫を含む、7より粘質強）
9. 褐灰色粘土（植物遺体を若干含む、0.1～0.5cm大の礫を微かに含む）
10. 褐灰色粘土（9より植で粘質強）
11. 灰色砂（0.1cm程度の微砂・植物遺体を含む、褐灰色粘土を層状に含む）
12. 褐灰色粘土

第13トレンチ



1. 盛土・表土
2. 黄褐色粘質土
3. 赤褐色粘質土（軟質起伝ち、地山）

第14トレンチ



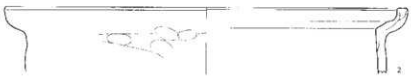
1. 廃棄物（ガラス瓶、陶磁器）
2. 表土
3. 黒褐色砂質土
4. 黒色砂質土
5. 褐灰色砂質土（炭片を含む）
6. にぶい黄褐色砂質土（暗褐色土ブロック、瓦片、陶磁器片を含む）
7. 暗褐色砂質土（瓦片、陶磁器片、ガラス瓶を含む）
8. にぶい黄褐色砂質土
9. 明黄褐色砂質土（2～4cm大の礫を含む）
10. 暗褐色砂質土（黒色土ブロックを含む）
11. 黒褐色砂質土（炭片を多く含む、瓦片、陶磁器片を含む）
12. 黒色砂質土（炭片・焼土、瓦片、陶磁器片を含む）
13. にぶい黄橙色砂質土（5～15cm大の礫を含む　地山）

第15トレンチ

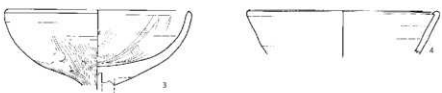
0　4m

第26図　本高弓ノ木遺跡第13・第14・第15トレンチ実測図

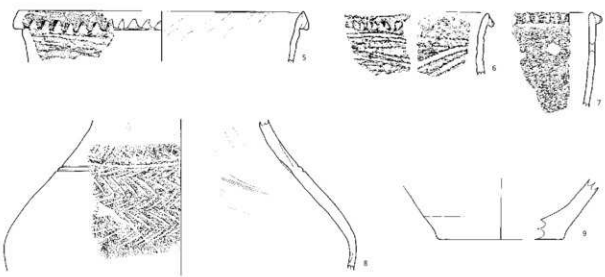
第１トレンチ出土遺物実測図



第２トレンチ出土遺物実測図



第５トレンチ出土遺物実測図



第６トレンチ出土遺物実測図

0　10cm

第27図　本高弓ノ木遺跡第１・第２・第５・第６トレンチ出土遺物実測図

第14トレンチ（Tr-14）〔第21・26図　図版９〕

釣山の南斜面に位置し、斜面の傾斜変換地に設定した1.0×8.5mのトレンチである。厚さ８～18cmの表土下層はしっかりした黄褐色粘質土（第２層）で、その下層が赤褐色粘質土（第３層）の地山となる。遺構、遺物は検出されなかった。

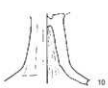
第15トレンチ（Tr-15）〔第21・26図　図版９〕

第７トレンチから南側35mの丘陵裾部に位置し、水田部から一段高い平坦部に設定した1.0×12.3mのトレンチである。地表下20～45cmに堆積するにぶい黄橙色砂質土（第13層）が地山とみられ、地山面は西側に傾斜する。地山上層の第11、12層には陶磁器片、瓦片などが含まれており、11、12層の上層はいずれも現代の堆積層である。遺構は検出されなかった。遺物は現代の陶磁器、瓦、ガラスのみである。

小　結

今回の調査は道路整備に伴い実施したもので、道路計画地内の15箇所にトレンチを設定した。調査の結果、第１、２、３、５、７、８トレンチから土坑、溝状遺構、ピット状遺構が検出された。また、明確な遺構は検出されなかったものの、第６トレンチで縄文時代晩期末の土器、第９トレンチからは古墳時代前期の土師器や弥生土器が多数出土し、遺物包含層が存在することが明らかになった。これらのトレンチは、いずれも釣山丘陵の西斜面を下った裾部よりに設定したもので、それぞれが安定した基盤層が検出された。遺跡がこのような安定地盤をベースとして展開しているものと思われる。

今回の調査から遺跡範囲を明確にすることはできないが、有富川の左岸近くに設定した第10、12、13トレンチでは遺構は検出されず、遺物も土器の細片が数点にとどまることから、同地区に遺跡が所在する可能性は少ないものと推測される。また、今回の調査で最も北側に設定した第11トレンチでは、他のトレンチで確認されなかった泥炭層の堆積がみられ、湿地的な古環境が予想された。遺構は検出されず、遺物も土器片３点の出土であったが、水田遺跡等が存在する可能性もあり注意が必要と思われる。



第８トレンチ出土遺物実測図

第９トレンチ出土遺物実測図

第12トレンチ出土遺物実測図

第28図　本高弓ノ木遺跡第８・第９・第12トレンチ出土遺物実測図

第６節　宮谷古墳群

宮谷古墳群は、野坂側の右岸に位置し、宮谷集落から北東へ約0.7kmの丘陵上に立地している。古墳群は22基あまりで構成され、同一丘陵上には本高、古海、徳尾などの各古墳群が立地している。本古墳群北西側の野坂川左岸に開けた平野部には弥生時代～奈良時代の大枘遺跡が展開している。

今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、計画路線内に5箇所の試掘トレンチを設定した。

第１トレンチ（Tr-１）〔第29・30図　図版10〕

宮谷11～22号墳が位置する主稜線から北西に下った中腹部の緩斜面上に設定した1.0×5.8mのトレンチである。厚さ8～10cmあまりの表土下には褐色粘質土の堆積が見られ、その下層の黄橙色粘質土が地山である。地山を加工した痕跡や盛土もなく遺構・遺物は検出されなかった。

第２トレンチ（Tr-２）〔第29・30図　図版10〕

第１トレンチから北西に下った斜面の傾斜変換地点に設定した1.0×6.0mのトレンチである。斜面の高位側の表土下は黄橙色粘質土（第８層）の地山となるが、斜面の傾斜変換地点ではこの地山を溝状に削り出した地山加工面が認められた。第２層のにぶい黄橙色粘質土、第３層の暗褐色粘質土が溝の埋土である。また、トレンチの西よりから、地山をしっかり掘り込んだ土壙が検出され、土壙直上の第４層から須恵器体部片が検出された。土壙は幅1.6m、深さ60cm前後を測り、古墳に伴う埋葬施設と考えられる。斜面上位側に周溝を巡らす直径8mあまりの古墳が築かれているものと思われる。

第３トレンチ（Tr-３）〔第29・30図　図版10〕

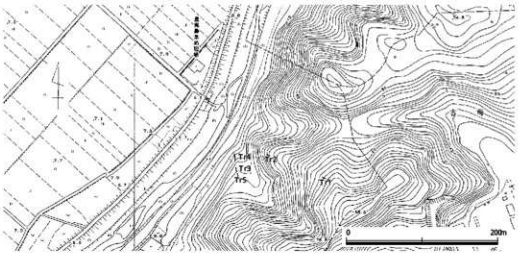
斜面裾部に形成された支稜線上の傾斜変換地点に設定した1.0×5.6mのトレンチである。厚さ10～18cmあまりの表土下は赤褐色、黄橙色軟岩の地山となる。地山を加工した痕跡や盛土もなく遺構、遺物は検出されなかった。

第４トレンチ（Tr-４）〔第29・30図　図版10〕

第３トレンチの約7m下位に設定した0.9×10.2mのトレンチである。厚さ8～20cmあまりの表土下の一部に褐色粘質土（第２層）の堆積がわずかに見られるが、他は赤褐色・黄橙色軟岩の地山となる。地山を加工した痕跡や盛土もなく遺構、遺物は検出されなかった。

第５トレンチ（Tr-５）〔第29・30図　図版10〕

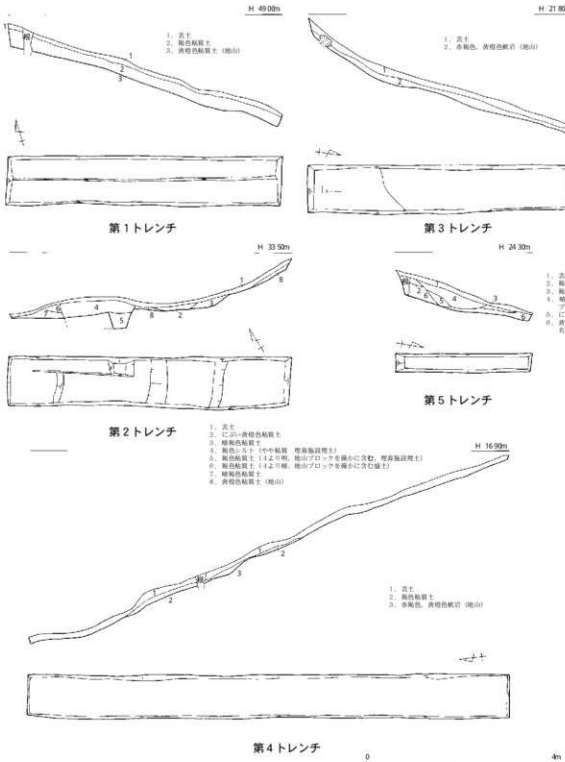
第３トレンチの上位に設定した0.4×2.9mのトレンチである。岩脈が入る黄橙色砂質土（第６層）が地山とみられ、この地山を削り出した掘削面を検出した。トレンチの上位に位置する古墳の裾部にあたるものと考えられる。遺物は検出されなかった。



第29図　宮谷古墳群調査トレンチ位置図

小　結

第２トレンチから周溝と埋葬施設が検出され、直径８ｍ前後の古墳の存在が明らかとなった。また、第５トレンチでは古墳の裾部を意識したものと思われる地山掘削面が検出され、直径18m以上の大型古墳が上位に築かれているものと思われる。この古墳については、道路整備地内に近接することから取り扱いについては十分な注意が必要である。



第30図　宮谷古墳群第１・第２・第３・第４・第５トレンチ実測図

第７節　徳尾古墳群

徳尾古墳群は野坂川右岸に位置し、野坂川に沿って北東に延びる丘陵の先端部に立地している。同一丘陵には古海古墳群や本高古墳群などが所在し、多くの古墳が築造されている地域となっている。徳尾古墳群の調査は、道路改良工事に伴い昭和60年度に行われ、古墳時代前期の古墳や中世墓が検出されている。

今回の調査は、崩落危険箇所の整備計画に伴い実施したもので、調査地の同一丘陵上には徳尾５号墳～13号墳が立地している。調査地は丘陵の先端部にあたり、計画地内3箇所にトレンチを設定して確認調査を行った。

第１トレンチ（Tr-１）〔第31・32図　図版10〕

丘陵の先端頂部に設定した0.75×4.1mのトレンチである。表土下から周溝と思われる溝を検出した。溝は、幅1.5m、深さ40cm前後を測り、尾根を横断する状態で掘り込まれているものと思われる。第２、４、５層が溝の埋土である。また、トレンチ東側の崩落面からは埋葬施設とみられる幅135cm、深さ61cmの土壙が確認された。径９m前後の古墳が所在するものとみられる。遺物は、周溝埋土から弥生土器片が１点出土した。

第２トレンチ（Tr-２）〔第31・32図　図版11〕

第１トレンチから西斜面を下った中腹の緩斜面に設定した0.7×3.4mのトレンチである。周辺には墓地として使用されていた痕跡が随所に見られる。表土下の第２層は地山礫が混入することなどから墓地に伴う撹乱土と思われる。第２層以下に堆積するシルト層が基盤層になるものと思われる。遺構は検出されなかったが、第２層から土師器の細片が２点出土した。

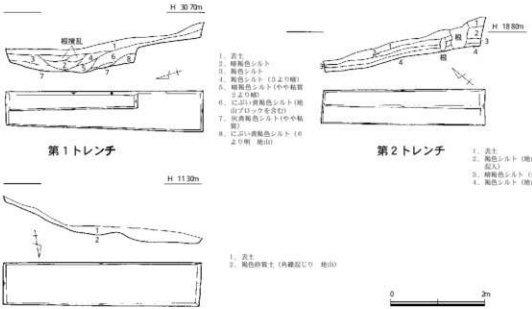
第３トレンチ（Tr-３）〔第31・32図　図版11〕

西斜面裾部の傾斜変換地点から平坦部にかけて設定した0.9×4.1mのトレンチである。厚さ10～25cmあまりの表土下は角礫混じりの褐色砂質土の地山である。地山を加工した痕跡もなく遺構・遺物は検出されなかった。

小　結

丘陵線上に設定した第１トレンチで古墳の存在を確認した。同一丘陵上には連続して古墳が築かれていることから、隣接地に古墳が存在する可能性が高いものと考えられる。

第31図　徳尾古墳群調査トレンチ位置図



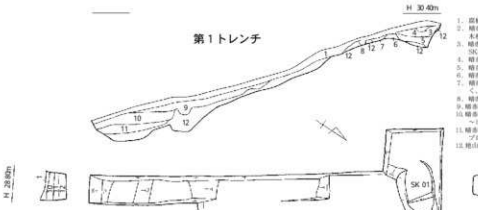
第32図　徳尾古墳群第１・第２・第３トレンチ実測図

第８節　里仁36号墳

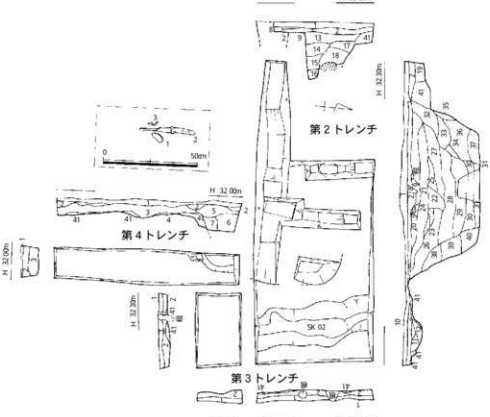
里仁36号墳は湖山池より南東1.8km、千代川左岸域に拓けた鳥取平野の鳥取市里仁字白坂に所在する。一帯は80m規模の前方後円墳里仁29号墳をはじめ多数の古墳を擁する里仁古墳群が展開し、中国山地から鳥取平野に伸びた野坂、明治の谷を形成する丘陵先端にあたる。当古墳はその中でも最北東端部に位置し、鳥取平野から日本海を一望する丘陵頂部に立地している。現在は県道により分断され高さ20mほどの独立丘陵の様相を呈しているが、もともとは同じ丘陵に連なり古墳群を形成している。丘陵を南に下ると前方後円墳の桝間１号墳や、平野部では大桝遺跡で弥生時代後期から古墳時代前期を中心に奈良時代まで断続する集落址が確認されるなど、周辺は遺跡が密集する地域である。

調査地である里仁36号墳は、1981年県道鳥取倉吉線建設にかかわる調査で里仁１号墳（消滅）と近接する形で発見された遺跡である。

第33図　里仁36号墳調査位置図



1. 表土・暗赤褐色粘質土
2. 暗赤褐色粘質土（1より中明）
3. 暗赤褐色粘質土（2より中明；1～2cm大の地山ブロックを微かに含む）
4. 暗赤褐色粘質土（2より中明）
5. 暗赤褐色粘質土（3．5よりやや暗；1～4cm大の地山ブロックを含む；やや赤褐色度強）
6. 暗赤褐色粘質土（5よりやや明；1～5cmの地山ブロックを密に含む；やや赤褐色度強）
7. 暗赤褐色粘質土（5よりやや明るく，6よりやや暗；1～2cm大の地山ブロックを含む；やや赤褐色度強）
8. 黒褐色粘質土（しまっていない；根雑根）
9. 暗赤褐色粘質土（2より明；1あまりしまっていない）
10. 暗赤褐色粘質土（2より明；SK01埋土）
11. 暗赤褐色粘質土（2．10よりやや明；0.5～2cm大の地山ブロックを含む；SK01埋土）
12. 暗赤褐色粘質土（10よりやや明；1～2cm大の地山ブロックをごく微かに含む；SK01埋土）
13. 暗赤褐色粘質土（12よりやや明；1～7cm大の地山ブロックを密に含む；やや赤褐色度強）
14. 暗赤褐色粘質土（12よりやや明；1～5cm大の地山ブロックを密に含む；やや赤褐色度強）
15. 暗赤褐色粘質土（12よりやや暗く，やや灰色かかる；1～3cm大の地山ブロックを多く含む）
16. 暗赤褐色粘質土（15よりやや明；あまりしまっていない；1～5cm大の地山ブロックを含む）
17. 暗赤褐色粘質土（13，14よりやや明；1～3cm大の地山ブロックを密に含む）
18. 暗赤褐色粘質土（13，14，17よりやや暗く，10よりやや明；1～10cm大の地山ブロックを密に含む；やや灰色かかる）
19. 暗赤褐色粘質土（12よりやや明；1～2cm大の地山ブロックを含む）
20. 暗赤褐色粘質土（13，9よりやや明；1～10cm大の地山ブロックを多く含む）
21. 暗赤褐色粘質土（19，20よりやや明；1～10cm大の地山ブロックを多く含む）
22. 暗赤褐色粘質土（20よりやや明；1～3cm大の地山ブロックを含む；あまりしまっていない）
23. 暗赤褐色粘質土（20よりやや明；やや赤褐色度強；1～5cm大の地山ブロックを含む）



24. 暗赤褐色粘質土（21，22よりやや明るく，23よりやや暗；やや赤褐色度強；0.5～1cm大の地山ブロックを含む）
25. 暗赤褐色粘質土（22よりやや明；やや赤褐色度強；0.5～1cm大の地山ブロックを多く含む）
26. 暗赤褐色粘質土（12，22よりやや明るく，21，25，23よりやや暗；1.5～5cm大の地山ブロックを密に含む）
27. 暗赤褐色粘質土（26，22よりやや明るく，21，23よりやや暗；0.5～5cm大の地山ブロックを密に含む）
28. 暗赤褐色粘質土（26，27よりやや明；1～7cm大の地山ブロックを多く含む）
29. 暗赤褐色粘質土（28よりやや暗；2～5cmの地山ブロックを多く含む；やや灰色かかる）
30. 暗赤褐色粘質土（29よりやや暗；2～5cm大の地山ブロックを含む；やや灰色かかる）
31. 黒褐色粘質土＋暗赤褐色粘質土（0.5～1cm大の地山ブロックを含む；やや灰色かかる）
32. 暗赤褐色粘質土（12，30，27よりやや暗；1～3cm大の地山ブロックを密に含む；やや黄褐色かかる）
33. 暗赤褐色粘質土（25，26，32よりやや明；1～5cm大の地山ブロックを多く含む）
34. 暗赤褐色粘質土（28，33よりやや暗；2～4cm大の地山ブロックを密に含む）
35. 暗赤褐色粘質土（32よりやや明；33よりやや暗；1.5～3cm大の地山ブロックを密に含む）
36. 暗赤褐色粘質土（28，34よりやや暗く，35よりやや明；1～6cm大の地山ブロックを密に含む；やや灰色かかる）
37. 暗赤褐色粘質土（36よりやや明く，30，31よりやや明；1～3cm大の地山ブロックを密に含む；やや灰色かかる）
38. 暗赤褐色粘質土（36よりやや明るく，28よりいやや暗；2～8cm大の地山ブロックを多く含む）
39. 暗赤褐色粘質土（28，36よりやや暗く，29よりやや明；2～5cm大の地山ブロックを密に含む）
40. 暗赤褐色粘質土（28，39よりやや暗く，30，31よりやや明；2～5cm大の地山ブロック及び20～40cm大の地山石を密に含む）
41. 地山

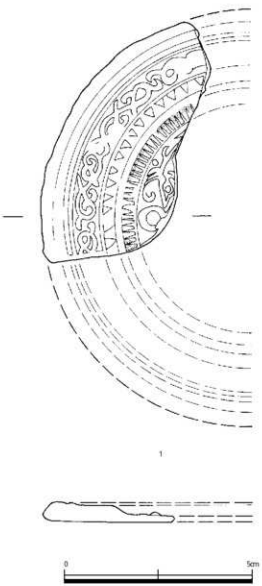
第34図　里仁36号墳第１・第２・第３・第４トレンチ実測図

第１～第４トレンチ（Tr-１～Tr-４）〔第33～36図　図版11・12・17〕

この度土地造成計画の浮上に際し４箇所のトレンチを設定し試掘調査を行った。丘陵裾部は道路などによって大半が削平をうけており、原地形が残る丘陵南東部分のうち頂部（平坦部）から丘陵斜面の傾斜変換点にかけて第１トレンチを、丘陵頂部平坦部に第２～第４トレンチを設定した。頂上部の標高は32mとなる。

第１トレンチ端より南東方向へ5.6m、標高約28mの地点で、地山を掘り込んだ傾斜の変換を確認した。古墳の裾部の可能性も考えられる。また、約1.2m×0.8m、深さ約0.2mの土坑（SK-01）を検出した。丘陵頂部では深さ1.5mほど地山を掘り込んだ埋葬施設を検出した。墓壙は墳頂平坦面中央に位置し、現況で南北3m、東西3mの範囲で確認できる。木棺直葬かと見られ、南北に軸をとる。同じく頂部で２m強×0.8m、深さ約0.2mの土坑（SK-02）を検出した。盛土は確認できなかった。

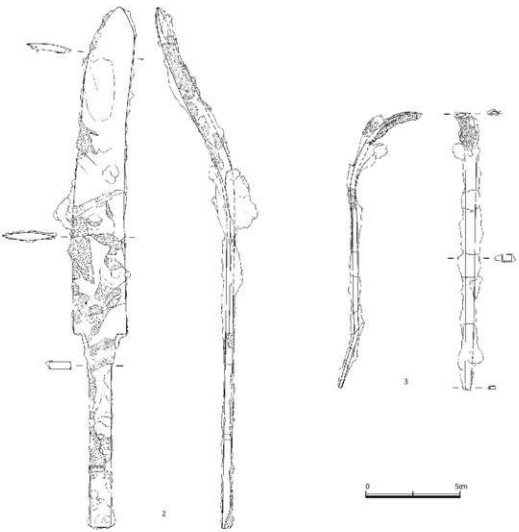
出土遺物は主体部の中央から北床面より鏡片・鉄剣・鉇が出土している。これら副葬品は、切先を北向きに配置した鉄剣を中央にはさみ、両側に鏡片、鉇を配した状態で検出した。鏡片は鏡面を上に、鏡背を埋葬施設床面と接する形で出土している。



第35図　里仁36号墳出土遺物実測図(1)

鉄剣(2)は長さ27.6cm、幅2.8cm、完形で遺存し、目釘孔が確認できる。剣身から茎部にかけて布目痕がある。鉇(3)は全長17.3cm、厚み0.3cm前後でほぼ完存し、刃部に布を巻き上げた痕跡がある。ともに全体を布で巻きつけ覆っていたようである。

鏡片(1)は破鏡で復元径11.0cmの鏡の長さ7cm、幅3.5cmの部分が遺存する。全体に白銅色をとどめ、穿孔等はないが破断面は精緻に研磨されている。また、断面の一部や鋸歯文部分に赤色顔料が付着している。外区には芝草文と鋸歯文が施され、内区に櫛歯文、主文には鳥（鳳凰か？）が施文されるが、文様はやや明瞭さに欠ける。乳が確認できるが銘文（帯）はみられない。中国鏡のうち岡村編年による漢鏡4期の方格規矩鏡、あるいは獣帯鏡の可能性が考えられる。



第36図　里仁36号墳出土遺物実測図(2)

小　結

調査の結果、当該地は周辺部の削平により裾部が不明瞭であるものの、直径23m強、高さ1.5m以上、地山を掘削した墓壙を持つ古墳であることが確認できた。築造時期は土器類の出土が無いが、周辺の古墳群や埋葬施設の状況、副葬品等から古墳時代前期が考えられる。周辺古墳群も含め、開発行為には十分留意が必要となる。

今回出土の破鏡は状態の良さからしても例をみない資料である。破鏡は近年その例が増加しているが、弥生時代後期から北部九州を中心に広く出土する。鳥取市内では弥生時代後期から古墳時代初頭に秋里遺跡、伊勢谷遺跡、青谷上寺地遺跡よりそれぞれ内行花文鏡、八禽鏡の鏡片が、前期古墳の横枕22・23号墳で内行花文鏡片が出土している。また市内中国鏡出土例のうち調査地近隣では古墳時代前期、丘陵

をはさんで反対側に築かれた桂見２号墳の内行花文鏡、獣帯鏡が挙げられよう。

破鏡出土の意味については様々な解釈があるが、ヤマト政権とは別の北部九州を中心とした勢力を介在とした配布関係、あるいは紐帯を象徴するという点において見解の一致をみている。こうしたことと周辺地域の破鏡出土遺跡と連動させると、里仁36号墳は地域の盟主墳である前方後円墳を築いた首長層とは異なり、中国鏡を持ちえた弥生時代からの首長系譜を継ぐ集団の奥城とも考えられる。そこからはこの地域が未だ三角縁神獣鏡、前方後円墳に代表されるヤマト政権の政治勢力に組み込まれない、前代からの風習を保つ様相を見て取れないだろうか。

古墳群の全体像や中国鏡、破鏡の性格に関しては、鳥取県東部における弥生時代から古墳時代移行期の政治的動向の中での位置づけが必要であり、今後の課題としたい。

第９節　天神山遺跡

天神山遺跡は、鳥取平野の西端に形成された潟湖である湖山池の東側に立地している。湖山池周辺には、桂見遺跡をはじめ縄文時代前期から弥生時代、古墳時代、古代、中・近世の遺跡が多く形成されており、国史跡である前方後円墳の布勢古墳や戦国期の城館遺跡である県指定史跡天神山城跡も位置している。

今回の調査は、公共下水道整備事業および宅地開発に伴って実施した。調査地は、湖山南三丁目地内に位置し、おおむね天神山遺跡の南東端にあたる。調査は、整備計画地内に２箇所のトレンチを設定して行った。

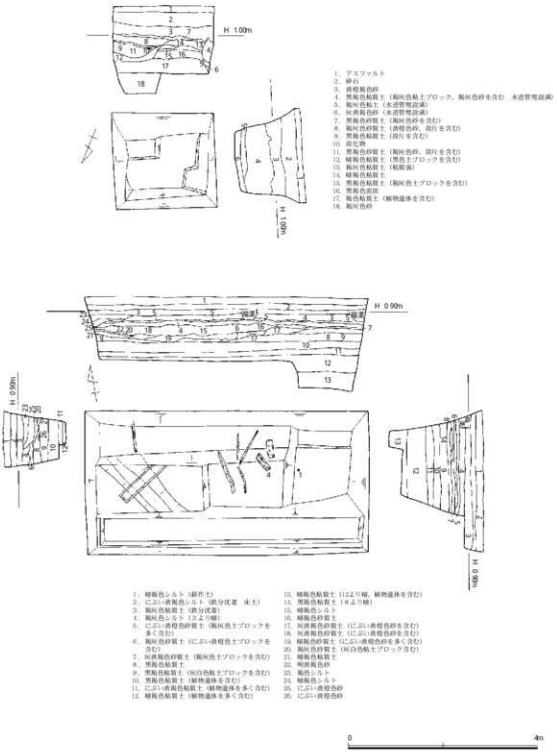
第１トレンチ（Tr-１）〔第37～39図　図版11〕

布勢古墳が築造されている丘陵裾部から北へ約100mに位置し、農高南町内公園の南を通る市道上に設定した2.0×2.1mのトレンチである。路面下55～70cmは路床で、トレンチ西側の路床下に水道管の埋設溝が入る。第４～６層は埋設溝の埋土で、合板や陶磁器片が含まれている。旧堆積層は第13層以下と

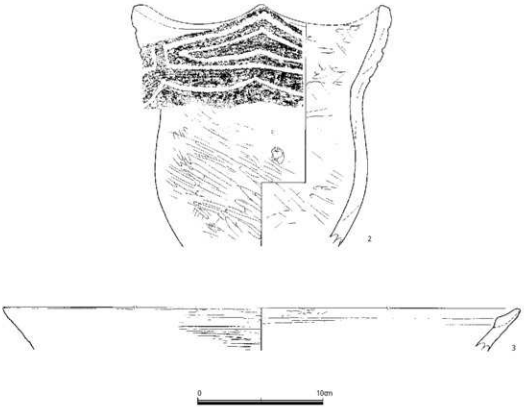
第37図　天神山遺跡調査トレンチ位置図

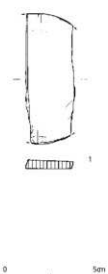
みられ、第16層が湖山池周辺で見られる黒褐色泥炭層である。下層には植物遺体を含む褐色粘質土（第17層）が厚さ30cm程度で堆積し、標高0.2mで褐灰色砂（第18層）となる。

遺構は、第13層上面から検出された。第８～12層が埋土とみられる土坑状の掘り込みで、深さ50cmあまりを測る。埋土の第９層から曲物底板（第39図１）、板状木片、棒状木片が出土したが、時期は不明である。(1)は約１/４が残存する。厚さ0.9cm、推定径13.8cmを測り、側面に径2.5mm程度の目釘孔が観察され、一部に木釘が残る。水道管埋設溝、土坑埋土以外からの遺物は検出されなかった。

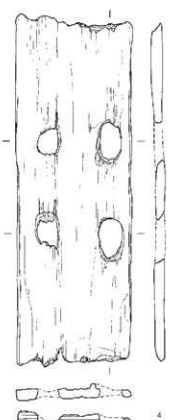


第38図　天神山遺跡第１・第２トレンチ実測図





第１トレンチ出土遺物実測図



第２トレンチ出土遺物実測図

第39図　天神山遺跡第１・第２トレンチ出土遺物実測図

第２トレンチ（Tr-２）〔第37～39図　図版11・17〕

緑風高校から南東150mに位置し、住宅地内に残る水田に設定した3.0×6.0mのトレンチである。現地表の標高は1.2m前後を測り、地表下25～30cmは水田耕作に伴う堆積層である。以下の第３、４層は比較的安定した堆積状況を示し、下層の第５～７層には褐灰色土やにぶい黄橙色土のブロックがかなり含まれており、二次堆積の状況がうかがわれる。第８層以下はほぼ順層の堆積が見られ、第10～13層には植物遺体がかなり含まれている。

遺構は、第４層の上面から幅70cm、深さ25cmの溝を検出した。第23～25層が溝の埋土である。また、第８層の上面から、第15～19層が埋土となる浅い溝状の窪みが検出され、埋土中から土師器片、田下駄、自然木が出土した。

遺物は、第13層から縄文土器（第39図２）、第９層から弥生土器(3)、溝状遺構埋土から田下駄(4)が検出された。(2)は波状口縁をもつ鉢である。口縁部１/４、体部１/５が残存し、推定口径18.8cm、最大胴径16.8cmを測る。全体にヘラミガキを施したのち、口頸部を沈線で区画し、沈線文を施している。口縁端から外面全体に煤がしっかり付着し、内面には炭化物の付着が観察される。時期は縄文時代後期後葉の範疇に入るものと思われる。(3)は弥生土器の口縁部である。外面は平行沈線のちナデ、内面はヘラミガキである。(4)は両端をわずかに欠き、残存長37.4cm、幅12cm前後を測る。前後左右に４個の孔を穿つ。

小　結

今回の調査対象地は天神山遺跡の南東端に位置する。調査の結果、土坑状遺構、溝状遺構が検出され、遺跡が所在することが明らかとなった。

また、包含層遺物ながら縄文土器、弥生土器などの出土もあり、遺跡範囲が南側に広がっていく可能性も考えられる。

第10節　城山城跡

国府町高岡地内に所在し、高岡集落の北東丘陵に立地している。稜線上には高岡８号墳～16号墳が位置し、城跡はこれらの古墳とともに同一丘陵に展開している。高岡集落を囲む周辺丘陵にも20基を超える古墳が知られており、それぞれが高岡古墳群を構成している。また、丘陵の正面には袋川が流れ、左岸の平野には因幡国庁跡や国分寺跡などが立地し、政治、文化の中心的役割を果たしてきた地域であることがわかる。

今回の調査は、砂防工事に伴うもので、砂防堰堤の建設予定地に３箇所のトレンチを設定し確認調査を行った。

第１トレンチ（Tr-１）〔第40・41図　図版12〕

丘陵北斜面の中腹に形成されたテラス状の平坦地に設定した1.0×7.0mのトレンチである。トレンチの北には山道が通り、かなり改変された状況がうかがわれる。厚さ10～20cmあまりの表土下ににぶい黄褐色シルト層（第２層）が見られ、その下層が地山の黄橙色のシルト層（第３層）である。

遺構・遺物は検出されなかった。

第２トレンチ（Tr-２）〔第40・41図　図版12〕

第１トレンチの下段に広がる平坦部に設定した2.4×11.0mのトレンチである。トレンチの南を山道が通り、山道整備によるものと思われる掘削の痕が観察される。地表下35～80cmで確認された第４層のにぶい黄褐色粘質土が地山で、地山面は北東側から丘陵下位に向かって傾斜している。トレンチの南西側で、地山上に盛土（第５～16層）が行われ、盛土前面に石垣が築かれている状況が確認された。石垣を築き、その背面に盛土を行うことで平坦部を拡張した様子がうかがわれた。

近年まで耕作地として利用されていたとのことから、これらに伴い造成されたものと考えられる。遺物は検出されなかった。

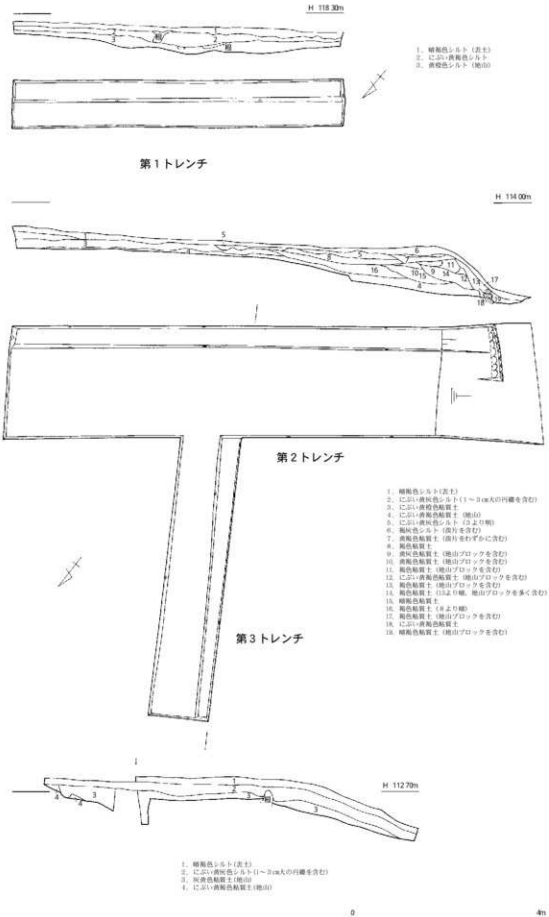
第３トレンチ（Tr-３）〔第40・41図　図版12〕

第２トレンチの北西側に設定した1.3×6.0mのトレンチである。表土下の第２、３層が基盤層と思われる。遺構・遺物は検出されなかった。

小　結

調査の結果、城跡に伴う遺構・遺物は検出されなかったが、稜線上や丘陵斜面には郭の可能性が考えられる平坦部が見られることから、周辺の丘陵部を含めて注意が必要である。

第40図　城山城跡調査トレンチ位置図



第41図　城山城跡第１・第２・第３トレンチ実測図

第11節　卯垣古墳群

鳥取市小西谷に所在し、滝山ニュータウンの北東丘陵上に展開している。古墳群には６基あまりの古墳が知られており、調査対象地の近くに６号墳が位置する。周辺丘陵には、滝山古墳群、立川古墳群や、県道鳥取福部線の南東丘陵には22基あまりからなる首山古墳群が立地している。

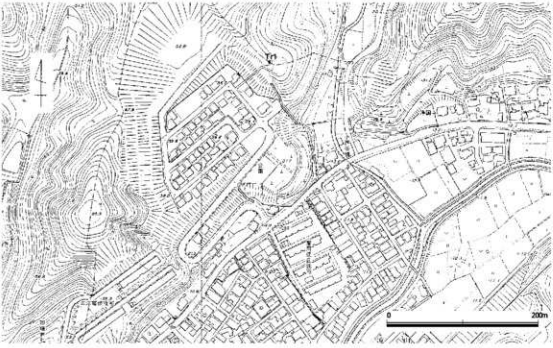
今回の調査は、携帯電話基地局の整備に伴って実施したもので、整備予定地内の１箇所にトレンチを設定した。

第１トレンチ（Tr-１）〔第42・43図　図版12〕

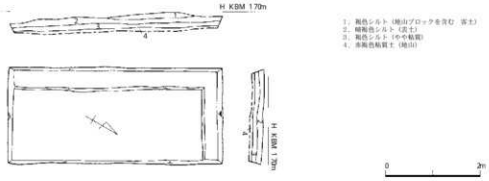
住宅団地の北西丘陵上に位置し、既存する水道施設の北西5mに設定した2.0×4.5mのトレンチである。厚さ10～15cmの表土下に堆積する第３層が基盤層と思われる。遺構、遺物は検出されなかった。

小　結

調査の結果、遺構・遺物は検出されず、整備地内には遺跡が所在しないものと考えられる。また、遺跡分布地図によれば、調査対象地に隣接して卯垣６号墳が記載されているが、周辺には古墳の存在を示すものは確認されなかった。



第42図　卯垣古墳群調査トレンチ位置図



第43図　卯垣古墳群第１トレンチ実測図

第12節　蔵見古墳群

蔵見古墳群は鳥取市福部町中央東寄りの蔵見地区に位置し、岩美町と福部町を介する標高346mの二上山から派生する丘陵上に造営され、塩見川支流沿い、蔵見地区へ続く谷の入口部分に立地している。現在まで10基あまりが確認されており、中でも７世紀末から８世紀初頭に築造された蔵見２、３号墳では、鳥形瓶や仏教文化の影響が窺える鴟尾付陶棺が出土するなど、特色ある様相を示している。またこの度の調査地付近やや南東よりの丘陵では、中世墓である蔵見１号墓が所在し、水田地帯をはさんで対岸の丘陵には南田古墳群が形成されるなど、古墳時代から中世にかけての遺跡が分布する地帯である。

調査地は福部町蔵見集落後背の南西方向へ延びる尾根筋にあたり、標高52～62mを測る。この度砂防工事の実施にともない、蔵見１号墓の所在する丘陵先端より分断された北東側尾根稜線上に順に５箇所のトレンチを設定し、試掘調査を行った。

第１トレンチ（Tr-１）〔第44・45・47図　図版13〕

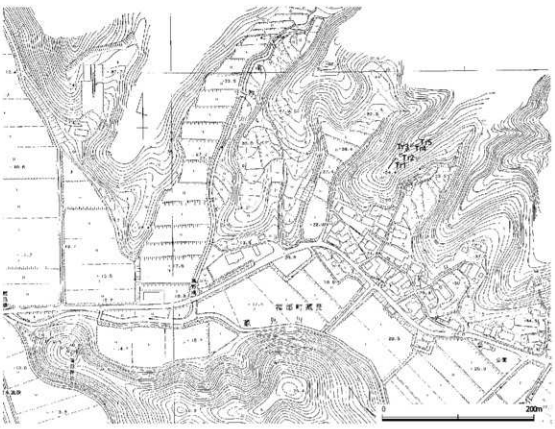
西側の丘陵と尾根とを分断する傾斜地に設定した1.0×17.4mのトレンチである。調査区域では西端に位置し、標高56.6mから西へ緩やかに傾斜し、53.7mの地点で比高差１mほど落ち込む。地表面下10cm程度腐葉土が堆積し、明黄褐色粘質土の地山に達する。トレンチ南西部表土中より青磁碗高台（第47図１）が出土した。退化した線描きの連弁が施され、15世紀後半の所産と考えられる。

第２トレンチ（Tr-２）〔第44・45図　図版13〕

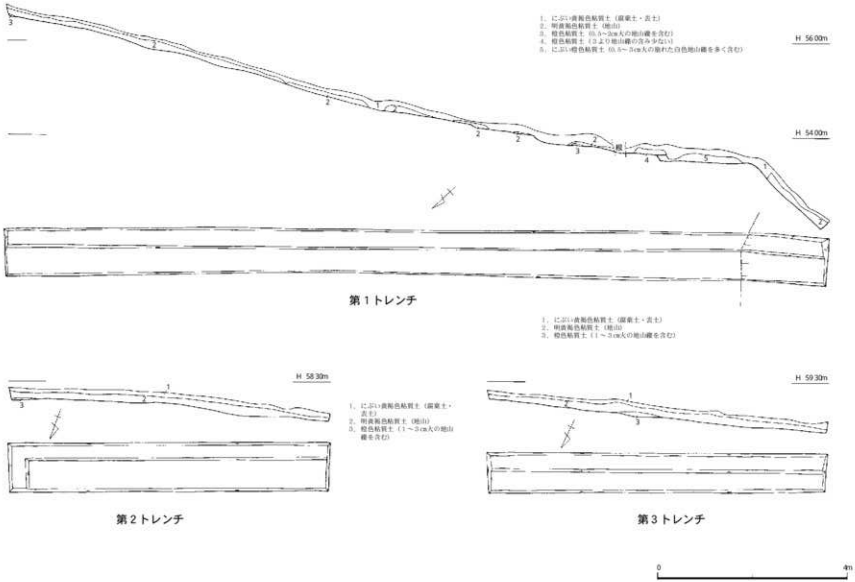
標高58m前後、1.0×6.8mのトレンチである。地表面下10cmほどで地山となる。遺構、遺物ともに検出されなかった。

第３トレンチ（Tr-３）〔第44・45図　図版13〕

標高59m前後、0.8×7.2mのトレンチである。地表面下10cmほどで地山となり、遺構、遺物ともに検出されなかった。



第44図　蔵見古墳群調査トレンチ位置図



第1トレンチ

第2トレンチ

第3トレンチ

第45図　蔵見古墳群第１・第２・第３トレンチ実測図

第４トレンチ（Tr-４）〔第44・46図　図版13〕

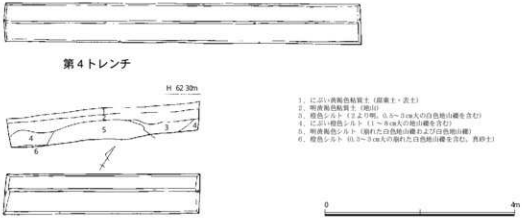
0.8×7.5mのトレンチで、標高61.5mから61m強を測る。表土と地山からなる堆積をなし遺構、遺物ともに検出されなかった。

第５トレンチ（Tr-５）〔第44・46図　図版13〕

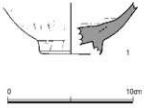
今回の調査区の中では尾根筋最東端に設定した0.8×4.1mのトレンチである。尾根頂部に近く、標高は62mを測る。地表面下10cmで明黄褐色粘質土の地山に達する。遺構、遺物ともに検出されなかった。

小　結

調査の結果、当該地西側尾根筋には明確な遺跡は確認できなかった。しかし、第１トレンチ表土中より15世紀末ごろの遺物が確認されており、蔵見１号墓の所在する小丘陵付近の開発には留意が必要である。



第46図　蔵見古墳群第４・５トレンチ実測図



第47図　蔵見古墳群第１トレンチ出土遺物実測図

第13節　最勝寺山城跡

最勝寺山城跡は、河原町片山の霊石山頂部（標高280～330m）に位置し、西側を流れる千代川の流域や智頭往来を広範囲に一望できる要地に築かれている。郭は南北約300m、東西約400mにわたり、堀切や土橋などが比較的良好な状態で遺存している。同一丘陵の西側裾部（標高55m）に稲常城跡、南斜面中腹には最勝寺旧跡が存在する。

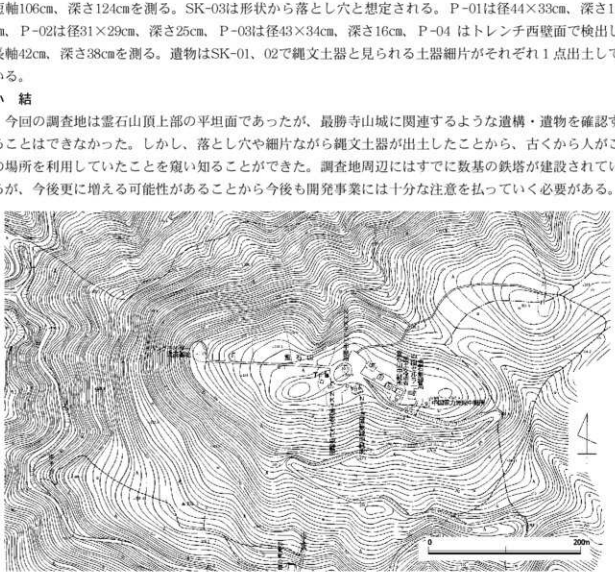
今回の調査は携帯電話アンテナ基地局新設工事に伴い実施したものである。調査地は、霊石山頂部のやや東側の緩い傾斜が見られる平坦面にトレンチを設定した。

第１トレンチ（Tr-１）〔第48、49図　図版14〕

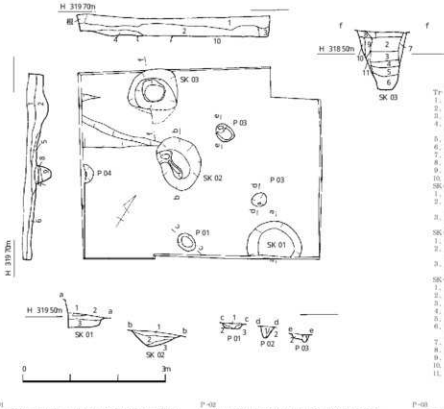
携帯電話アンテナ基地局新設工事の建設予定地内に設定したトレンチである。当初は3.4m×3.5mの範囲で調査を実施したが、その後西側0.5m、南側を幅1.5mのＬ字形に拡幅する必要が生じたため、急遽トレンチを拡張して再度調査を実施することとなった。その結果、調査範囲は5.0m×3.9mのトレンチとなった。表土より10～18cm程度掘り下げると第２層にぶい黄褐色粘質土層、さらに下層に第５層にぶい黄褐色粘質土が広がり、この面で土坑３（SK-01～03）、ピット４（P-01～04）を検出した。SK-01は長軸116cm、短軸76cm、深さ31cm、SK-02は長軸114cm、短軸85cm、深さ87cm、SK-03は長軸113cm、短軸106cm、深さ124cmを測る。SK-03は形状から落とし穴と想定される。P-01は径44×33cm、深さ11cm、P-02は径31×29cm、深さ25cm、P-03は径43×34cm、深さ16cm、P-04はトレンチ西壁面で検出し長軸42cm、深さ38cmを測る。遺物はSK-01、02で縄文土器と見られる土器細片がそれぞれ１点出土している。

小　結

今回の調査地は霊石山頂上部の平坦面であったが、最勝寺山城に関連するような遺構・遺物を確認することはできなかった。しかし、落とし穴や細片ながら縄文土器が出土したことから、古くから人がこの場所を利用していたことを窺い知ることができた。調査地周辺にはすでに数基の鉄塔が建設されているが、今後更に増える可能性があることから今後も開発事業には十分な注意を払っていく必要がある。



第48図　最勝寺山城跡トレンチ位置図



第49図　最勝寺山城跡第１トレンチ実測図

第14節　津ノ井49号墳

津ノ井49号墳は因美線津ノ井駅の北東側約１ｋｍに所在し、国府平野を一望できる丘陵上に位置している。隣接していた津ノ井40号墳は昭和58年に発掘調査が行われ古墳時代後期頃に造営されたものと確認されている。また同じ墳丘上には中世墓も造られており、土師器皿や銅銭が出土している。この他にも同じ丘陵上には確認できるだけでも５基の古墳が確認でき、土地所有者の話によると、開墾時に石棺を発見し、埋め戻しを行ったとの証言もある。また丘陵の南側裾部には弥生時代終末期から古墳時代前期の土坑、古墳時代の住居跡や掘立柱建物を検出した津ノ井宇祢遺跡、南側丘陵上には六部山古墳群、北東には国史跡の因幡国庁跡や国分寺跡など奈良期の中心地が所在し、古くから因幡の中心地として栄えていた場所である。

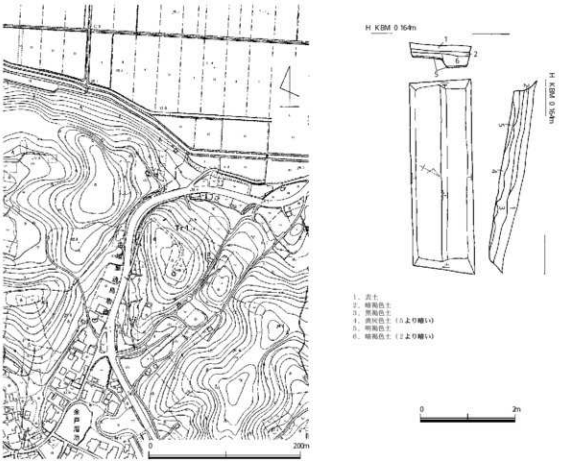
今回の調査は資材置場造成計画に伴って実施したものである。丘陵上部には古墳状のマウンド上にトレンチを１本設定した。

第１トレンチ（Tr-１）〔第50図、図版15〕

古墳状の高まりに1.3m×4.1mのトレンチを設定した。現況は笹が繁茂しており、表土下20cm程度まで根が侵入している。表土を掘り下げた後には第２層明褐色土、その下は第３層黒褐色土（クロボク）を確認し、その下には第５層明褐色土の地山を確認した。トレンチ南側では第３層を掘り込む落ち込みを確認した。また第３層上部から土師器小片１点が出土している。

小　結

第２層は僅かながらも古墳の盛土と想定され、トレンチ南側で確認した掘り込みは主体部の可能性があることから古墳と判断し、開発者と協議を重ねた結果、古墳は現地保存されることとなった。なお周辺には未確認の遺跡が所在すると考えられることから、今後の開発に当たっては注意が必要である。



第50図　津ノ井49号墳トレンチ位置図及び第１トレンチ実測図

第15節　海士所在遺跡

海士所在遺跡は福部町海士集落の北側の畑地に所在し、JR福部駅の北西約1.5kmの福部砂丘地内に位置する。砂丘地の南西側に所在する通称「縁山」と呼ばれる低丘陵上には縁山古墳群が所在し、その丘陵裾部には縄文土器や古墳時代の住居跡が出土した直浪遺跡が所在している。

今回の発掘調査は通称駟馳山バイパス建設計画に伴って実施したものである。砂丘地では遺跡がどの深度に所在するのかが明確ではないため、事前に４箇所のボーリング調査を実施し、遺跡の鍵層であるクロスナ層の深度を確認した上で試掘調査を実施することとした。調査に当たっては開発事業者の協力によって重機を使用し、クロスナ上層まで重機によって掘削を行った。

ボーリング調査

ボーリング調査の位置は当初５箇所を計画していたが、開発事業者が実施した箇所と重複していたため、４箇所（BP１～４）に変更し、掘削はクロスナ層を確認した次のメートル単位の深度で中止している。掘削孔径は原則φ66mmで実施し、鉛直下向きのオールコアボーリングとし、コア採取に当たってはコアパックチューブによる打ち込み採取を実施した。

BP１は開発区域内の北側にある丘陵裾部に近い部分に設定した。表土下約155cmまでは新砂丘の砂層があり、その下からクロスナと考えられる黒色の砂層が現れ始め、その後黒色の粘土層、明褐色粘土層の順に変化する。層厚はクロスナ層が13cm、黒色粘土層が67cm、明褐色粘土層は65cmまでを確認している。

BP２は東西方向から緩やかに下ってくる谷状地形の底に近い部分に設定した。表土下約485cmまでは新砂丘の砂層があり、その下からクロスナと考えられる黒色の砂層が現れはじめ、その後黒色粘土層、明褐色粘土層の順に変化する。層厚はクロスナ層が３cm、黒色粘土層が47cm、明褐色粘土層を65cmまで

を確認している。

BP３は西側からの緩やかな傾斜の最高点に達するやや手前に設定した。表土下約40cmまでは新砂丘の砂層があり、その下からクロスナと考えられる黒色の砂層が現れ始め、その後黒色の粘土層、明褐色から黄褐色の粘土層に変化する。層厚はクロスナ層が15cm、黒色粘土層が20cm、明褐色から黄褐色に変化する粘土層を125cmまで確認している。

BP４は西側から高まってきた丘陵の平坦部に設定した。表土下約435cmまでは新砂丘の砂層があり、その下からクロスナと考えられる黒褐色の砂層が現れ始め、その後淡褐灰色砂層に変化する。層厚はクロスナと考えられる層が40cm、淡褐灰色砂層は525cmまで確認している。

今回実施したボーリング調査の結果と既存のボーリング調査の結果から想定するとクロスナと考えられる層は一度西側から東側に向かって下り、再び緩やかに上り、現在の南北方向に走る市道付近をピークに再び下って消滅していくという変化が想定される。なおNo４で確認しているクロスナと考えられる層はその他のボーリング調査で確認しているものとは時期差があると考えられる。

ボーリング調査の結果を受けて、土器散布地に最も近いBP１とクロスナのピークと考えられるBP３にトレンチを設定した。

第１トレンチ（Tr-１）〔第51、52図、図版14〕

BP１付近に設定した4.3m×4.6mのトレンチである。表土から約1.6m掘り下げたところでクロスナ層に達した。クロスナ層は東側に向かい緩やかに下る傾斜をしている。遺構・遺物は確認することができなかった。

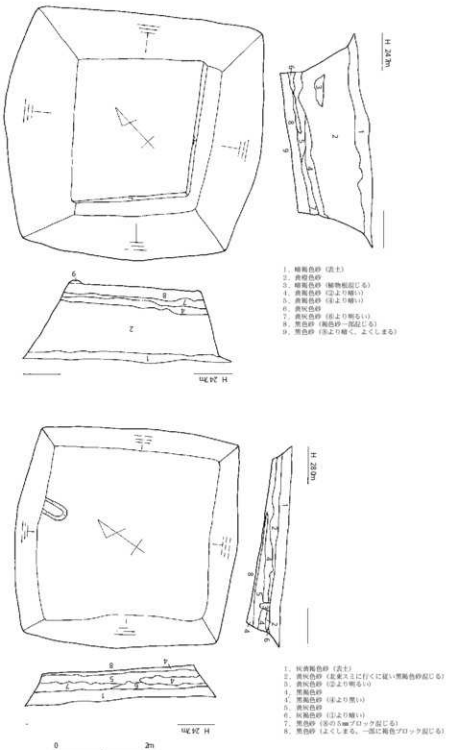
第２トレンチ（Tr-２）〔第51、52図、図版14〕

BP３付近に設定した4.1m×4.3mのトレンチである。表土から約0.5m掘り下げたところでクロスナ層に達した。クロスナ層は南西側に向かって緩やかに下る傾斜を持っている。遺構は第２層を掘り込むピットを確認しているが耕作によるものと考えられる。遺物は確認することができなかった。

第51図　海士所在遺跡トレンチ及びボーリング位置図

小　結

今回の調査地では遺構・遺物を確認することができなかったことから、海士所在遺跡が開発区域まで広がっていないと想定される。しかし砂丘地内は旧地形の復元が難しく、海士所在遺跡の範囲がどこまで広がっているのかは依然不明なままである。今後周辺の開発には注意を払い、遺跡の範囲を把握することが必要である。



第52図　海士所在遺跡第１・第２トレンチ実測図

第16節　鳥取城三ノ丸跡

久松山頂に築かれた中世城館にその起源を持つとされる鳥取城が、近世城郭として現在の山下に展開し始めるのは宮部期以降と考えられる。羽柴（豊臣）秀吉が天正８・９（1580・81）年二度にわたって行った因幡攻めの後、鳥取城には秀吉の武将宮部継潤が置かれるが、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いで西側に与し改易された。文献では、その後代わって入城した池田長吉は城域の改修を行い、近世鳥取城の基礎を作りあげたと伝わる。元和３（1617）年には姫路城主池田光政が因幡・伯耆国32万石の鳥取城主として転封した後、寛永９（1632）年には岡山藩主池田光仲と交代し、以降幕末まで光仲の子孫が藩主の地位を継いだ。度重なる改修を経て幕末期を迎えた鳥取城であるが、明治期に入ると廃城令の下陸軍省による解体が進み、明治12（1879）年には最後まで残っていた二ノ丸三階櫓を含む建物類の破却をもって完了したとされる。明治22（1889）年には尋常中学校がこの地に移転開学し、第一中学校を経て現在の鳥取西高等学校へと至る。山上を中心とした中世城郭群と山下の近世鳥取城という２つの性格を持つ遺構群が連続的・重層的に確認できることが高い評価を受け、昭和32（1957）年に「鳥取城跡附太閤ヶ平」として国指定史跡として指定を受けた。

三ノ丸周辺：江戸期の当該地は鳥取城三ノ丸部分にあたり、居屋敷地として長い間城の中心であった。３代藩主吉泰は享保元（1716）年から大改修を行い整備拡張とともに自らの居館も置いたが、享保５（1720）年の鳥取城全体を巻き込んだ石黒火事により灰燼に帰すこととなった。３年後に復旧した三ノ丸は旧二ノ丸部分の機能も集約し、城の中心となった。18世紀後半台と考えられる『鳥取城二ノ御丸古江図写』では調査地付近は奥向部分にあたり、東側には池が描かれているが万延元（1860）年の三ノ丸拡張により池部分も屋敷地となり明治時代を迎えたと考えられる。

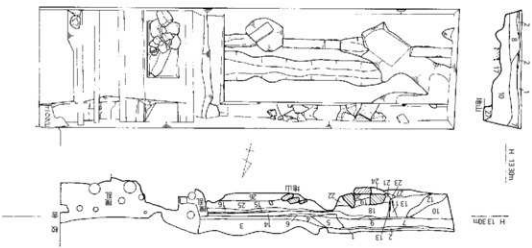
今回報告する平成20年度の試掘調査は県立鳥取西高等学校改築に先立ち遺構の遺存状況を確認するために実施したものである。対象地は高校の中庭部分であり２×６ｍのトレンチを２箇所に設定して調査を実施した。

第１トレンチ（Tr-１）〔第54図、図版15〕

噴水の東側に設定した1.9×6.8mのトレンチで、北壁沿いには幅40cmのサブトレンチを設定した。

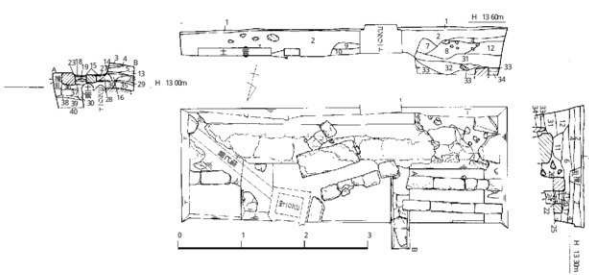
調査区付近の標高は13.5～13.6mを測る。調査区内東側は校舎建設および配管埋設時の掘り込みが地

第53図　鳥取城三ノ丸跡トレンチ位置図



1. 表土（茶色）
2. 黄橙色砂質土7.5YR 7/3
3. 明黄褐色砂質土10YR 7/6（植栽用土）
4. 砂利層（径2.0cm程度の砂石）
5. 褐色砂質土7.5YR 4/4
6. 砂利層（径2.0cm程度の玉石）
7. 褐色粘質土10YR 4/4（崩ブロック含む）
8. 暗褐色粘質土10YR 3/4（崩ブロック含む）
9. 砂層（径1.0cm程度の玉石少量含む）
10. 玉砂利層（径2.0～5.0cm）
11. 黒褐色粘質土10YR 2/2（柄の痕跡小）
12. 明黄褐色砂質土10YR 6/6
13. に示い黄褐色粘質土10YR 4/3
14. 褐灰色粘質土10YR 4/1（いぶし瓦片含む）
15. 褐色砂質土10YR 4/4（硬化面を形成する）
16. に示い黄褐色砂土10YR 5/4（赤茶に硬く締まる）
17. 明黄褐色砂質土10YR 6/6（上層を硬化面が一部残っている）
18. 褐色砂質土10YR 4/4（硬く締まる、地山ブロック少量含む）
19. 黒褐色粘土10YR 2/3（いぶし瓦片含む）
20. に示い黄褐色10YR 5/3（白黒褐域した様子、崩ブロック含む）
21. 明黄褐色砂質土10YR 6/8
22. 褐色砂質土10YR 4/4（地山礫含む）
23. 暗褐色粘質土10YR 3/3
24. に示い黄褐色粘質土10YR 4/3（地山ブロック含む）
25. 褐色砂質土10YR 4/4（硬く締まる、18層より地山ブロック多量に含む）
26. 暗褐色粘質土10YR 2/3（地山ブロックを含む）
27. 褐色砂質土10YR 4/4（硬く締まる、地山ブロック少量含む）

第54図　鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ実測図



1. 表土（茶色）
2. 灰色土（ガラス、石含む）
3. 浅黄灰色土
4. 黒灰色土（炭の痕）
5. 灰黄色砂礫土（円礫多い）
6. 黄灰色土（円礫含む）
7. 灰黄色土
8. 浅灰色砂（円礫多い）
9. 灰黄砂土
10. 黄灰色土
11. 灰色砂土（コンクリート混在物）
12. 灰褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
13. 暗黄灰色砂
14. 灰色粘質土（トレンチ内広く堆積、ガラス混入）
15. 灰色シルト
16. 黄灰色土（鉄管の掘り方）
17. 暗灰色土
18. 灰白色砂
19. 灰色粘質土
20. 暗灰色砂土
21. 灰色砂（やや細化）
22. 灰色砂（21層とは区別難）
23. 灰色粘質砂土
24. 灰色砂土（径5.0～5.0cmの円礫多い）
25. 灰色砂
26. 黄灰色土
27. 暗灰色砂土
28. 黄灰色土
29. 暗黄色粘質砂土
30. 灰黄色砂土（土管掘方）
31. 暗褐色粘質土
32. 暗灰色砂土（しまりなし、礫多し）
33. 灰黄色粘質砂土（粘土と砂がブロック状に混ざる）
34. 灰褐色粘質土
35. 暗灰色砂土
36. 灰黄色土
37. 黄灰色土（黄色砂礫ブロック）
38. 暗灰黄色土
39. 暗灰色土（反を多く含む）
40. 灰色粘土（上面に円礫が敷在する）

第55図　鳥取城三ノ丸跡第２トレンチ実測図

山深くまで達しており、遺構は遺存していなかった。

また、トレンチの壁面に並行するように地表下30～40cm、標高13.2m付近には一辺16cm四方の断面正方形の緑色凝灰岩の加工石材がある。近代の撹乱により動かされていたり、抜取られている部分もあるが、本来は列をなしていたと考えられる。さらに、これら石列に並行するように石列の抜取り跡と考えられる窪みが直線状に残る。第２トレンチにも同様の石列がみられ、断面観察の結果明治期以降の学校にともなう溝跡であり、戦前の図面に書かれている廊下に沿う溝と推定される。また、石列を挟み左右の土質がまったく異なっており、南東側は黄色砂礫が整地されたように敷かれていた。

サブトレンチからは　地表下40cm、標高13.1m付近から南北方向へ延びる石組みの溝状遺構を検出した。溝は地山を掘り込んで据えられており、側壁には花崗岩、底面には凝灰岩を配し、幅25cm、深さ20cmを測る。地山は溝の東側、トレンチ中央付近でふたたび掘り込まれており、25・26層は江戸期であると考えられる。溝を覆う10～13・18層については近代の掘削に伴うものと考えられるため、幕末期の面は遺存しないが25層の上面、標高13.2m付近にあったと推定される。

第２トレンチ（Tr-２）〔第55図、図版15〕

噴水の西側に設定した1.8×5.1mのトレンチで、数箇所にサブトレンチを設けた。地表の標高は13.4～13.5mであり、トレンチ中央部を中心に地表下40～50cmは近代の学校整備に伴い大きく撹乱されており、トレンチ南半分の標高13.1mにはコンクリートが広く敷かれている。また、西側には第１トレンチ同様標高13.2mには一辺21cmと16cmを測る断面正方形の近代のものと考えられる緑色凝灰岩製の石材が並列しており、東側にも続きと見られる石列がある。中央付近に見られる石材も撹乱により位置を動いているものの本来は一連をなしていたと考えられる。石列間の層位から溝であったと推定され、下部に土管が埋設されていることからも近代以降の敷設と考えられる。

西側のコンクリート下には大型石が数石みられ、石の下部、第34層には灰色の粘質土層がみられる。40層でも同様に標高12.8m付近で粘質土が確認された。周囲で粘質土の検出は珍しく、万延元（1860）年の三ノ丸拡張以前の絵図にみられる池（絵図中では「御堀」）の痕跡である可能性が考えられる。溝やコンクリートによる撹乱は粘質土の直上（標高12.8m付近）まで及んでいるため、江戸期と推定される層は33・34・40層を残すのみであり、幕末期の面は遺存していないと考えられる。

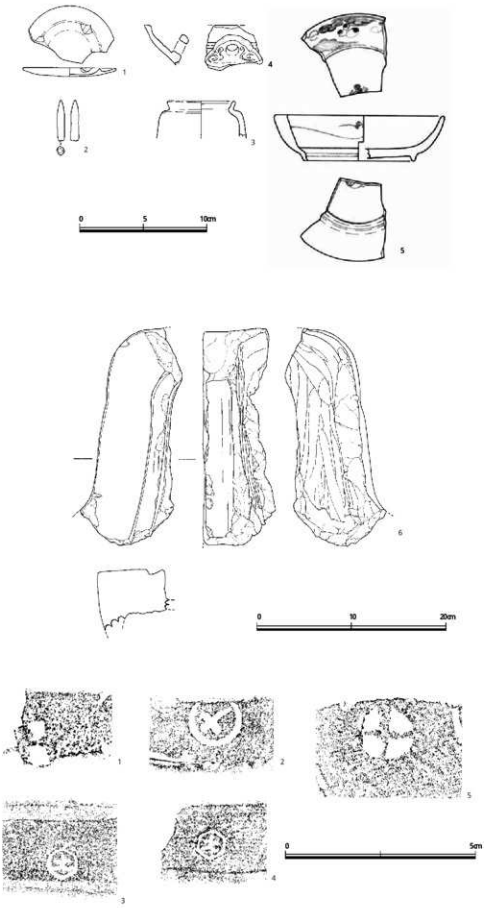
遺物〔第56図、図版17〕

瓦片を中心に磁器等の出土があったが図化できたものは次のとおりである。１～３はTr１、４～６はTr２からの出土である。１は表土出土の陶器の灯明皿、２は４層出土の銃弾で全長3.3cmを測る。３は７層出土の陶器、４は26層出土の陶器の土瓶である。５は35層出土の肥前磁器の皿で、内面は見込五弁花、外面は渦福文の一部であろうか。６は表土出土の鬼瓦の側縁部で、縁の幅は５cm前後である。拓影の１～４はTr１、５はTr２出土である。拓影の１・２は表土出土の四菱と丸に十。３は７層、４は16層出土の亀甲に大の字を入れるもので、亀甲の大きさは同じものの、大の字に若干の違いがある。５は表土出土の丸に十文字である。

小　結

万延元（1860）年の三ノ丸拡張は鳥取城最後の大規模改修工事であり、三ノ丸東側を現在の石垣の位置まで広げ、西側の大手登城路も変更するものであった。享保５（1720）年の石黒火事後、弘化３（1846）年に再建された二ノ丸御殿群は、短期間のみの使用後その機能を再び三ノ丸に移していることもあり、拡張による敷地の確保が必要とされた可能性が考えられる。

先述のとおり絵図との比較によると第１トレンチは万延元（1860）年の三ノ丸拡張部分との境界付近に位置していると推定され、検出した溝状遺構は拡張以前に機能していた可能性がある。部分的な調査のため全体の把握とはいかないものの第２トレンチで検出した池状の痕跡も合わせ最終形態へと至る鳥取城の状況の一端を知ることができたと考えられる。



第56図　鳥取城三ノ丸跡第１・第２トレンチ出土遺物実測図

第３章　史跡鳥取城跡中世城館等分布調査

１．遺跡の位置と環境

史跡鳥取城跡が位置する標高263m の久松山は、中国山地に水源をもつ千代川及びその支流によって形成された沖積平野である鳥取平野の東北側に位置する。久松山頂からは、鳥取平野の大半及び日本海・砂丘まで、周辺地域を見渡すことができる。また、反対に、周辺地域のほとんどの場所から、この山の姿を見ることができる。久松山から、日本海に面した賀露港までは、約５kmの距離である。因幡山名氏が本拠とした布施（布勢）天神山城跡も、約５kmの距離にある。

久松山の南西側は、かつては袋川が蛇行して流れ、低湿地を形成していたと考えられている。近世前期に袋川流路の変更などによってこの低湿地が開発され、現在の鳥取市街地の原型となる城下町が形成された。久松山の北西には雁金山へと尾根が続き、谷を挟んで丸山が並ぶ。東には羽柴秀吉が鳥取城攻めの際に本陣を置いた本陣山（太閤ヶ平）が続く。北東（背後）は、円護寺谷に向けて急角度の斜面となって落ち込んでいる。久松山の山体は残丘状で、山頂、水道谷川（東坂道）沿いや「山上ノ丸跡」の東方に緩傾斜地もあるが、南・西・北側の山腹斜面は平均斜度約31～42度の急傾斜地となっている。これらの急斜面、特に南面では土壌の浅いところが多く、また、基岩を露出して崩壊しつつあるところもある。正面（南斜面）路上部、標高235m付近や、東坂の「水道谷池」池の西方・標高120m地点付近などには、「井戸」や湧水池等がみられる。

「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平」は、位置する近世城郭「鳥取城」と、久松山に現存する中世城郭遺構群、及び谷をはさんで東に位置する本陣山山頂の「太閤ヶ平」で構成されている。「太閤ヶ平」は、羽柴（豊臣）秀吉が鳥取城攻略戦（史上有名な「鳥取の渇え殺し」）の際に本陣を置いた場所である。太閤ヶ平を中心に、羽柴軍の築造した大小の陣城遺構群が残されていることは、既に吉田淺雄氏などによって指摘されているが、その多くは史跡指定範囲外に所在しており、悉皆調査もなされていないことから、詳細は未詳である。久松山の中世城郭遺構は、山頂に至る主要な尾根を中心に構築されており、東坂道周辺、中坂道周辺、西坂道周辺及び雁金山・丸山へ尾根伝いに結ぶ久松山北面の尾根周辺等に集中してみられる。西坂道周辺部のものは、初期の鳥取城として活用され、古絵図にも記されている「松ノ丸」「太鼓ヶ平」「鐘ヶ平」などに符合する遺構とみられる。また東坂道中途の「水道谷池」付近にも大規模でまとまりのある遺構群がある。これには井戸跡、土塁を伴う郭などがみられるが、これに関する文献資料はなく、遺構の性格は未詳である。近世城郭としての鳥取城は、大きく分けて中世に原形の築かれた「山上ノ丸」と、山麓の「山下ノ丸」から構成されている。「山上ノ丸」は本丸・二ノ丸・三ノ丸で構成され、本丸には天守櫓が建てられたが、元禄５年に落雷で焼失して以降再建されなかった。「山下ノ丸」は天球丸、二ノ丸、三ノ丸、城代屋敷跡等と、その他諸郭から構成され、堀によって城下と区分されている。池田光政時代には、袋川の付け替えが行われて久松山下の湿地帯が開発され、大規模な城下町が造営された。

２．調査の契機と目的

鳥取市は、昭和32年の指定以来、国史跡である鳥取城跡附太閤ヶ平の保存と活用にとりくんできており、現在は、平成17年度に『史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存整備基本計画』（『基本計画』）、平成18年度に『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備実施計画』（『実施計画』）を策定し、鳥取城跡の保存整備と調査研究を長期計画に基づいて推進している（なお、これらの計画は市民と専門家からなる検討委員会の検討と、パブリックコメントの実施を経て策定したものである）。

これらの計画において、従来総合的な調査の為されてこなかった中世城郭群も調査研究の対象とすることとし、『実施計画』において、「史跡の性格を明確にする調査」と位置づけて、「久松山系歴史環境調査」として、平成30年度までの調査方針を下記のように定めた。

(a) 調査の目的

史跡指定範囲を中心とする久松山系の中世城館等の遺跡の分布状況を把握し、近世以前の歴史環境とその変遷の概要を、史跡との関連性の視点から把握するとともに、将来的な調査等の基礎資料とする。調査の成果を踏まえて、史跡の拡大指定等も視野に保存管理の方策を検討する。

(b) 調査の範囲と対象

史跡指定範囲を起点とし、久松山系に分布する中世城館等の遺跡を対象とする。調査範囲は当面「遺跡分布地図鳥取市２」の範囲に福部町を一部加えたものとする。歴史史料についても、原史料の所在調査等を実施し、把握を進める。軍事拠点としての鳥取城の機能が発揮された天正期を中心とする時期については、攻め手である羽柴秀吉方の陣もあわせ、対陣の状況や地域との関係を含め、調査研究の対象とする。

(c) 調査の方法

史跡指定範囲を起点に、久松山系の中世城館等の遺跡の位置を確認し、１／2500地形図上に分布を示す。位置については、GPS等を用い、座標として把握する。各遺跡に対して番号付を実施するとともに、その概要を記した台帳に記載する。台帳作成に当たっては、遺跡分布地図を参照し、整合をはかりつつ調査を進める。調査成果については相互に反映するよう努力する。

史跡の価値と深く関連する中世城館については、遺跡ごとにカードを作成し、所見とともに現状を記録して、今後の調査・保存等に活用する。特に重要度の高いものについては、１／100程度の実測図を作成し、現状把握に務めるとともに、保存方針を検討する。

調査にあたっては、学識経験者による調査委員会の指導を受ける。鳥取市以外に所在する古文書や絵図資料についても、遺構との照応を念頭に置いた把握をすすめる。

以上のような方針に従って、平成19年度の調査範囲は久松山のほぼ全山と、存在が確認されている丸山等の周辺地域で、表面観察による分布調査と城郭の縄張り図作成を行い、曲輪・堀切・土塁・竪堀・石垣などの城郭遺構を確認した。

調査方法は、巻尺・クリノメーターなどで規模を計測してその形状を作図した。表面観察・踏査は西尾孝昌氏と鳥取市教育委員会文化財課（佐々木孝文、坂田邦彦）が行い、縄張り図の作成は西尾氏が行った。また西尾氏が作成した縄張り図を参考に寺屋敷周辺については地形測量業務を委託し、図化を実施した。以下、本年度調査について、調査の地点ごとに区分して概要を記す。

3．調査の概要

1）「山上ノ丸」南側斜面（「中坂」）（第59図）

尾根部に造られた段状遺構は、幅が狭く横に長い形状の削平地である。規模は、大きい平地で9.3×59.0m、小さいもので4.0×13mである。

平地には随所に岩盤が分布し、石を切り出したような痕跡が認められる。特に、岩盤の数カ所には矢穴痕があり、また平地の転石にも多くの矢穴痕がある（図版15）。このような段状遺構は中坂周辺に40カ所程度分布し、それぞれに連絡道があるようである。また段状遺構付近の谷部には、竪堀状の跡も認められ、切り出した石材の運搬等に使用されたものかと思われる。

時期は明らかではないが、このような、通常の城郭遺構と異なる遺構のあり方から考えて、これらの段状遺構は城郭曲輪ではなく、石取場の遺構であると考えられる。

2）「山上ノ丸」西側（北西～南西斜面・仮称「西坂」）

西側斜面の主尾根筋（「西坂」）には、「鐘ケ平」・「松ノ丸」等、規模の大きな曲輪が集中している。

「鐘ケ平」は東西約28.8m・南北約24.2mを測り、曲輪の北側と南側に裏込石の無い石積みが見られる。曲輪の南側には幅約８ｍを測る大規模な竪堀が構築されており、竪堀は「太鼓ケ平」東側

の谷を経て山裾まで続く。

「鐘ケ平」の南尾根には、「太鼓ケ平」（20×6.3m、13.3×10m）など、12段程度の小曲輪群がある。「太鼓ケ平」の西側斜面には竪堀（幅４m・長さ15m）が構築されている。また「鐘ケ平」から南西に延びる尾根には、急斜面に7段程度の小曲輪群（８×４mなど）が構築されている。これらの小曲輪群は、形態からみて、戦国期の遺構ではなく、山名豊国の鳥取城入部より以前、南北朝～室町初期の遺構と思われる。

「鐘ケ平」から「松ノ丸」へ至る途中には、中規模で切岸のしっかりとした4段の曲輪群（17×８m、17.7×16m、13.6×６m、19.7×7.5m）がある。

「松ノ丸」は4段程の曲輪群で構成されており、その中心は東西約35m・南北約39mの曲輪と、その西に連続する、石垣を持つ細長い曲輪（24.5×９m）である。

石垣をもつ曲輪の北側と西側は、高さ2～2.5m程度の長い石垣が積まれ、北西部には隅角部も遺存している。南側の縁には石垣破壊の痕跡があり、１石程度の高さの石列が遺存している。この曲輪は、隅角部が遺存していない南西隅からストレートに入る「虎口曲輪」を構成しており、当初は総石垣であったものと考えられる。隅角部をはじめ、かなりの範囲が破壊されている。石垣の高さは２m程度、算木積は未発達で、勾配もかなり寝ている。

主尾根山裾（県立博物館北側）の曲輪群は５段で構成されている。切岸が高く、規模の大きな曲輪（28.3×13m、23×11m、22.5×17.2m、55×7m、16×11.5m）群である。

「西ノ丸」北西尾根には、２カ所に小曲輪群が構築されている。

上段の曲輪群は２段で構成されており、曲輪群前面に堀切（幅７m、深さ８m）・竪堀（幅3.5m、長さ11～12m）を構築している。現時点では鳥取城の城域で確認できた、唯一の「堀切・竪堀」遺構である。

下段の曲輪群は９段程度で構成されている。中心曲輪（10×23.4m）を帯曲輪群で取巻くような構成で、堀切・土塁・竪堀などは確認できない。

3）「山上ノ丸」北側斜面

北側斜面には、西尾根と東尾根の２つの尾根がある。

西尾根には６段の小曲輪群が点在する。鞍部の堀切（幅7.2m、深さ2.5m）近くの２つの曲輪（12.3×9.2m、17×12m）は、古墳を再利用したものである。西尾根の主要な曲輪は、それぞれ42.6×8m、23.4×8.2mの規模をもつ、２段の段状遺構である。それぞれの曲輪の転石に矢穴痕が認められる。

本丸直下の東尾根には、切岸のしっかりとした、４段の中規模な曲輪（27.5×11.5m、14.2×11.5m、25×12m、12×6.5m）と、谷部に井戸（水の手）がある。その下の急斜面の下方には、中心曲輪（11×19m）を３段程度の帯曲輪が取り囲むような遺構が存在するが、切岸が甘いなど、古い時代の遺構の特徴をもつ。

北側斜面は、急峻であるためか、曲輪の造成は顕著ではない。

4）「山上ノ丸」（本丸・二ノ丸・三ノ丸）周辺部（第58図）

＜本丸＞

①　全体の構成

山上ノ丸の本丸は、東西約78m・南北約35mの総石垣で普請されている。

本丸はほぼ方形の形をしていて、石垣の塁線は直線的である。「横矢掛かり」は北側に２カ所、南側に３カ所見られるものの、幅0.5m程度と小規模である。本丸石垣の高さは西側（天守台側）は高石垣であるが、現状において、北側（裏側）は約６m、南側（表側）は約３mとかなり低い。本丸南側斜面には、「横矢掛かり」と、それと対になる石段が残っているが、この石段は石垣で

塞がれていて、曲輪の中に通じていないような状況を呈す。これは、古い虎口を石垣で塞いだものと考えられる。

現状の本丸には、２カ所の虎口が開いている。東側、大手と考えられる虎口は、13段の階段状の平虎口（幅5.6m）で、中程に踊り場（城門＝渡り櫓）をもつ。その左右は櫓台と考えられるが、石垣の隅角部を中心にかなり破損している。南側、搦手と考えられる虎口（幅3.7m）は、石段の坂虎口である。現在の城下町側を正面とした場合、ここに搦手を設けるのは不自然で、当初は天守台北側か、天守台西側の石垣増築箇所に設けられていた可能性もある。

② 天守台

天守台（23.5×20m以上？、本丸からの高さ3.8m）は北・西側の石垣が破損しており、正確な規模は不明である。

天守台の南側と西側の石垣面には隅角部が埋め込まれており、現存する石垣が改修を受けたものである。西側の高石垣は、２つの櫓台状の高石垣の間に石材を無造作に積み上げたような、粗略な石垣となっているが、改修の時期・意図、改修前の形態などは未詳である。これらの石垣には、規模の異なる数種類の矢穴をもつ石材が見られ、普請の時期差を示すものと考えられる。

天守台の東側にみられる基壇状の石組（14.2×6.8m）は、詳細は不明だが、規模・位置などから、付櫓遺構の可能性が考えられる。

＜本丸西曲輪・南下曲輪＞

南下曲輪（仮称「南出丸」）の石垣は、全体が岩盤の上に構築されている。

本丸西曲輪（仮称「西ノ丸」）の天守台側の曲輪裾部の壁状の石垣は比較的古い時代の特徴を備えている。「西坂」側の高石垣は、それより新しい。

＜二ノ丸・三ノ丸＞

二ノ丸（東西約20.6m・南北約35.5m）は、塁線が直線的な総石垣の郭であったと思われる。東側と南西側の石垣は破損しており、三ノ丸へ下りる搦手虎口が、現在と同位置であるか否か、明らかではない。

三ノ丸（約20×30m）は、遺構の現状からみて、方形の総石垣の郭だったものと思われる。石垣はほとんど破損しており、虎口も明らかではない。

＜「山上ノ丸」の北斜面の段状遺構＞

本丸北斜面西側の尾根には、４カ所の段状遺構が認められる。これらの遺構では岩盤が露出しており、うち２カ所では、岩盤から切り離した石材に矢穴痕が確認できた。本丸南側斜面（中坂）にみられるものと同様の特徴を備えており、曲輪ではなく石取場の遺構と考えられる。

＜三ノ丸東下と「十神砦」の虎口＞

三ノ丸の東下の曲輪（仮称「東坂の上」）に普請された虎口（仮称「城門Ａ」）は、短い石塁と「登り石垣」の間を一折れで入る階段をもつ、坂虎口である。石塁の規模は3.2×7.1mで、２段からなる「登り石垣」は、下段が3.4×5.6m、上段が3.5×12.1mである。

「十神砦」に普請された虎口（仮称「城門Ｂ」）は、２段からなる「登り石垣」と、長い石塁からなる、外枡形虎口（幅4.7m）である。「登り石垣」の規模は、下段4.7×10.8m、上段5.0×10.0mで、高さは2.8～８mである。石塁は折れを持ち、高さ1.5m、4.7×25.8mである。

城門Ａ・Ｂは平入り虎口と外枡形虎口という違いはあるものの、「登り石垣」と石塁で構成され

ており、同じ様式の虎口と考えられる。また、石垣はかなり崩れている。「城門B」の虎口石垣には、矢穴痕の残る石材が認められる。

5）大規模な竪堀遺構

今回の調査では、山腹から山麓まで掘削された大規模な竪堀（「大竪堀」）を、①「天球丸」東側2条、②登城路（「中坂」）近くに1条、③「鐘ケ平」南斜面に1条、合計4条確認した。

「天球丸」東側の2条の大竪堀は、それぞれ幅約13m、長さ70～130mの規模をもつ。

「鐘ケ平」南斜面の大竪堀は幅8～10mで、「太鼓ケ平」の東横を通り「天球丸」西端の谷部に続くと思われる。

「中坂」の大竪堀は、「本丸」直下から「天球丸」まで続いているようである。

何れの大竪堀も、鳥取城の「山下の丸」を直接防御するためのもので、「山上ノ丸」と「山下の丸」を一体化させるための防御施設と考えられる。

6）「寺屋敷」周辺部（第60図）

＜「寺屋敷」の遺構＞

通称「寺屋敷」は、北・西・東の三方の尾根に囲まれた谷部に存在する。最上部の平地は細長く、東西約80.0m・南北約26.8mである。そこから直線的に、通路と思われる幅広い溝が谷方向に延びている。その溝の左右には、かなり広い平地（規模の大きいもので、35.5×22.5m）が10箇所ほど造られている。

このような「寺屋敷」の平地配置は城郭の曲輪配置とは異なるものであり、むしろ最上部の平地に本堂を設け、そこから直線的に延びる参道の左右に階段状に坊舎を配置する、中世寺院のプランに類似している。戦国期に近畿地方で一般的にみられるような、坊舎を囲い込む土塁は伴わない。

以上のようなことから、「寺屋敷」は当初、城郭ではなく中世寺院として造られた可能性が高いと考えられる。ただし、現状では、最上部平地に本堂跡特有の基壇はなく、参道にあたる通路は「一折れ」の虎口状を呈している。

なお、今回の調査に際して、「寺屋敷」最上部の平地で、池田家の家紋を入れた揚羽蝶の軒丸瓦片を表面採集している。江戸期にも、「寺屋敷」の場所が何らかの形で利用されていたことを示すものと考えられる。

＜陣城（付城）遺構＞

「寺屋敷」の東側に連続して、当初は「寺屋敷」の一部であったと思われる平地を、大規模な竪堀と横堀によって囲繞した城郭遺構がある。中心となる曲輪の規模は、東西約40m・南北約32mである。曲輪の内部は数区画に分けられているが、あまり段差はない。この曲輪の北側に、大規模な折れをもつ横堀が掘削されている（図版15）。規模は、幅8～10m・深さ5～6mであり、横堀北側の土塁は、幅11m・高さ1.5m・長さ20mである。

曲輪の南側には2条の竪堀が掘削されている。それぞれ幅約14～15m、深さ6～8m、長さ35～44.5mの、大規模なものである。

これらの遺構は、「寺屋敷」の一角を横堀・竪堀・土塁などで改修したものである。遺構のあり方から判断すると、「水道谷池」の築造後に構築されたものと考えられる。「寺屋敷」西側の竪堀はこの陣城に伴うもので、横堀と竪堀で囲繞した曲輪だけでなく、「寺屋敷」全体を陣城として利用するために構築したものと考えられる。

7）「北側堀切」以西の城跡群

「北側堀切」以西の尾根にも城郭遺構が存在するが、平成19年度は、「丸山城」、「（伝）羽柴秀次の陣跡（仮称）」・「雁金山城」・「道祖神の上城」の4城の調査を実施した。

＜道祖神の上城跡＞（鳥取市東町）（第61図）

標高147mに築かれた主郭（7.7×10.8m）の東側に３段、西側に7段の小規模な曲輪を連郭式に配置し、その直線的な曲輪群を幅の狭い（３～４m）帯曲輪で取り囲むように構築している。土塁は高さ0.5～１m程度のもので、いずれも東側の鳥取城方面を向いている。堀切や竪堀は確認できない。この城は丸山城から鳥取城へ至る尾根筋にあたり、丸山から物資を補給するための「繋ぎの城」に適した位置にある。当初、在地系・毛利系の城郭として構築され、後に織豊勢力によって、土塁を中心に改修されたものとも考えられる。

南側のピーク（標高139m）には古墳群があるが、こちらも城郭としてとして利用された可能性がある。

＜雁金山城跡＞（鳥取市湯所町）（第62図）

「平和塔」から北西方向に約170mほど進んだ、標高140mの山頂に所在する。当初、主郭（10.5×14.3m）から４方向に延びる尾根に小曲輪を配した城であったものを、主郭を中心として、高い切岸（５～10m）と帯曲輪で改修したものと考えられる。

在地系の城郭が、織豊勢力によって改修されたものとも考えられる。

＜丸山城跡＞（鳥取市丸山町）（第63図）

丸山城は、天正９年の戦いに際して塩冶周防守や奈佐日本助が在城し、鳥取城への補給基地として利用した、毛利方の城郭である。山頂部（標高85.3m）は平坦でかなり広い。主郭は東西約61m・南北約15mと細長く、現状で判断すると、以前は帯曲輪が巻いていたようである。主郭の南端に、幅5.7m・長さ20m・高さ１mを測る鉤状の大規模な土塁がある。主郭周辺には昭和40年代に弘法寺（現在は廃寺）という寺院が建立されたため、遺構の改変が著しく、土塁等の様態はよく分からない。東端には、幅約２m・高さ0.5mを測る土塁囲みの小曲輪（8.5×７m）がある。

主郭北尾根には、削り残し土塁を持つ14×12.3mの曲輪や竪堀が構築されている。また主郭部から少し下がった南西尾根には、５段程度のやや粗略な削平の曲輪が配置されている。

主郭周辺に大規模な土塁や帯曲輪を設けている点など、織豊勢力による改修の可能性がある。

＜(伝）羽柴秀次の陣跡＞（鳥取市覚寺）（第64図）

山頂に設けられた、方形の主郭の規模は、東西約24m・南北約22mで、幅4.5～5m・高さ0.9～1.2mの土塁で囲繞されている。東側と西側に虎口（幅2.5～4.3m）を設け、そこから土塁囲みの東郭（18.5×19m）と西郭（17.5×12.6m）を構築している。東西の副郭は、帯曲輪で連結されている。

東郭の土塁は幅３～4.6m・高さ１m、西郭の土塁は幅2.5～5.2m・高さ0.5～1.5mである。

東郭から東に延びる尾根筋には、小曲輪群と粗略な削平による平地が構築されている。詳細な性格は不明だが、これらも陣城の一部と考えられる。

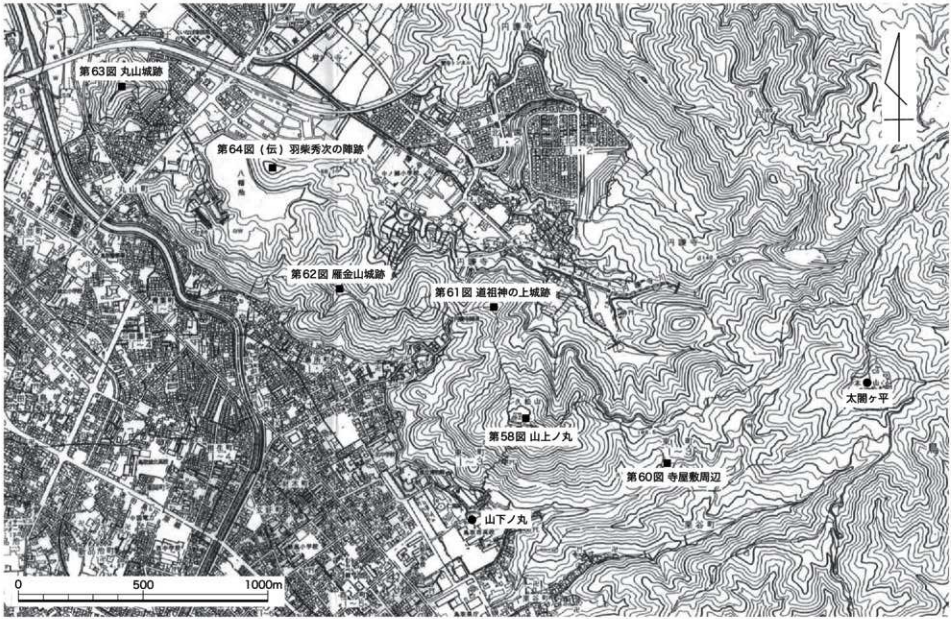
方形で土塁囲みの曲輪を連結し、虎口を設けた縄張りは、在地系のものではなく、織豊勢力の陣城の縄張りの特徴を示している。

３．ま と め

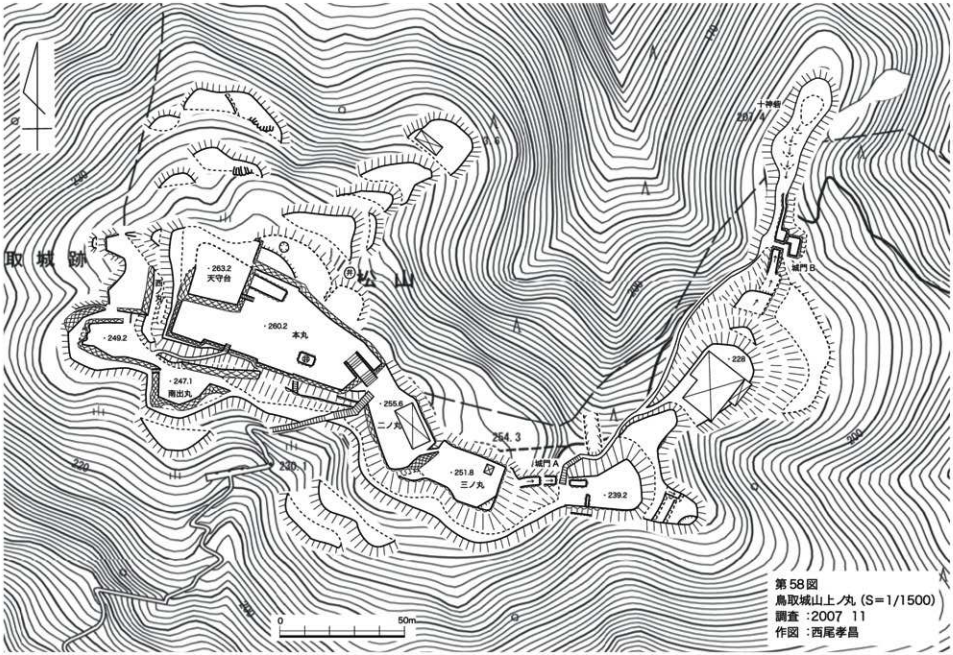
今回の調査によって、中世の鳥取城は、高い切岸をもつ広い曲輪を中心にして城砦群を形成し、その城砦群間の連絡を密にして防御する縄張りで、「山上ノ丸」城の曲輪群には、防御的な求心性が乏しいという特徴が判明した。戦国期城郭に特有の堀切・竪堀・土塁・畝状竪堀などはほとんど構築されておらず、岩盤が露出したような、険しい切岸が防御施設となっている。

また、「(伝) 羽柴秀長の陣」等、在地系の城郭の縄張りと異なる、「太閤ケ平」や三木城攻め・賤ケ岳の戦の陣城群などに類似する陣城の存在が確認できた。今後の調査においては、「太閤ケ平」の陣城群だけでなく、鳥取城周辺の悉皆調査に際し、織豊系陣城の存在を視野に入れる必要がある。

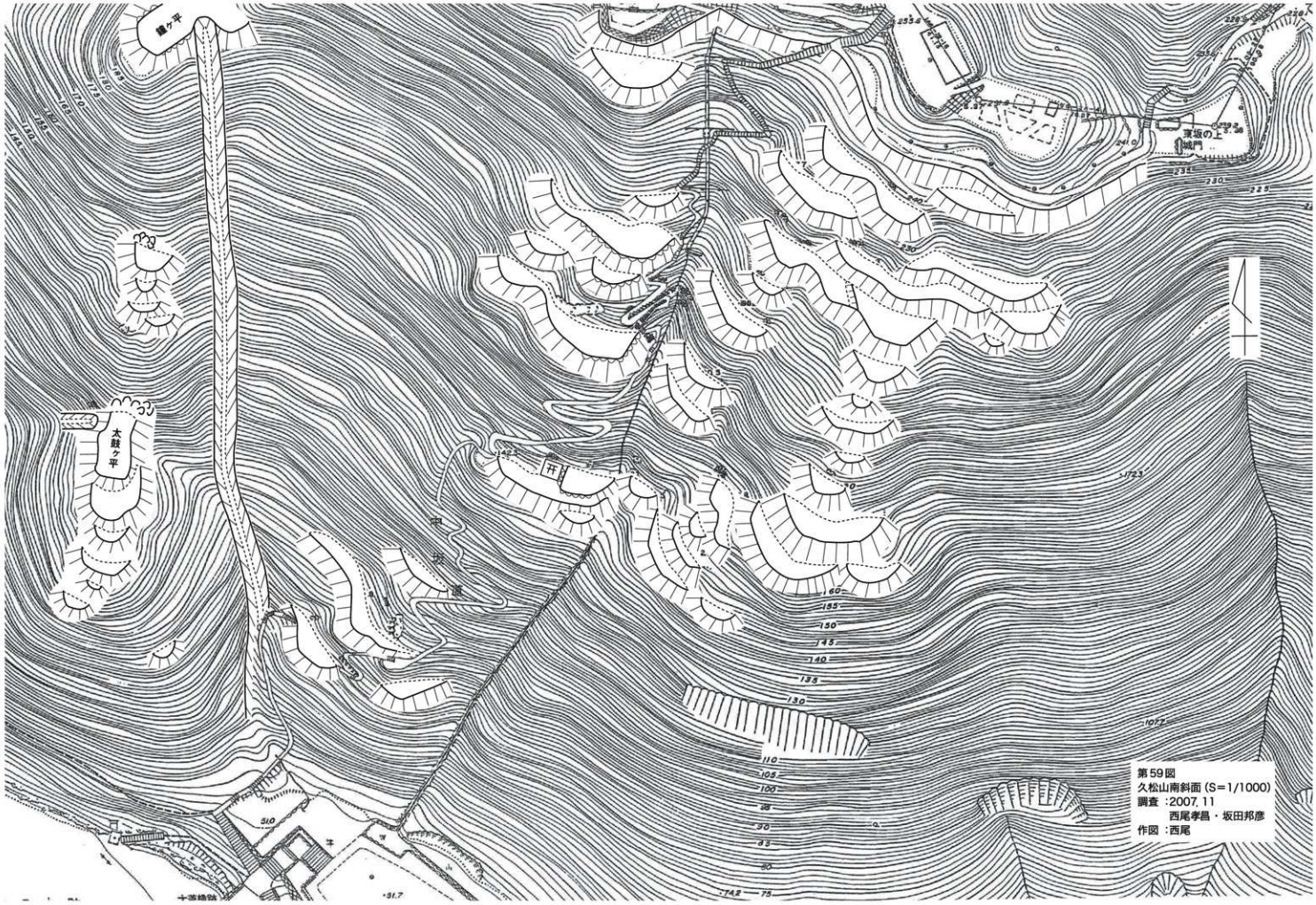
今回の調査でも明らかになったように、久松山には城郭遺構だけでなく、寺院・古墳など、多様な遺構が分布している。城郭だけに限定しても、「村の城」・「守護の城」・「織豊勢力の陣城」・「高石垣をもつ近世大名の城」など、各種の城郭遺構が良好に遺存している。今後の調査によって、国史跡鳥取城跡の歴史的・文化的価値をより高めて行くことが肝要である。



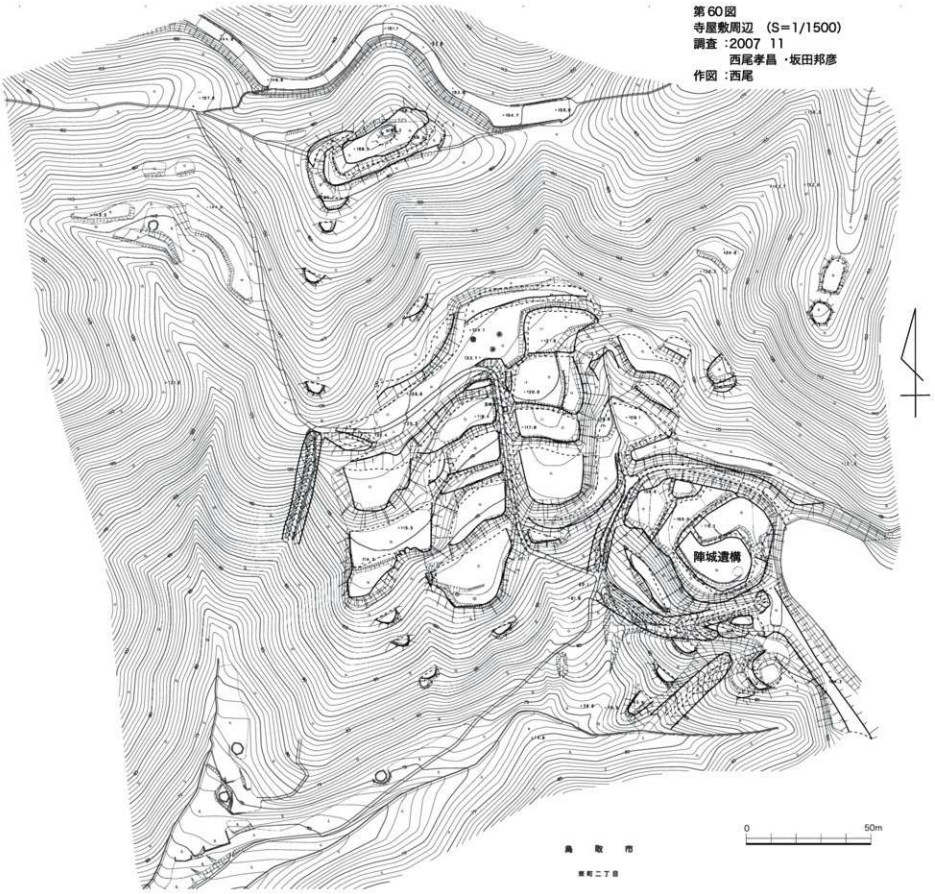
第57図　調査位置図（S=1/15000）



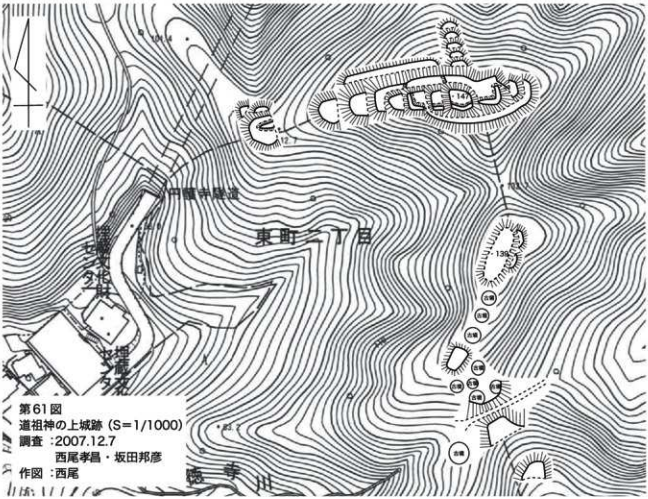
第58図
鳥取城山上ノ丸 (S=1/1500)
調査 :2007 11
作図 :西尾孝昌

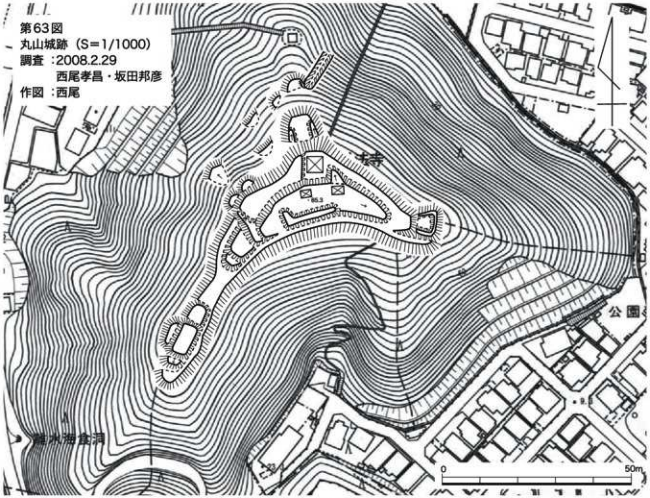


第59図
久松山南斜面（S＝1/1000）
調査：2007. 11
西尾孝昌・坂田邦彦
作図：西尾

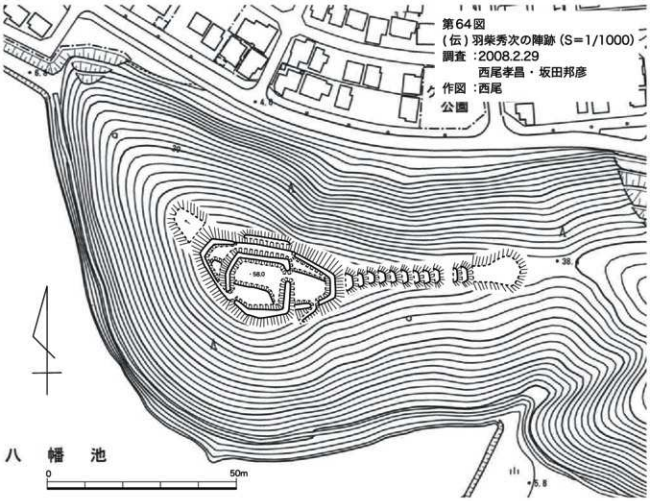


第60図
寺屋敷周辺 (S=1/1500)
調査 :2007 11
西尾孝昌・坂田邦彦
作図 :西尾


東町二丁目
中瀬寺敷道
瀬戸内海
海洋文化
資料館
海洋文化
資料館
135
台地
台地
台地



第63図
丸山城跡（S=1/1000）
調査：2008.2.29
西尾孝昌・坂田邦彦
作図：西尾



第64図
（伝）羽柴秀次の陣跡（S=1/1000）
調査：2008.2.29
西尾孝昌・坂田邦彦
作図：西尾

写 真 図 版

大坪大縄手遺跡調査地遠景（北から）

大坪大縄手遺跡第39トレンチ掘下げ状況（南から）

大坪大縄手遺跡第40トレンチ掘下げ状況（北から）

大坪大縄手遺跡第41トレンチ掘下げ状況（西から）

大坪大縄手遺跡第41トレンチ南壁断面（北西から）

大坪大縄手遺跡第42トレンチ掘下げ状況（東から）

大坪大縄手遺跡第42トレンチ西壁断面（東から）

大坪大縄手遺跡第43トレンチ掘下げ状況（南から）

図版 2

大坪大縄手遺跡第43トレンチ西壁断面（南東から）

大坪大縄手遺跡第44トレンチ掘下げ状況（東から）

大坪大縄手遺跡第44トレンチ南壁断面（北東から）

大坪大縄手遺跡第45トレンチ掘下げ状況（南から）

大坪大縄手遺跡第45トレンチ西壁断面（南東から）

大坪大縄手遺跡第46トレンチ掘下げ状況（東から）

大坪大縄手遺跡第46トレンチ南壁断面（北西から）

大坪大縄手遺跡第46トレンチ遺物出土状況（南から）

大坪大縄手遺跡第47トレンチ掘下げ状況（北から）

大坪大縄手遺跡第47トレンチ北壁断面（南から）

大坪大縄手遺跡第47トレンチSK1・2検出状況（南西から）

大坪大縄手遺跡第47トレンチ遺物出土状況（南西から）

殿所在遺跡第１トレンチ掘下げ状況（北西から）

勝見谷奥所在遺跡第１トレンチ掘下げ状況（南から）

松原古墳群・松原所在遺跡調査地遠景（北西から）

松原古墳群第１トレンチ掘下げ状況（南東から）

図版 4

松原古墳群第 2 トレンチ掘下げ状況（北から）

松原古墳群第 2 トレンチ周溝部断面（南東から）

松原古墳群第 3 トレンチ掘下げ状況（北西から）

松原古墳群第 3 トレンチ南西壁断面（南東から）

松原古墳群第 4 トレンチ掘下げ状況（北西から）

松原古墳群第 5 トレンチ掘下げ状況（北西から）

松原古墳群第 6 トレンチ掘下げ状況（西から）

松原古墳群第 7 トレンチ掘下げ状況（西から）

松原古墳群第８トレンチ掘下げ状況（西から）

松原古墳群第９トレンチ掘下げ状況（北西から）

松原古墳群第10トレンチ掘下げ状況（北から）

松原古墳群第10トレンチ西壁断面（北東から）

松原古墳群第11トレンチ掘下げ状況（北東から）

松原古墳群第12トレンチ掘下げ状況（西から）

松原所在遺跡第13トレンチ掘下げ状況（南東から）

松原所在遺跡第14トレンチ掘下げ状況（南東から）

図版 6

松原所在遺跡第15トレンチ掘下げ状況（南東から）

松原所在遺跡第16トレンチ掘下げ状況（南西から）

松原所在遺跡第17トレンチ掘下げ状況（南西から）

松原所在遺跡第17トレンチ北東壁断面（南西から）

松原所在遺跡第18トレンチ掘下げ状況（南東から）

松原所在遺跡第19トレンチ掘下げ状況（北西から）

本高弓ノ木遺跡調査地遠景（北から）

本高弓ノ木遺跡第 1 トレンチ掘下げ状況（南から）

本高弓ノ木遺跡第 1 トレンチ南壁断面（北から）

本高弓ノ木遺跡第 2 トレンチ掘下げ状況（南から）

本高弓ノ木遺跡第 2 トレンチ東壁断面（西から）

本高弓ノ木遺跡第 3 トレンチ掘下げ状況（西から）

本高弓ノ木遺跡第 3 トレンチSD-01検出状況（北東から）

本高弓ノ木遺跡第 4 トレンチ掘下げ状況（西から）

本高弓ノ木遺跡第 4 トレンチ北壁断面（南西から）

本高弓ノ木遺跡第 5 トレンチ掘下げ状況（東から）

図版 8

本高弓ノ木遺跡第 5 トレンチ北壁断面（南東から）

本高弓ノ木遺跡第 6 トレンチ掘下げ状況（西から）

本高弓ノ木遺跡第 6 トレンチ北壁断面（南西から）

本高弓ノ木遺跡第 7 トレンチ掘下げ状況（西から）

本高弓ノ木遺跡第 7 トレンチ北壁断面（南西から）

本高弓ノ木遺跡第 8 トレンチ掘下げ状況（東から）

本高弓ノ木遺跡第 8 トレンチ西壁断面（東から）

本高弓ノ木遺跡第 9 トレンチ掘下げ状況（南から）

本高弓ノ木遺跡第 9 トレンチ遺物出土状況（南から）

本高弓ノ木遺跡第10トレンチ掘下げ状況（南西から）

本高弓ノ木遺跡第10トレンチ西壁断面（北東から）

本高弓ノ木遺跡第11トレンチ掘下げ状況（北から）

本高弓ノ木遺跡第12トレンチ掘下げ状況（南西から）

本高弓ノ木遺跡第13トレンチ掘下げ状況（北から）

本高弓ノ木遺跡第14トレンチ掘下げ状況（南東から）

本高弓ノ木遺跡第15トレンチ掘下げ状況（東から）

図版10

宮谷古墳群調査地遠景（北西から）

宮谷古墳群第１トレンチ掘下げ状況（東から）

宮谷古墳群第２トレンチ掘下げ状況（北西から）

宮谷古墳群第２トレンチ遺物出土状況（南西から）

宮谷古墳群第３トレンチ掘下げ状況（北から）

宮谷古墳群第５トレンチ掘下げ状況（北から）

徳尾古墳群第１トレンチ掘下げ状況（南西から）

徳尾古墳群第１トレンチ周溝部断面（西から）

徳尾古墳群第２トレンチ掘下げ状況（北西から）

徳尾古墳群第３トレンチ掘下げ状況（西から）

天神山遺跡第１トレンチ掘下げ状況（北東から）

天神山遺跡第２トレンチ掘下げ状況（西から）

天神山遺跡第２トレンチ東壁断面（西から）

天神山遺跡第２トレンチ遺物出土状況（北から）

里仁36号墳調査地遠景（南東から）

里仁36号墳第１トレンチ掘下げ状況（北西から）

図版12

里仁36号墳第１トレンチ西壁断面（北から）

里仁36号墳第１トレンチSK-01検出状況（北西から）

里仁36号墳第２トレンチ埋葬施設検出状況（東から）

里仁36号墳埋葬施設内遺物出土状況（東から）

城山城跡第１トレンチ掘下げ状況（北東から）

城山城跡第２トレンチ掘下げ状況（南西から）

城山城跡第３トレンチ掘下げ状況（南東から）

卯垣古墳群第１トレンチ掘下げ状況（南東から）

蔵見古墳群第１トレンチ掘下げ状況（北東から）

蔵見古墳群第２トレンチ掘下げ状況（東から）

蔵見古墳群第３トレンチ掘下げ状況（南西から）

蔵見古墳群第４トレンチ掘下げ状況（北東から）

蔵見古墳群第５トレンチ掘下げ状況（北東から）

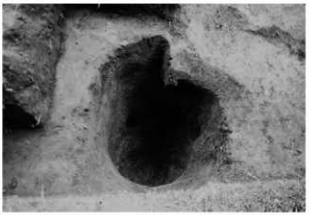
最勝寺山城跡第１トレンチ遺構検出状況（南東から）

最勝寺山城跡第１トレンチ遺構・完掘状況（北東から）

最勝寺山城跡第１トレンチSK-02検出状況（北東から）

図版14

最勝寺山城跡第１トレンチ拡張掘下げ状況（北から）



最勝寺山城跡第１トレンチSK-03完掘状況（北から）

津ノ井49号墳調査地遠景（北から）

津ノ井49号墳第１トレンチ掘下げ状況（北から）

海士所在遺跡調査地第１トレンチ遠景（北東から）

海士所在遺跡第１トレンチ掘下げ状況（東から）

海士所在遺跡第２トレンチ遠景（南から）

海士所在遺跡第２トレンチ掘下げ状況（東から）

分布調査陣城（付城）遺構北側の横堀

分布調査久松山南斜面　矢穴の残る石

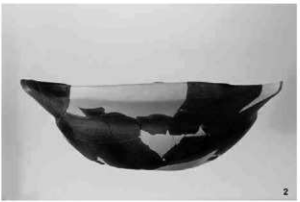
分布調査久松山南斜面矢穴の残る岩盤

鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ溝状遺構（北から）

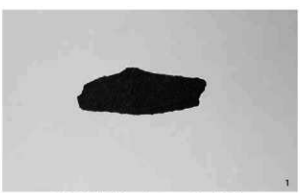
鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ全景（西から）

鳥取城三ノ丸跡第２トレンチ全景（西から）

図版16



大坪大縄手遺跡第46・第47トレンチ出土遺物



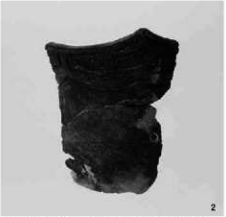
殿所在遺跡第１トレンチ出土遺物

松原古墳群第10トレンチ出土遺物

本高弓ノ木遺跡第２・第６トレンチ出土遺物

本高弓/木遺跡第６・第９トレンチ出土遺物

里仁36号墳出土遺物



天神山遺跡第２トレンチ出土遺物

鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ出土遺物

鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ出土遺物

鳥取城三ノ丸跡第１トレンチ出土遺物

鳥取城三ノ丸跡第２トレンチ出土遺物

鳥取城三ノ丸跡第２トレンチ出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいせい20　(2008)　ねんど　とっとりしない いせきほっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	平成20（2008）年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	加川　崇　坂田邦彦　細田隆博　前田　均　山田真宏　谷口恭子　田鍬美紀
編集機関	鳥取市教育委員会
所在地	〒680-8571　鳥取県鳥取市尚徳町116番地
発行年月日	2009年3月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（よりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
大坪大縄手遺跡（おおつぼおおなわていせき）	とっとりしあおやちょうおおつぼ 鳥取市青谷町大坪	3120	青谷 1~402	35°29′28″	134°0′48″	20071107～20080109	203.7	ほ場整備
殿所在遺跡（とのしょざいいせき）	とっとりしけたかちょうとの 鳥取市気高町殿	3120		35°27′17″	134°02′04″	20081007～20081008	16	電話基地新設
勝見谷奥所在遺跡（かちみたにおくしょざいいせき）	とっとりしけたかちょうかちみ 鳥取市気高町勝見	3120	気高 364	35°30′36″	134°02′53″	20080507～20080508	16	電話基地新設
松原古墳群・所在遺跡（まつばらこふんぐん　しょざいいせき）	とっとりしまつばら 鳥取市松原	3120		35°29′36″	134°08′06″	20071107～20071210 20081020～20081106	213.2	道路整備
本高弓ノ木遺跡（もとだかゆみのきいせき）	とっとりしもとだか 鳥取市本高	3120	鳥取 3-0388	35°29′08″	134°11′42″	20080304～20080318 20080409～20080515	255	道路整備
宮谷古墳群（みやたにこふんぐん）	とっとりしみやたに 鳥取市宮谷	3120		35°29′29″	134°11′41″	20080924～20081001	27.7	道路整備
徳尾古墳群（とくのおこふんぐん）	とっとりしとくのお 鳥取市徳尾	3120		35°27′47″	134°12′57″	20080808～20080811	8.8	砂防工事
里仁36号遺（さとに36ごうふん）	とっとりしさとに 鳥取市里仁	3120	鳥取 1-0292	35°29′51″	134°11′58″	20071113～20071127	24.6	宅地造成
天神山遺跡（てんじんやまいせき）	とっとりしてんじんやまちょうみなみ 鳥取市湖山町南	3120	鳥取 1-0327	35°30′29″	134°10′43″	20080618～20080627	22.2	下水整備 宅地造成
城山城跡（しろやまじょうせき）	とっとりしこくがちょうたかおか 鳥取市国府町高岡	3120	国府 2-0010	35°28′31″	134°17′49″	20081010～20081017	41.2	砂防事業
卯垣古墳群（うがきこふんぐん）	とっとりしこずいたに 鳥取市小西谷	3120		35°29′50″	134°15′37″	20081104	9	電話基地新設
蔵見古墳群（くらみこふんぐん）	とっとりしふくべちょうくらみ 鳥取市福部町蔵見	3120		35°31′49″	134°18′32″	20080507～20080512	39.1	砂防事業
最勝寺山城跡（さいしょうじやまじょうあと）	とっとりしかわはらちょうかたやま 鳥取市河原町片山	3120	河原 1-0090	35°24′44″	134°11′20″	20080304～20080306 20080318～20080619	19.5	電話基地新設
津ノ井49号墳（つのいゆごうふん）	とっとりしつのい 鳥取市津ノ井	3120		35°27′53″	134°15′29″	20081010	5.3	資材置き場建設
海士所在遺跡（あもうしょざいいせき）	とっとりしふくべちょうあもう 鳥取市福部町海士	3120	福部 1-0229	35°32′57″	134°16′5″	20081128～20081130	37.4	道路整備
鳥取城三ノ丸跡（とっとりじょうさんのまるあと）	とっとりしひがしまち 鳥取市東町	3120	鳥取 2-0211	35°30′21″	134°14′15″	20080507～20080527	21.4	学校建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坪大縄手遺跡	散布地	縄文	土坑	縄文土器	試掘調査として実施
殿所在遺跡	散布地				試掘調査として実施
勝見谷奥所在遺跡	散布地				試掘調査として実施
松原古墳群・所在遺跡	古墳・散布地	古墳		須恵器	試掘調査として実施
本高弓ノ木遺跡	集落跡	縄文・古墳	土坑、溝	縄文土器、土師器	試掘調査として実施
宮谷古墳群	古墳	古墳	埋葬施設	須恵器	試掘調査として実施
徳尾古墳群	古墳	古墳	周溝		試掘調査として実施
里仁36号墳	古墳	古墳	埋葬施設	銅鏡、鉄剣・鉋	試掘調査として実施
天神山遺跡	集落跡	中世	溝	縄文土器、田下駄	試掘調査として実施
城山城跡	城跡	中世			試掘調査として実施
卯垣古墳群	古墳	古墳			試掘調査として実施
蔵見古墳群	古墳	古墳			試掘調査として実施
最勝寺山城跡	中世城館跡	縄文	土坑、ピット	縄文土器	試掘調査として実施
津ノ井49号墳	古墳	古墳	埋葬施設	土師器	試掘調査として実施
海士所在遺跡	散布地				試掘調査として実施
鳥取城三ノ丸跡	城跡	中世・近世	郭	瓦、陶磁器	試掘調査として実施 詳細分布調査として実施

平成20(2008)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成21(2009)年3月発行

編集　鳥取市教育委員会
発行　〒680-8571　鳥取県鳥取市尚徳町116番地
TEL (0857) 20－3367

印刷　綜合印刷出版株式会社
〒680-0022　鳥取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23－0031